

「アルテファクト」

ARTEFACT

03

「特集」
海／都市の気配



【編集】

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト（本間友・新倉慎右・松谷美美）

【企画制作】 Rhetorica（松本友也・瀬下翔太）

【アートディレクション/デザイン】 太田知也（Rhetorica）

【表紙・扉写真】 吉屋亮（Rhetorica）

【協力】 リリス・アイヴァジャン、ベネデッタ・パチーニ、芹澤なみき

【発行】

慶應義塾大学アート・センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

03-5427-1621

<http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact>

2020年3月5日

本誌は令和元年度港区文化プログラム連携事業「都市のカルチュラル・ナラティブ：地域文化資源ディスカバリー 地域文化を再発見する講座」の一環として制作されました。

Edited and Planned by the Cultural Narrative of a City project

(Yu Homma, Shinsuke Niikura and Fumi Matsuya)

Editorial Produced by Rhetorica (Tomoya Matsumoto, Shota Seshimo)

Art Directed and Designed by Tomoya Ohta (Rhetorica)

Cover and Chapter-title page Photography by Ryo Yoshiya (Rhetorica)

Assisted by Lilith Ayzazyan, Benedetta Pacini and Namiki Serizawa

Supported by FY2019 Minato Cooperation Project for Cultural Program

Published by Keio University Art Center

2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345, Japan

+81-3-5427-1621 <http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact>

5 March 2020





— 都市のカルチュラル・ナラティブ「ARTIFACT」 —

2019年度、「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトは、令和元年度港区文化プログラム連携事業、および、平成31年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業の指定を受け、一連のイベントを実施しました。

プロジェクト・マガジンである「ARTIFACT」では、レファレンスを追記した書き起こしやレポート等によって、これらのイベントの内容を記録しています。イベントに参加できなかった人も、本誌を手取ることで、カルチュラル・ナラティブを知り、楽しむことができます。そのような誌面を作るため、あえてイベントの時系列とは異なる掲載順をとり、記録だけではなく、マガジンとしての企画記事も含めた構成にしています。

令和元年度港区文化プログラム連携事業

「地域文化資源デイスカバリ」地域文化を再発見する講座」

平成31年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業
「都市のカルチュラル・ナラティブin港区」大学ミュージアムを核とする地域文化資源の連携・国際発信・人材育成事業」

●六本木アートナイト×カルナラ

「アートナイトを語る——My Night, Christian's Workshop」

2019年4月5日〜6月26日

場所・慶應義塾大学三田キャンパス、六本木ヒルズほか

参加者・14名

ファシリテーター・市川佳世子、本間友、高比良明子（慶應義塾大学）

●ドキュメンタリー映像上映会

「港画」都市と文化のビデオノート」

2019年5月26日（日）13:30〜16:00

場所・慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール

参加者・44名

登壇者・阿部理沙、藤川史人、大川景子

デイスカッション・久保仁志（慶應義塾大学アート・センター）

●地域文化資源再発見ワークショップ「カルナラ・コレッジ」

2019年8月23日（金）、10月31日（木）、11月29日（金）

2020年1月24日（金）18:30〜20:30

場所・慶應義塾大学三田キャンパス、芝浦区民協働スペース

参加者・20名

講師・市川佳世子、本間友、松谷美実、市古みどり（慶應義塾大学）
チューター・高比良明子（慶應義塾大学）

●国際カンファレンス「UMAC東京セミナー」文化コモンズとしての大学ミュージアム——ミュージアムにおける領域横断型研究・教育」

2019年9月9日（月）・10日（火）

場所・慶應義塾大学三田キャンパス北館・東館

参加者・72名（カンファレンス、31名（ガイドツアー）

基調講演登壇者・渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター）

慶應義塾ミュージアム・コモンズ）、Andrew Simpson (UMAC/Department of Ancient History, Macquarie University, AUS) / Judy Willcocks (Central Saint Martins, London University of the Arts, UK) / Kathryn Eccles (Oxford Internet Institute, University of Oxford, UK)

◎ガイドツアー

【コースA】大学ミュージアムを訪ねる】

明治学院大学の歴史的建造物と明治学院歴史資料館／早稲田大学 會津八一記念博物館／明治大学博物館

【コースB】大学のサイエンス・ミュージアムを訪ねる】

城西大学 水田記念博物館、大石化石ギャラリー／インターメディアテック（東京大学総合研究博物館）／東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム

【コースC】港区の文化機関を訪ねる】

泉岳寺／味の素食の文化センター／NHK放送博物館

●特別講義・見学会「国際文化会館と3人の建築家たち」

2019年10月3日（木）14:00〜17:00

場所・国際文化会館

参加者・34名

講師・松隈洋（京都工芸繊維大学教授）

●アーキテクトーク！「Whose Tokyo? The City as a Collective Project」

2019年10月3日（木）18:30〜19:30

場所・慶應義塾大学三田キャンパス旧ノグチルーム

参加者・18名

講師・ホルヘ・アルマン（慶應義塾大学理工学部准教授）

●慶應義塾三田キャンパス

建築フロムナードー建築特別公開日

2019年10月3日（木）5:50（土）10:00〜17:00

場所・慶應義塾大学三田キャンパス

参加者・旧ノグチルーム278名／演説館480名

◎建築ガイドツアー（各日10:30〜12:00）

参加者・合計93名

講師・森山緑（慶應義塾大学アート・センター）

●レクチャー・見学会「寺院再訪・寺町の形成と変容」

2019年11月25日（月）10:00〜16:00

場所・明福寺、玉鳳寺、龍源寺

参加者・34名

講師・上野大輔（慶應義塾大学文学部准教授）、中根和浩（明福寺19代住職）、村山正己（玉鳳寺住職）、松原信樹（龍源寺住職）

●東京湾再発見・アート×サイエンス講演会

「江戸前の海と文化」

2019年12月8日（日）14:00〜16:00

場所・東京海洋大学品川キャンパス白鷹館

参加者・73名

講師・川辺みどり（東京海洋大学教授）、河野博（東京海洋大学教授）、内藤正人（慶應義塾大学教授）

ART FACT

4	PREFACE まなぎしの外で都市の気配を追う 本間友
6	LECTURE 講演録「江戸前の海と文化」
7	LECTURE 「江戸前の海 学びの環づくり」 持続可能な東京湾を考える、東京海洋大学のアクション・リサーチ 川辺みどり
11	LECTURE 江戸前の魚たち その横顔と漁猟について 河野博
17	LECTURE 江戸の魚介図 食卓にのぼる食材としての魚 内藤正人
24	REPORT カルナラ・コレッジ 港区民による地域の文化資源再発見プロジェクト 松谷英美
28	COLUMN 国際文化会館 歴史のこたま リリス・アイヴァジャン
32	COLUMN 大学の建築公開事例研究 横断的プラットフォーム構築の必要性 新倉慎右
40	REPORT 「時の流れ」が堆積する三田寺町 芹澤なみき
44	FRAGMENTS 港とにおいをめぐる6章 東京湾の香を聞く Rhetorica
56	FRAGMENTS 6 Fragments on Marine Aromas: Attending to the Smells of Tokyo Bay Rhetorica
62	REPORT “The Flow of Time” Accumulated Around the Temple Town of Mita Namiki Serizawa
68	COLUMN Making Architecture Public and the Example of Universities Shinsuke Nitakura
72	COLUMN International House of Japan: Historical Allusions Lilit Ayyazyan
76	REPORT “CulNarra College” – Residents of Minato City Rediscovering the Local Cultural Resources Fumi Matsuya
84	LECTURE Images of Fish and Shellfish from the Edo Period: Seafood as an Ingredient for the Table Masato Naito
90	LECTURE An Outline of the Fish and Fishing in Edomae Hiroshi Kohno
94	LECTURE “Edomae no Umi (Tokyo Bay Fishing Ground): Creating a Learning Circle”: Action Research at Tokyo University of Marine Science and Technology for Sustainable Tokyo Bay Midori Kawabe
95	LECTURE Rediscovering Tokyo Bay: Maritime Culture of Edomae
98	PREFACE Follow a Sign of the City Outside the Gaze Yu Homma

まなぎしの外で都市の気配を追う

本間友

慶應義塾大学アート・センター所員／
慶應義塾ミュージアム・commons専任講師



「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトの活動は、今年で4年目を迎える。イベントや教育プログラムなどの企画の相談のために、あるいはちょっとした情報交換のために、地域の文化機関と言葉を交わす機会も増え、それぞれの活動や地域との繋がりが少しずつ見えてきたように思う。文化機関の活動には、土地の歴史や人々の営みといった周辺の風景が、ときにははつきりとした形をとって、あるいはひっそりとした気配として映りこんでいる。

今年、プロジェクトのイベントの多くは、高台を舞台に展開した。鳥居坂の国際文化会館、三田の寺町、

そして慶應義塾大学三田キャンパス。国際文化会館では、講演会・見学会「国際文化会館と3人の建築家たち」を開催した(28頁)。講演では、国際文化会館の建築を手がけた3名の建築家——前川國男、坂倉準三、吉村順三が、海外の建築家との師弟関係を通じて間接的に互いのキャリアを重ねあわせながら、どのような経緯をへて国際文化会館の設計に至ったのかを紹介した。見学会では、講演で語られた建築要素を見ずるとともに、コンクリートの基礎やトンネルなど、国際文化会館の建設以前、岩崎小弥太郎時代の遺構についても話が及んだ。

幽霊坂を登り、三田4丁目の寺町を訪ねた「寺院

再訪…寺町の形成と変容」では、研究者と寺院の住職のトークを通じて、寺院がこの地域に集積した理由や、江戸時代から現在にいたるまで寺町が社会においてどのような役割を果たしてきたのかを学んだ(40頁)。

慶應義塾大学三田キャンパスでは、昨年度に引き続き「建築プロムナード——建築特別公開日」を開催。2年にわたる耐震補強工事が終了した旧図書館を中心に、明治時代の擬洋風建築である演説館、旧ノグチ・ルームなど慶應義塾大学の建築を公開した。建築プロムナードをはじめとする、大学構内の建築をめぐる動きについては「大学の建築公開事例研

究」(32頁)に詳しい。加えて今年は新たな試みとして、専門家によるトークセッション「Architect」をスタートさせた。

高台には気になる記憶がある。海の記憶だ。文化機関との打ち合わせの中では、しばしば、かつて見た海の話が語られた。明治までは、三田寺町の南側すぐのところまで海岸線が迫っていたという。慶應義塾大学の、いま演説館が建つ場所は稲荷山と呼ばれ、品川の手が晴らせる場所として知られていた。そして、NHK放送博物館には、愛宕山からの海の眺めを描いた浮世絵が多数収蔵されている、といったように。

高台で語られる海の記憶は、多くは眺望と結びついている。しかし、この眺望は失われて久しい。東海道に沿っていた海岸線は沿岸の開発により遠ざかり、高層化された建築物が重ねて視界を遮っている。いまの港区では、海岸線にごく近いところではか海の気配を感じることはできない。

この都市の海——東京湾は、いまだのような姿をしているのだろうか。それを知るために、品川の東京海洋大学を訪ね、江戸前の海と文化についての講演会を開催した(6頁)。東京海洋大学では、2006年から「江戸前ESD協議会」を組織して、東京湾の歴史や現在の環境を学び、東京湾を持続的に利用する仕組みについて考える活動を行っている。東京湾をめぐる課題を考えるワークショップ、クルー

ズ船に乗って東京湾を見るイベント、漁師との街歩きなど、様々な取り組みを行っているが、人々の意識から海の存在が非常に遠ざかっていると感じるようだ。

どのような方法をとれば、港区という都市の中に、かつての記憶と繋がるような海の気配を見出すことができるのだろうか。

ひとつのヒントが、今年開講したワークショップ「カルナラ・コレッジ」の活動の中にあつた。「カルナラ・コレッジ」は、2018年に実施した「カルナラ・コミュニケーション・ワークショップ」から発展した企画で、システムデザイン思考のグループワーク、アカデミック・スキルズなど、大学での教育実践を活用して、都市の物語を自らの言葉で語る方法を学ぶ区民向けの講座だ(24頁)。物語をどう語り、他者に伝えるのか。そのアイデアを生むためにレファレンスを集め、アイデアの骨子とあわせてポスター発表としてまとめることを講座の最終課題とした。発表の中に、座学ではなく体験を通じて港区を知るといふ企画があつた。この企画で重視されていたのが、視覚にとどまらない、五感を使った体験を提示することだ。都市のカルチュラル・ナラティブのこれまでのプログラムは、慶應義塾大学アート・センターが大学付属研究所であり、それもミュージアム/アーカイヴであることから、どちらかというテキストやビジュアル・イメージを切り口とした視覚的なアプローチが多かつた。しかし、例えば視覚の外——まなざしの

外、音やかおりといった感覚を用いた場合、都市に潜む気配はどのように捉えられるのだろうか。

Rhetoricのエッセイ「港とおいをめぐる6章——東京湾の香を聞く」は、この「まなざしの外」

のもつ可能性について大きな示唆を与えてくれる(44頁)。ボードレールの詩篇や日本の香道を参照しながら、かおり／においのもつ空間への想像力について語るこのテキストからは、かおり／においが時間的・地理的なギャップを軽々とこえる様を読み取ることができる。この都市の海の眺望は、記憶の中でばかり鮮やかで、いまのわたしたちの目には映らない。しかし、まなざしの外に出てかおりを追えば、ふとした瞬間に感じる潮のにおいや、湿気を含んだ空気のおい、都市に潜む海の気配を見出すことができるだろう。

海の気配を追っていたり着いた「まなざしの外」。かおりや音は、海にかぎらず、目には明らかに映らない都市の気配を引き出す。かおりについてはまだ調査を行っていないが、音については近年、地理情報と音声ARやポッドキャストなどを重ねあわせる企画が様々に試みられている。これまでにプロジェクトが訪れた場所を、この新しい切り口で訪ねなおしたときに、どのような物語が立ち現れるのか。先行する実践を参照しながら、今後の活動の中で探っていきたい。

講演録

江戸前の 海と文化

川辺みどり「江戸前の海 学びの環づくり」——持続可能な東京湾を考える、東京海洋大学のアクション・リサーチ

河野博「江戸前の魚たち」——その横顔と漁猟について

内藤正人「江戸の魚介図」——食卓にのぼる食材としての魚

ARTIFACT 編集部 (著者作成・編集)

岡安西



「江戸前の海 学びの環づくり」

持続可能な東京湾を考える、

東京海洋大学のアクション・リサーチ

川辺みどり(東京海洋大学 海洋政策文化学部門 教授)

本日のシンポジウムのテーマは東京湾の魚ですが、私はその前段として、東京湾の昔と今の様子について、また、学生や地域の方々と一緒におこなっている活動「江戸前の海 学びの環づくり」について紹介いたします。

1 ●東京湾の今昔

自然の恵みゆたかな東京湾

東京湾は、東京都、神奈川県、千葉県にぐるりと囲まれた、長さ約50kmの閉鎖性内湾です。水域の面積は1,380km²で、流域には日本の人口の23%にもよる人々が暮らしています^①。これだけの人口と生活や経済などの多岐にわたる活動を支え、そこから出る排水を受け入れ、かつ、首都機能を維持している東京湾は、世界でもっとも過密に利用されている海と言っても過言ではありません。

一方、100年程前の湾奥部には、干潟と浅い海が広がっていました。明治41(1908)年の「東京湾漁場図」を見ると、「にら藻」(コアマモ)、「あぢ

藻」(アマモ)といった海藻の群落場、「あさり場」、「はまぐり場」、「打網場」、「腰巻場」、「あび桁網場」、「だつ流網場」などがあちらこちらに記入されています^①。当時の東京湾の随所で、実にさまざまな魚介類を対象としてさまざまな漁業が営まれていたことがうかがえます^②。

埋立地の造成と水質汚濁

ところが、この干潟や浅場は、近代化の過程、とくに戦後以降の開発によって、そのほとんどが失われてしまいました。戦前から京浜工業地帯はありましたが、高度経済成長期の1960年以降に猛烈な勢いで埋立てにより、その後も廃棄物処分場や下水道施設等の都市機能用地、交通機能用地として湾岸開発が進められました。東京都内湾について言えば、「東京港改訂港湾計画(1961年〜70年)」によって、1961年当時都内湾で活動していた17の漁業協同組合の4千余人の内湾漁業者たちは、港湾整備のために、漁業権全面放棄を余儀なくされました^③。

高度経済成長期には、環境法制度が未整備であったために、臨海工業地帯の工場から排出される化学物質などによる直接的な水質汚濁(二次汚濁)が大問題となりました。その後、1970年の国会で公害防止14法案が可決されたこと、石油危機を経た日本の産業構造の変化などにより、東京湾を含む日本の沿岸の公害問題は沈静化していきました。しかし、排水に含まれる豊富な栄養素によりプランクトンが

異常に繁殖し、その有機物による汚濁は特に東京都内湾で慢性化しています。

1990年代以降の「持続可能な開発」^④

沿岸域政策の転換

1992年リオデジャネイロでの国連環境開発会議で「持続可能な開発」を実現するための行動計画「アジェンダ21」が採択され、日本の政策も大きく転換しました。「環境基本法」(1993年)、「環境影響評価法」(1997年)が制定され、また同年「河川法」が「環境保全」や「地域住民の意見の反映」をおこなうように改正され、1999年には「海岸法」の目的に「海岸環境の整備と保全」「公衆の海岸の適正な利用」が追加されました。さらに、「沿岸域の総合的管理」を明記した「海洋基本法」(2007年)以降、陸域と一体的に行う沿岸域管理の推進が目指されています^⑤。

東京湾についても、水環境の保全が主流な施策のひとつとなりました。「東京湾再生推進会議」(2003年)や、東京湾の環境再生を目指す「東京湾再生官民連携フォーラム」(2013年)が発足し、沿岸域の自治体や関連省庁、関連団体や企業などが活動しています。

しかし、埋め立てられた今の東京湾の水際線は都市中心部から遠く、江戸前の魚介類が日常的に食卓にのぼることもなくなっています。東京湾流域で生活する市民が、東京湾について目にする機会はどうほとんどない状況で、「東京湾の環境再生に意欲を

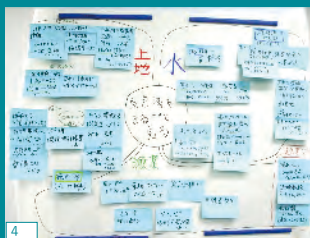
① 「東京湾環境情報センター」参照。2020年2月22日 <https://www.theic.go.jp/kankyoindex.asp>。

② 泉水宗助「東京湾漁場図・漁場調査報告 第五十二版」1908年 http://nits.fraaffrc.go.jp/book/D_archives/2009DA001.html。

③ 川辺みどり「沿岸域管理の10年と、これからの展開に向けて」沿岸域学会誌31, No.2 (2018年) : 58-62。



1



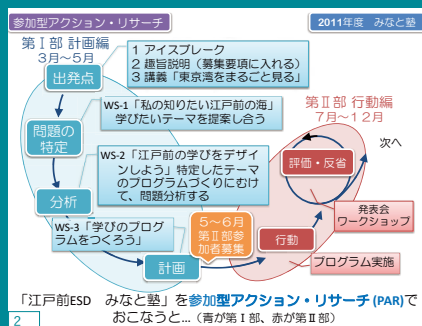
4



3



5



2

- 図1 東京湾漁場図
- 図2 江戸前みなと塾のプログラム
- 図3 第一部 趣旨説明とグループワーク
- 図4 レクチャー「東京湾をまるごと見る」から作成したお話の地図
- 図5 東京みなとクルーズ

【編集部註】

① 大野氏による東京湾についての解説は、一般財団法人みなと総合研究財団「みなと文化研究事業」『港別みなと文化アーカイブス』でもまとめて読むことができます。

<http://www.wave.or.jp/mi-natobunka/index.html>

② 国連のESDプログラムについては、永田佳之『国連ESDの10年の成果と課題』（みくに出版、2015年）などにまとめられています。

③ アクションリサーチについては、矢守克也『アクションリサーチ…実践する人間科学』新曜社、2010年、などを参照してみてください。

④ 江戸前ESDしながらわたしのレポートは、江戸前ESDのウェブサイトで見ることができます。

<http://www2.kaiyodai.ac.jp/~hirokun/edomae/sinagawajuku/page.htm>

また、今回の講演に関する資料をカルナラのウェブサイトにもまとめています。

<http://art-c.keio.ac.jp/edomaeESD>

持つ多様な人々」を見つけるのはなかなか難しいのではないかと思います。

2 ●江戸前の海 学びの環づくり

—東京海洋大学・江戸前ESD協議会

東京湾を楽しむ・考える・学びあう

ここで、東京海洋大学の「江戸前の海学びの環づくり」、通称「江戸前ESD」の活動をご紹介します^{〔註4〕}。

江戸前ESDは、環境省の「国連持続可能な開発のための教育の10年」事業採択されたことを契機に、東京湾を持続的に利用していくための「仕組み作り」に向けて、みんなで学んで考えよう、という趣旨で2006年秋に発足しました。魚類学、浮遊生物学、海洋化学、海洋物理学、沿岸域管理、資源管理、漁業経済学、教育など多様な専門分野の教員や学生を巻き込み、船の科学館、大田区郷土博物館の学芸員の方々にご協力を仰ぎつつ、東京湾沿岸を中心とした地域の住民の方々、博物館、漁業者、市民団体、行政の方々さまざまなESD活動をおこなってまいりました。

ESDとは、Education for Sustainable Developmentの略で、日本では「持続可能な開発のための教育」や「持続発展教育」と訳されています。いずれの地域にも固有の文化と歴史があり、持続的発展のありようも異なりますが、環境的分別性、社会的

衡平性、経済的効率性の三つは地域を問わずに持続可能な開発のために共通する基軸と考えられています。またESDには、学校のような「教育」ではなく、地域の人びとが互いに教え合い、また学び合うという期待がこめられているように思います^{〔註B〕}。地域で学び合うESDの方法としては、地域の方々が主体的に参加して地域の問題を特定し、分析して解決策を考え、それを実施し、評価・反省したうえで、また計画を練り直すという、プロジェクト・サイクルに則った参加型調査手法、「参加型アクション・リサーチ」がふさわしいと考えています^{〔註C〕}。肝心なことは、取り組む地域の課題を、専門家や行政機関が決めるのではなく、地域共同体から提起することです。

江戸前ESDは、大田区郷土資料館の活動プログラムや海洋環境教育プログラム作り、単発のサイエンス・カフェや一般向け講座を開催してきました。そして、東京湾の埋め立て、水質、漁業というテーマを立てて開催した「芝・品川の海を語ろう 江戸前ESDしながわ塾」(2010年)以来、ESDの本来的意義としてアクション・リサーチの実践を目指しています^{〔註D〕}。ここでは、江戸前ESDの実践を、「江戸前みなと塾」を例に説明したいと思います。

江戸前みなと塾

「江戸前みなと塾」(以後、みなと塾)は、港区民との協働プロジェクトとして、2011年4月から11

月にかけて開催されました(主催:江戸前ESD、港区芝浦港南地区総合支所協働推進課、江戸前みなと塾実行委員会)。その前に、区民の皆さんから、話を聞くだけではなく、自分たちで何かをやりたい、人材を育成したい、という要望があり、私たち江戸前ESDの側には、話し合って作り上げた東京湾管理に関する意見をどうすれば政策提案へつなげられるのか、また、地域での活動をリードし広げる人材をどこで見つけることができるのかを課題に感じていました。そこで、芝浦港南地区区民参画メンバー11名と総合支所の職員3名に来学いただき、リサーチのテーマとして「海や魚を学ぶ」を設定しました。2部の構成で、「第一部学びのデザイン」では「何を学ぶのか(テーマ)」や「どういう内容にするのか(プログラム)」を自ら考え、次の「第二部学びのアクション」では、第一部でつくったプログラムを実施することとなりました^{〔図2〕}。

「第一部学びのデザイン」は、東京湾の資源・環境とその利用についての概要を共有するための講義、テーマとプログラムを考えるためのグループワークで構成されていました。水質、生きもの、漁業、開発に関わるテーマに基づき、具体的なプログラムを考え、最後に、全員で投票して実施するプログラムを選びました^{〔図3〕}。

活動編である「第二部学びのアクション」は、「江戸前漁業の世界を知ろう」と名付けられ、漁業を大テーマとしました。その理由は、プログラム案で提

〔4〕東京海洋大学江戸前ESDの活動は、川辺みどり、河野博、江戸前の環境学・海を楽しむ・考える・学びあう12章、東京大学出版会、2012年に詳しく紹介されています。また、ウェブサイトで「ニューズレター」や活動記録を閲覧することができます。http://www2.kaiyodai.ac.jp/~hirokuni/edomae/index-esd.htm.

案されたというだけでなく、漁業の今昔を知ること
で、水質の話、運河の成り立ちや海岸線の変容をも
含めて、江戸前の海の三題嚙ができると考えたから
です〔表1〕。

3 ●みんなでプログラムをつくる難しき

このように、みなと塾ではプログラムづくりから
地域の方々に関わっていただきましたが、ここには
二つの課題があると思います。

第一に、プログラムづくりに、期待したほどの

人数の申込みがなかったことです。総合支所に港区
内で募集してとりまどめいただいたところ、当初の
参加希望者は10名を切り、さびしいものでした。後
に増えたのですが、「地域の課題を見つけて学びの
プログラムをつくる」イメージや意義を伝える段階
も必要であったかと思いました。

第二に、作成したプログラム案をそのまま「第Ⅱ
部 学びのアクション」に適用することの難しさです。
たとえば、「運河の水を飲んでみよう」といった冒
険的なものは得票数が高いにもかかわらず、健康リ
スクを考えると実施できませんでした。また、講師
の手配や実施の時期を大学の事情とあわせることも

必要でした。参加された方々に主体的に関わって
いただくためには、全体の時間が不十分だったかなと
思います。

このように江戸前ESDの参加型アクション・リ
サーチは地域の方々と協働の途上にあります。

現在は、原点回帰をしながら、東京海洋大学マリ
ンサイエンスミュージアムを拠点にした活動をすすめ
ようとしており、品川周辺の漁業の変遷について漁
業者の方に語っていただく「おさかなカフェ」を企
画しているところです〔註5〕。関心のある方は、ぜ
ひご参加ください。

〔表1〕 第2部プログラム

●第1回 東京湾をまるごと見る (2011年10月8日)

- ・自己紹介
- ・浮世絵パズルゲーム (浮世絵に描かれた場所で最近撮影された写真を当てる)
- ・東京湾の概要を共有するレクチャー「東京湾をまるごと見る」(河野博)〔図4〕
- ・ワークショップ「私はこう見る、東京湾」(東京湾の良い点、悪い点、知りたい点を出す)

●第2回 昔の海苔漁業を知る:東京みなとクルーズ (2011年10月22日)〔図5〕

- ・かつて盛んだった海苔漁業を想起しながら現在の東京湊の解説を聞き、海を観察する
- ・各人が気づいたこと、興味をもったことを海図の上に記入し港の景観などを確認する

●第3回 今のアナゴ漁業を知る (2011年11月12日)

- ・現在の代表的な江戸前漁業のひとつ、アナゴ漁について研究者の視点と漁業者の体験から学び、参加者同士でこれからの東京湾の利用のしかたを考える基礎を共有する
- ・アナゴ漁の映像視聴、研究者と江戸前漁師のトーク、グループワーク、アナゴ調理と試食

●第4回 江戸前漁業を語ろう (2011年11月19日)

- ・参加者が江戸前漁業について語る
- ・第1回から第3回までのレビュー
- ・グループワーク:江戸前漁業や東京湾のこれからのための提言をまとめ、投票で江戸前みなと塾としての提言を選ぶ
- ・修了書の授与

〔5〕 おさかなカフェは、サイエンス・カフェの実践につなぐ:

Kawabe, Midori; Kohno, Hiroshi; Ishimaru, Takashi; Baba, Osamu. 2013. "A University-Hosted Program in Pursuit of Coastal Sustainability: The Case of Tokyo Bay." Sustainability 5, no. 9: 3819-3838. <https://www.mdpi.com/2071-1050/5/9/3819>

川辺みどり、神田穂太、櫻本和美「おさかなカフェ:異なる沿岸の知の出会い場として」沿岸域学会誌 26, No. 1 (2015年): 67-79. <http://www.jaczs.com/03-journal/ronbun/koukai/2013.html>

江戸前の魚たち

—その横顔と漁獵について—

河野博（東京海洋大学 海洋環境科学部門教授）

私は魚類学を専門とし、この25年間、東京湾の魚類を研究しています。さらにここ15年ほどは川辺先生と共に、江戸前の海の歴史の勉強会や、今後どのような海にしていきたいのかといった合意形成の試みを、教職員や学生たち、さらには地域の方々とすすめてきました。

本日は、江戸前の魚たちについて、単に魚の種類や生態の話ではなく、魚をとりまく事々、あるいは漁業や流通など人間との関わりなどを、縄文時代から現代まで駆け足にご紹介したいと思います¹⁾。

1 ●江戸前の魚たち

縄文時代と現在で、江戸前で獲られた魚の名前を比べてみると、獲られている魚類はほとんど同じだということがわかります。

1万1千年ほど前、東京湾は陸地化していました。縄文時代の始めになると、大規模な海進（縄文海進、地質学的には有楽町海進）により現在の埼玉県川越から茨城県古河あたりまで「奥東京湾」と呼ばれる

海が形成され、その沿岸には多くの貝塚が形成されました¹⁾。

クロダイやスズキなどの魚類を積極的に漁獲し、さらにハイガイやアサリ、ハマグリなどの貝類を採集していた「縄文型内湾漁撈」は、縄文時代の終わりから弥生時代、3千年ほど前にはほとんど姿を消してしまいます。

貝塚での魚類研究は、ほとんどが骨の形状に基づいており、種類の確定がなかなか困難です。しかし、少なくとも50種類以上の魚類が江戸前産として知られています。今の東京湾で知られている魚類は、私の調査では750種類前後です。とくに多摩川と富津岬の線よりも北東、「内湾北」呼んでいる海域からは170種類ほどが、また観音崎と富津岬よりも北の「内湾」と呼ばれている海域には450種類ほどが知られています。ちなみに外湾では500種類弱が知られています²⁾。

さて、江戸時代です。天正18年（1590）の家の康の江戸入府までは江戸前の海は静かだったことになっています。そもそも徳川家からすれば、人口が100人ほどの江戸の村に、一挙に1、2万といっただけの人たちが押し寄せて生活しようということですので、住む場所以外にも水や食料が足りません。そこで、極端な漁業振興や流通機構の整備がおこなわれました。

江戸時代に獲られていた魚については、考古学的資料はほとんどないとされますが、代わりに史料が

存在します。

まずはシラウオです。幕府は、摂津国佃村や大和田村の人たちを江戸に呼び寄せてシラウオを獲らせていたほか、別に「白魚役」という特権を与えられた漁師一の団があり、秋から春までは隅田川で独占的に漁をしていたとも言われています。ただ、江戸前のシラウオの漁獲は昭和39（1964）年以降ありません。

江戸入府以降、「お墨付き」を得て漁業をしていた芝や金杉（現在の港区）の猟師たちは、イシガレイやハマグリ、海藻などを幕府に献上していたようです。慶長年間（1596～1615）には、江戸前の奥ではカレイやキス、サヨリ等が地曳網で獲られていました。また、慶長9（1604）年、3代将軍家光の誕生を祝して、タイとスズキ、ボラを日本橋市場で用意したという記録もあります。少しおもしろいのが、1700年前後の貞享や元禄時代にたびたび出された「初物禁止令」で、魚を食膳にのせる季節を制限しています³⁾。例えば「かつを」は4月から、「あんかう」は11月からなのです。すでに、私たちの食卓とほとんど変わらないような魚を買い求めることができたようですが、初物に関しては私たちよりも、もっと食欲だったかもしれない。有名な「目には青葉 山ほととぎす 初鱈」は松尾芭蕉の友人山口素堂（1642～1716）の句です。

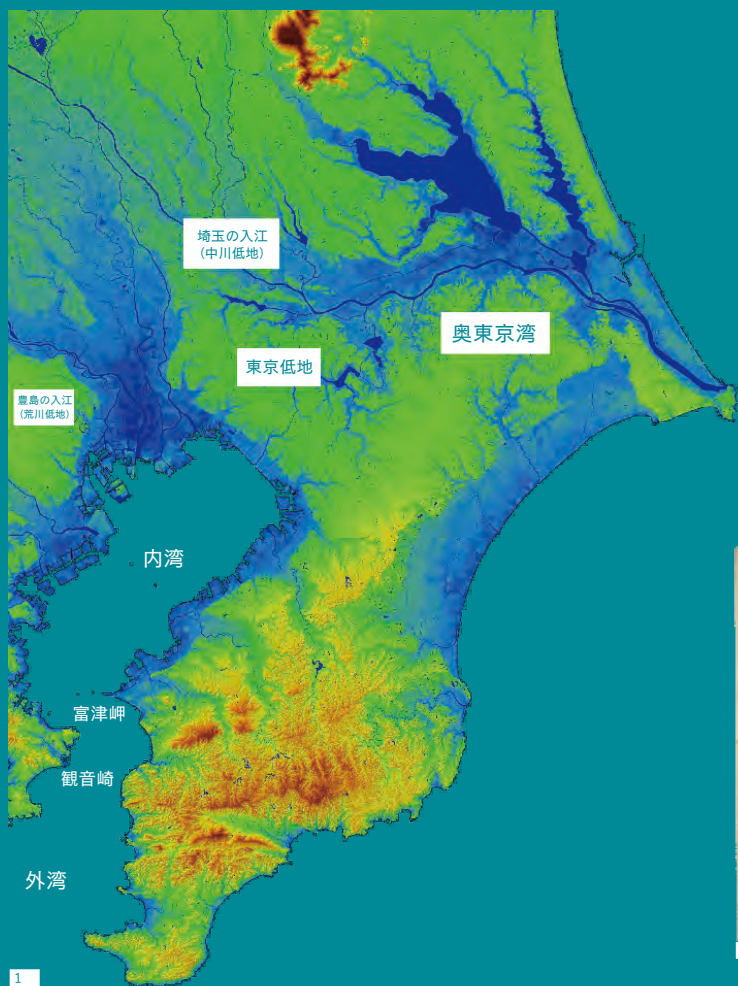
江戸入府からほぼ100年の間に、漁獵と食文化、

¹⁾ 東京海洋大学 江戸前ESD協議会、東京海洋大学附属図書館が編集、公開している「東京湾アーカイブズ」では、記事に関連する図版や史料が多数公開されています。

https://lib.s.kaiyodai.ac.jp/library/archiveway_of_edo_him/index.htm

²⁾ 河野博（監修）加納光樹・横尾俊博（編集）『東京湾の魚類』平凡社、2011年。

³⁾ 「初物禁止令」について詳しくは、法制史学会編、石井良助校訂『徳川禁令考』前集第5、創文社、1959年を参照。



1

- 図1 江戸前の海Ⅱ 奥東京湾十内湾(国土地理院デジタル標高地形図千葉県技術資料CD1-No.954より)
- 図2 長谷川雪旦「江戸名所図会 佃島 白魚網」(国立国会図書館デジタルコレクション)
- 図3 歌川広重「名所江戸百景 永代橋佃しま」(国立国会図書館デジタルコレクション)



2



3

別項: 在来型漁村

芝村の本芝と芝金杉 室町時代の紀行歌文集『廻国雑記』(文明18[1486])に細々と塩を製造するうら寂しい芝の浦が詠まれている。1500年代の小田原北条氏時代には船を使った職務の命令書が知られる。由緒では、家康が入府の時に浅瀬に乗り上げた船を助けて安全な場所へと誘導したことから「水三合船足の及ぶところであればどこでも漁をしてよい」というお墨付きをもらったとされている。

羽田村 小田原北条氏からの文書が残されている。江戸時代には、多摩川の渡し舟や年貢米、材木の運搬などの役務が与えられていた。猟師村としての形成は正保から元禄時代(1644~1704)頃、今の多摩川と海老取川の支流北側の船溜まりのある辺りに猟師たちが集まって成立したと考えられる。

南品川 明暦元(1655)年ごろ、南品川宿の猟師たちが課役の免除を訴えたところ、目黒川河口の砂洲に移住し御業役と浦役に専念することを命じられた。その後、元禄期(1688~1704)に成立。

大井御林 明暦の大火(明暦3年[1657])の前後、正保3(1646)年から万治2(1659)年に現在の京浜急行線鮫洲駅から立会川駅あたりにかけてのかつての海岸線に形成。正保3年には駿河国の仁右衛門とその一族が鮫洲に移り住んで漁業に従事し、万治2年には金杉浦の漁師が移転して漁業を営んだといわれている。

もちろん流通機構なども急速に発達しました。アンコウやカツオなどは三浦半島や房総半島の東京湾の入口や外房から常磐にかけて漁獲されますが、他にもタラやサケのような北方系やキダイやアマダイのようなやや深い場所で漁獲される魚も江戸で消費されていました。

江戸前の魚類に関する本格的な科学的調査は明治31～34(1898～1901)年に行われ、その報告書『東京湾漁場調査報告』では95種類の魚類がとりあげられています。さらに『東京都内湾漁業興亡史』(1971)では、東京都の内湾で漁獲対象となった主要な魚類が、出現あるいは漁獲されなくなった年代が紹介されています。カツオは昭和初期までとか、サバは昭和10(1935)年、ヒラメは昭和22(1947)年などです。

2 ●江戸前の漁業を支えた人たち

ここでは、特に興味深い時代である江戸時代初期に焦点をあてます。江戸時代のはじめ、漁業を振興するにあたって、とくに江戸幕府が特権を与えた猟師たちは、在来型漁村の漁民と大坂湾周辺に元々のルーツがある移住型漁民に分けられます。

在来型漁村は、御菜八ヶ浦といわれた本芝浦、芝金杉浦、品川浦、大井浦、羽田浦、生麦浦、新宿浦、神奈川浦の猟師町、および白魚役とよばれた人たちが

が代表的です〔別項〕。また、移住型漁民は、後に佃島を埋め立てた人たちと深川猟師町を成立させた人たちです。

御菜八ヶ浦とはいつても、すべての猟師町が同時に成立したわけではなく、家康が入府した1590年から1600年代にかけてバラバラに成立しています。「御菜八ヶ浦」というグループが自覚的に成立したのは享保20(1735)年と、江戸幕府が開かれてから100年以上が経った時期でした。この頃には、すでに江戸の人口が100万人に達し、それを支える漁猟活動もかなり発達し、過熱する時期でした。

一方、白魚役という特別の任務を与えられた人たちが、小網町に住まいを与えられて住んでいました。現在の中央区蛸殻町1丁目、首都高速の江戸川JCTと箱崎JCTのあたりですが、当時はもっとも重要な運河である道三堀と平川の海への出口にあたる場所でした。白魚役というぐらいですから、シラウオの漁期である11月から翌年3月までは毎朝定置網で獲ったシラウオを献上することが義務付けられていました。この期間、白魚役の漁民だけが、浅草から芝浦にいたる隅田川でシラウオを獲ることを許されていました〔図2〕。

ただ、白魚役が関西からの移住漁民なのか、あるいは元々関東に住んでいた在来の漁民なのかは不明です。あまりにも漁猟が過熱したため、寛永4(1627)年(宝永4(1707)年説も)には、篝火が危険であり船の往来にも差し支えるとして、

自肅令が出されています。また、宝暦8(1758)年ごろから乱獲による不漁の兆しがみえはじめたといえます。

次に、移住型漁民についてです。多くは摂津国西成郡の佃村と大和田村(現在の大阪市西淀川区)の出身者です。本能寺の変のあった天正10(1582)年ごろから家康に氣に入られていた佃村の森孫右衛門は、伏見城滞在中に魚を納めるだけではなく、関ヶ原の戦いや大坂の陣では隠密のような働きをしていたともいわれています。そこで、入府の際に佃村の数が、さらに慶長17(1612)年には30数名が江戸に下ってきました。江戸でも、魚介類を上納するだけではなく、道三堀の警護などにあたっていたそうです。彼らは、幕府からもらった鉄砲洲干潟の土地を造成し(正保元(1644)年に完成)、故郷の村にちなんで佃島と名づけそこに住みました〔図3〕。

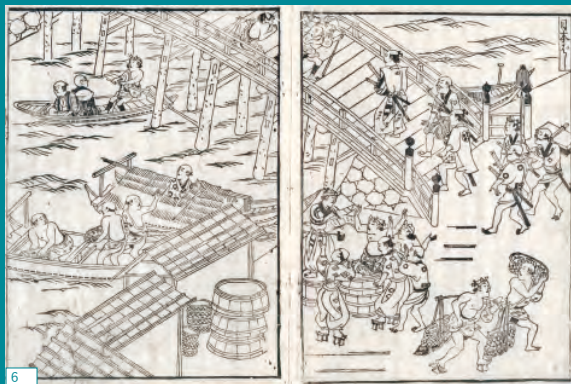
隅田川をはさんで、佃島の対岸にあたるのが深川猟師町です。現在の江東区清澄1丁目から佐賀1丁目、永代1丁目になります。深川猟師町は、隅田川の東岸、小名木川よりも下流の微高地の開発を、摂津国に加えて土佐や紀伊、近江の国の人たちが寛永6(1629)年に願い出したことが始まりです。幕府は1か月に3回、キスやスズキ、あるいは臨時にシジミやハマグリなどの魚介類の上納や役舟の負担を義務付けることで、許可しました。



4



5



6



8



7

〔図4〕 葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」(部分)

〔図5〕 港区立本芝公園

〔図6〕 菱川師宣「江戸雀日本ばし」(国立国会図書館 デジタルコレクション)

〔図7〕 溪斎英泉「木曾街道続ノ巻 日本橋雪之曙」(Museum of Fine Arts Boston)

〔図8〕 伊藤熊太郎「水産動植物生稿より「ルリハタ」」(東京海洋大学附属図書館)

こうした在来型漁村や移住型漁民によって、漁業生産は飛躍的に向上し、江戸の町にかなり多くの魚介類が供給されました。しかし、1600年代後半から1700年代にかけては、すでに猟師町や浦々同士、あるいは浦と磯付村との間で紛争が多発し、漁業資源の獲りすぎや衰退も問題となっていました。

それを受けて開催されたのが「神奈川浦会合」です。文化13(1816)年に武蔵、相模、上総3か国の沿岸44浦の代表が集まって「議定一札之事」という覚え書きを交わしました^{註4}。新規の漁具漁法を禁止し、取締法を決め、毎年会合を開くことを申し合いました。この会合によって東京湾の漁業は成熟期を迎えたといわれます。さらにこの会合の先には、明治時代の漁業法から現在までの漁業法の成立があります。

3 ● 流通と魚介

獲った魚介類を消費者に届ける流通システムも、江戸入府後に急激な発達をとげました。利根川の付け替えなどのような大掛かりな流通路の開発や、伊豆半島から房総半島周辺の浦々からの船による輸送方法の改良などが大きく貢献しています。絵画との関連でいえば、葛飾北斎の『富嶽三十六景』の「神奈川沖浪裏」の押送船は「鮮魚快速運搬船」です^{図4}。

享保7(1722)年ごろには、たとえば鎌倉郡

の腰越村では7艘の、三浦郡三崎町では14艘の、平郡勝山村(千葉県)では6艘の押送船を保有していたという記録があります。

流通の要となる市場ですが、江戸の市場といえば日本橋の魚市場です。その起源は道三堀界隈にあったといわれています。江戸入府とほぼ同時に市が立ち、本芝や金杉をはじめとした在来の漁民たちや移住漁民である森九左衛門が魚を販売していました。慶長12(1607)年に森九左衛門が道三堀から日本橋本小田原町に移転したといわれています。日本橋では、本小田原町から本船町、本船町横店、按針町と拡大して、魚河岸を形成します。現在の日本橋川の北岸、日本橋室町1丁目から日本橋本町1丁目にあたります。大正12(1923)年の関東大震災によって築地に移転する昭和10(1935)年まで、300年以上にわたって江戸・東京の人たちに魚介類を提供してきました。

一方、本芝や金杉の漁民たちは地元の本芝村に雑魚場を開きます。江戸から京に向かう基幹道路としての東海道が定められた慶長9(1604)年前後に、本芝の漁民が東海道往還にでて雑魚を売り始めた、自然発生的にできた魚市場であるとされています。その雑魚場のすぐ沖に堤防を築いて、日本初の鉄道である新橋―横浜間の線路が敷かれたのが明治5(1872)年のことです。その後も芝の浜は運河のような形で残っていましたが、昭和45(1970)年にはすべて埋め立てられて、その跡地に港区立本芝公園が整備されました^{図5}。なお、有名な落語

「芝浜」の舞台は、この芝の浜辺とその周辺です。

さて、日本橋市場の様子を描いたのが菱川師宣で、延宝5(1677)年に江戸で作製された最初の江戸地誌である『江戸雀』の挿絵として知られています^{図6}。さらに長谷川雪旦による『江戸名所図会』の「日本橋魚市」(天保5(7年))には、相当な賑わいぶりが描かれています。ほかにも多くの絵師が日本橋の魚市場を描いています。国安の「日本橋魚市繁栄図」(文化(天保年間)や溪斎英泉の「木曾街道続ノ巻 日本橋雪之曙」(天保6年)などがありません^{図7}。

日本橋魚市場や築地魚市場は、実は魚類学者にとっても標本収集の貴重な場所でした。たとえば、東京海洋大学附属図書館の第13回企画展示「図鑑で楽しむ江戸前の海」(第二期・2017年2月(3月)の「幻の魚類博物画家伊藤熊太郎」で紹介した、明治から昭和にかけて活躍した博物絵師の熊太郎の原画のメモには「東京魚市場」という記述が多くてきます^{図8}。

これまで、江戸前の魚について、魚をとりまく人々や私たちとの関わりについて、縄文時代から現代までを駆け足で眺めてきました。過去の江戸前の海に思いを馳せ、またこれからの私たちの江戸前の海の姿を思い浮かべるきっかけに少しでもなれば幸いです。

⁴ 原暉三『東京内湾漁業史 料国書刊行会 1977年。



1

2

3

4

- 〔図1〕 伊藤若冲《動植綵絵》《三の丸 尚蔵館蔵》より
- 〔図2〕 木村兼葎堂貝石標本（貝類標本）（大阪市立自然史博物館）
- 〔図3〕 沈南流（沈銓）《柘榴群禽図》（1749年、個人蔵）
- 〔図4〕 歌川国芳《通俗水滸伝豪傑 百八人之一人 浪裡白跳張順》

江戸の魚介図

―食卓にのぼる食材としての魚―

内藤正人(慶應義塾大学文学部教授/アート・センター所長)

本日の講演会では「都市の文化の物語」というテーマの下に「江戸の海」というキーワードを設定しています。サイエンスを専門とする東京海洋大学と、アート、あるいはヒューマニティを研究する我々の側とで共有可能な話題といえ「魚」になろうかと思いませんので、私からは江戸の魚介図をテーマにお話をします。なかでも、品川を含む、海に面した江戸湊というイメージから、江戸の人々が鑑賞した魚介図、あるいは、食材としての魚介図という視点を用意し、そこから江戸の美術、具体的には絵画や版画に描かれた作品をみながら考えていきたいと思えます。

1 ●江戸時代の写生的絵画

平成の後期から伊藤若冲(1716―1800)が人気を博していますが、若冲は刺激的で奇抜な表現から「奇想派」とも呼ばれています。多くの花や鳥などを描いた、花鳥画の名手です^{註A}。

彼の《動植綵絵》^{註B}は、豊かな色彩と大胆な造形とで描き上げる花鳥画集で、若冲が深く帰依した

仏教における浄土の世界を絵画化したもの、という考え方もあります。30幅描かれたこの作品のなかに魚類尽くしの図が二つあります。小ささまざまな種類の魚が、向かって左方向に進んでいく姿が描きあらわされています。この方向が、前述の西方の浄土へ向けた動き、と考えると面白いですが、登場する魚はいずれもかなり写実性を具えていて、実物の色や形状を正しく伝えようとしていることがわかります^{註B}。

若冲は京の錦小路という商店街に生まれていて、作品の背景には子供のころから目にしたさまざまな魚や蛸などの実物の記憶があることは留意すべきでしょう。また若冲の知人には、大坂の豪商で文化人の、木村兼葎堂^{けんなんどう}という人がいましたが、この人は珍奇で物珍しい文物のコレクターであり、動植物の標本も多数収集した人です^{註C}。若冲の《動植綵絵》には日本にはない貝も描かれており、こうしたものを若冲が描けたのは、兼葎堂の蒐集のおかげだ、といえそうです。

若冲が活躍した江戸の中期、18世紀前期の日本は、鎖国を保ちながらも、8代将軍徳川吉宗による享保の改革で洋書の解禁政策がとられた時代です。耶穌教(キリスト教)以外の各種西洋出版物などの輸入が緩和されたため、オランダや清国、朝鮮王朝との交易の窓口が幾分広がった時代という印象があります^{註D}。

美術史の領域からみると、日本の絵師が洋書の口

絵や挿絵、さらには西洋絵画の技法書などを目にする機会が増えたことがきわめて重要で、歴史的にみても大きな変化が生じた時代というべきでしょう。

さらに同じ頃には、長崎に来舶した沈南蘋、伊牟九ら清国の画家たちが同時代中国の新しい花鳥画をもたらし、のちに若冲や円山応挙など、18世紀後期の新たな絵画の誕生に大きな影響を与えました^{註E}。つまりこの時代には、合理的な西洋絵画表現の流入と、やはり理知的な花鳥を描く新しい清朝絵画の到来から、日本にはそれまでにはない、写生的な絵画が誕生したと言えるのです。

応挙や若冲は実際に、即物写生、つまり実際の花や鳥などを見て描いています。絵画とは人の精神活動の所産ですから、絵画制作の際には、先行する他者の絵をもとに作画する、というのが当時としては当たり前の常識でした。それが、実物の観察から作画する姿勢にスイッチしたことは、18世紀後期の絵画の変革です。

2 ●浮世絵のジャンルと魚介図

魚介図について考えると、さらにあと、19世紀の幕末期には魚介図が浮世絵の主題となった点が非常に興味深く感じます。浮世絵とは元々、美人や役者を絵画化する人物中心の絵だからです。魚介図が相当数描かれるようになった幕末期には、浮世絵の購買層である庶民たちの嗜好が多様化し、歌川国芳が

編集者註

▲ 静岡県立美術館が所蔵する若冲の作品が、Google Arts and Cultureで公開されています。筆遣いや絵の具の厚みが見えるほどの高解像度画像は必見です。
<https://g.co/arts/FZ5A9vZx693dK7>

■ 若冲の作品については、佐藤康宏『若冲伝』河出書房新社、2019年、狩野博幸『若冲一広がり続ける宇宙』角川書店、2010年などを参照。

■ 木村兼葎堂の貝類標本は、現在、大阪市立自然史博物館に収蔵されています。また、東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムも日本周辺の貝類標本のコレクションをもっています。LIXILギャラリーで2017年に開催された、貝のコレクターを切り口にしたユニークな展覧会「ツポーン貝人列伝」も気になります。

■ 国立国会図書館の電子展示会「江戸時代の日蘭交流」では、江戸時代の蘭学の展開と関連する資料を紹介しています。
<https://www.ndl.go.jp/nichiran/>



5



6



7



8



9

〔図5〕 葛飾北斎《富嶽三十六景 凱風快晴》

〔図6〕 歌川広重《東海道五十三次 品川》

〔図7〕 葛飾北斎《鯉魚図》（埼玉県立歴史と民俗の博物館）

〔図8〕 歌川広重《鯉》

〔図9〕 歌川広重《魚尽くし》より、〈しま鯛、あいなめに南天（あわび、さよりに桃）〉

評判をとった武者絵^④、葛飾北斎や歌川広重が活躍した風景画(名所絵)などのカテゴリーも誕生します^{⑤⑥⑦⑧}。

実は北斎と広重は、風景版画が産声を上げたほぼ同時期に、花鳥版画というジャンルを立ち上げています。江戸時代の絵画においては、題材としての花鳥とは、「鳥獣虫魚 花卉草木」を意味します。つまり、北斎も広重も、花鳥画として魚や貝を描いた、ということになるのです。

ここからは、北斎と広重の作品を、対照してみていきましょう。北斎と広重は、往時のライヴァルでもありました。ただ、北斎は、版画の作例に関する限りは、広重ほど多くの作品を残していません。北斎よりも広重の花鳥版画の方が売れ行きがよく、版画の仕事が広重に集まっていく事実と決して無関係ではありませんが、その評価はあくまでも当時の庶民の好みです。そして、広重には少ない絵画の魚介図も、北斎には比較的多くあるのが特徴です^⑨。

まず、北斎の絵に多いのが、当時の縁起物である鯉魚図です^⑩。鯉は江戸の人々には料理「鯉濃」としても親しまれていましたが、五月の端午の節句に立てられる鯉幟、あるいは鯉が滝登りする図柄など、鯉の強靱な生命力のイメージから、男児の健やかな生育への願いが託されていたことがわかります。北斎の作品には、造形的に面白表現が多くあり、長崎派と呼ばれる漢画系の画風をベースに独自にアレンジした、実に個性的な出来栄を示しています。

一方で広重の作例は、水上から泳ぐ鯉を実際に見下ろしているような、実に自然な描写です^⑪。水流を線描や藻などであらわし、鯉は写生的な、ごくごく穏当な表現に落ち着いています。北斎のように、我々も一緒に潜ってみたかのような描写とはかけ離れていますね。ここに両者の画風の相違が浮き彫りになっていますが、広重の描写は、円山応挙が18世紀後期に京で創始した写生画風をベースにしており、いわばナチュラリズムを目指した絵画表現の延長上にあるといえるでしょう。誤解を恐れずにいえば、北斎の表現は刺激的で奇抜、広重は自然で穏和、ということになるでしょうか。

縁起物である鯉は古来より多く描かれてきましたが、幕末浮世絵の巨頭たちはほかに多数の魚介図を描いています。

例えば、広重の花鳥版画集『魚尽くし』を見ると、あたかも魚屋の店頭のような印象を受けます^⑫。おそらくは、食材としての魚介図という視点で描かれており、かつてこれらの版画を購入する人たちは、高級な料亭などでお目にかかるような、各種のとれたての海の美味を、これら版画で楽しんでいたのでしょう。そう考えると、広重が描いたこの時期の魚介図は、まさに美味しそうに描くことこそが重要であった、ということになります。名所絵の大家広重は、江戸の有名な料亭を描いた異色作『高名会亭 尽』という版画集も出しています^{⑬⑭⑮}。レストランの風景と、そこで食卓に出される魚介料理の材

料、ということ、それらは表裏をなすもの、とも言えます。

実際、北斎は広重に先行して、いくつかの東海道 景画集というよりも、街道風俗の画集という感があがり、オーソドックスな浮世絵らしい人物表現が多くなっています。街道に設けられた宿場の名産品が描かれることもあり、そこに魚介も描かれた例があります。この点からも、やはり魚や貝は食べ物として描かれていることが裏付けられます。明治に近づいてくる幕末期では、写生的に描くことも確かに重要ですが、再現性の点で忠実に色や形を絵画化するよりは、むしろ「美味しそうに」描けるか否かが重要だった、ということ、もしくは非常に写實的に描けたとしても、それが見た目では美味くなさそうに描かれたとしたら、その版画は売れず、失敗するのです。商業出版物としての浮世絵版画の宿命を、そこにみることができるといえます。

3 ●江戸時代の生活と魚

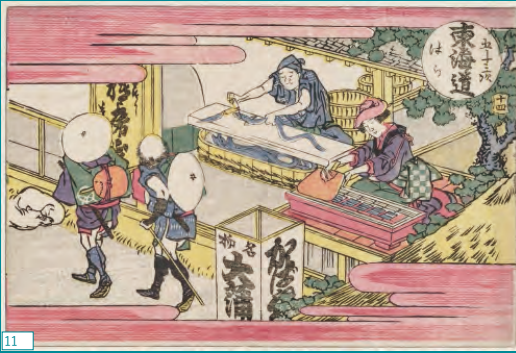
さて、こうした魚は、往時どのように販売されていたのでしょうか。近海もの、遠海もの、房総や相模湾から運ばれてくる魚たちの状況は、たとえば北斎の『富嶽三十六景』の有名な「神奈川沖浪裏」に、そのようすをみることができま^⑯。巨大な波の下方に描かれる小舟(押し送り舟)は、足の早い

⑤ 浮世絵の歴史については、小林忠ほか『浮世絵の歴史』美術出版社、1998年や、内藤正人『うき世と浮世絵』東京大学出版会、2017年などを参照。

⑥ 北斎と広重の作品の比較は、内藤正人「くへてわかる 北斎vs広重」敬文舎、2019年が豊富な図版で紹介しています。

⑦ 港区の場所としては、芝神明社内の車轍楼が描かれています。味の素食の文化センターは、役者絵と料理屋の紹介を組み合わせた「東都高名会席尽」シリーズを収蔵していますが、ここでは豊国が人物を、広重が建物や料理を描いています。

⑧ <https://www.syokubunka.or.jp/gallery/nishiki/tauto-koumei/>





〔図10〕 歌川広重《江戸高名会享尽 両国 青柳》

〔図11〕 葛飾北斎《東海道 五十三次 はら》

〔図12〕 葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》

〔図13〕 歌川国安《日本橋魚市繁栄図》

〔図14〕 歙形蕙齋《近世職人尽絵詞》（和田音五郎による模本、国立国会図書館蔵）

〔図15〕 歌川広重《東都名所年中行事 四月 日本橋初かつお》

魚介類を江戸へと運ぶ快速艇であり、この場合は相模湾からの海の幸が舶載されているはずだ。そう見ると、浮世絵はやはり江戸のリアルな暮らしとは無関係ではないことが、あらためてわかるはずだ。

船で運ばれてきた魚介類は、江戸の魚河岸に運ばれ商人たちに買われていきます。幕末の絵師歌川国安は、日本橋魚河岸の商売繁盛の様相を三枚続きの版画に描いています〔図13〕。ただ、これは娯楽として楽しむ絵柄であり、もう少しドキュメンタリー風に描いた例としては、元浮世絵師ながら津山藩松平家の御用絵師に転身した歙形蕙齋の作品があります〔図14〕。

この図は版画ではなく、絵画です。かつて老中

だった松平定信が、同時代の風俗を記録するために描かせた作例であるため、フィクション性が抑えられ、かなり実録風となっています。それにしても、満足な保冷・冷蔵施設のない時代、近海などで獲れた生の魚を漁師たちの手許から大都市の人々の食卓まで流通させた江戸時代の困難さを、思わずはいられないません。

さて、江戸っ子は初物好きでも知られます。たとえば鰯は、長生きする縁起物として、また異様に値が上がる初物として有名です。鰯も、魚河岸を経て直接料理店へ運ばれるのみならず、行商人の手に渡ることもあります。その様子を描いた版画も残って

おり、棒^{ばて}手振りと呼ばれる天秤棒を担ぐ行商の男が、仕入れた鰯を呼び声をあげて振り売りしています〔図15〕。鰯は当然足が早く傷みやすいため、なるべく早く売らないと大変なわけですが、そうした江戸の暮らしの「コマ」に息づく食材についても、これら版画を通して想像することができます〔図16〕。

以上、アートとヒューマニティーを研究する立場から、江戸期18世紀以降の絵画や版画に描かれた魚介図について、できるだけ多様な角度から見えてゆきました。絵というものの意味、あるいは役割について、これら魚介図の絵画や版画類を通じて、あらためて考察する材料にさせていただければ幸いです。

〔16〕 江戸の生活については、竹内誠『江戸文化の見方』角川学芸出版、2010年などをはじめとして、様々な書籍が出版されています。





カルナラコレッジ

港区民による地域の文化資源再発見プロジェクト

松谷 芙美

慶應義塾ミュージウム・コモンズ専任講師

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト（略してカルナラ）では、文化機関に足を運び、その体験を自らの言葉にして発信できる人材の養成を目的としたカルチュラル・コミュニケーション・ワークショップを実施している。2018年度にスタートしたこのワークショップは、慶應義塾大学の学生を主な対象として、システム×デザイン思考^①の手法を取り入れ行われた。このシステム×デザイン思考の手法から得られた知見からは、母国に帰った留学生が身近な人々に文化的体験を話すという行為が、付加的な価値を生む可能性を見出すことができた。そこで、ワークショップの成果として、SNSでの情報発信および、学生たちの執筆した原稿を「ARTEFACT 02」の付録として制作することを試みた^②。

2019年度は、これらの成果を踏まえ、港区民を対象にした「カルナラ・コレッジ」を開講した。「カルナラ・コレッジ」では、参加者の属性や経験も多岐にわたるため、体験を文章にすることにこだわらず、「自らの関心を軸に地域の文化資源を広める」ためのアイデアの創出を目指すことにした。「カルナラ・コレッジ」のプログラムは以下の通りである。

1 ●物語の軸を作る 「地域の文化資源の魅力を広める」という目的のために、自分が何をしたいか、自らの関心軸を探った。システム×デザイン思考の手法を取り入れ、「自分が〇〇する」（問題定義）

ことよってどのような価値が生まれる（提供価値）のか、それどのように解決する（ソリューションコンセプト）のかという全体像を描くことを目指した^③。第2回への課題として、自分の考えたアイデアと類似する活動について具体的な実施例を探索し、その結果に基づいてアイデアをより具体化する作業を個々に行なった^④。

2 ●物語を組み立てる 大学のアカデミック・スキルズ^⑤における実践を参照し、調査を深める技法を学んだ。講師には、慶應義塾大学三田メディアセンターの市古みどり氏（肩書きは当時）を迎え、目的にあった情報源を見つけるための検索のコツや注意点を共有してゆく、実践的な講義となった。

3 ●アイデア・ノートを作る 中間報告として、「地域の文化資源を広める」ためのアイデアを、その類似事例と合わせて発表した^⑥。発表にあたって、関連する文献や資料（レファレンス）の収集を求めたところ、第2回の講義が生かされ、関連する論文を参照

① 慶應義塾大学SDM研究科鳥谷真佐子氏のファシリテートのもと、システム×デザイン思考ワークショップを実施した。システム×デザイン思考とは、物事を要素間の関係性（システム）として捉えるシステム思考と、チームでの観察、発想、試作を繰り返しながら共創するイノベティブな活動であるデザイン思考を併せて行うものである。システム×デザイン思考の参考文献としては以下のものが挙げられる。

前野隆司「システム×デザイン思考で世界を変える 慶應SDMアノベションのつくり方」日経BP社、2014年／慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科編「システムデザイン・マネジメントとサイバー・マネジメントとは何か」、慶應義塾大学出版会、2016年。ワークショップで行われた手法については、阿見

したり、文化機関へのインタビューを行い、自らのアイデアの補強に生かした参加者もいた。

4 ●物語を語る 第3回の発表を踏まえて、アイデアを4枚のワーポイントにまとめてもらい、それをポスター印刷し、成果発表を行なった「**図4**」。メンバーの発表を聞いた感想を黄色いポストイットに、自分の企画への気づき（インサイト）をピンク色のポストイットに書き、それぞれメンバーと自分のポスターに貼り付けながら、メンバー同士が意見交換する時間を設けた。

「カルナラ・コレッジ」から誕生したアイデアを見ると、参加者それぞれの背景と、文化資源への関心が明らかに。コレッジには、港区の歴史に詳しく、ボランティアガイドを務めている、写真家や博物館のワークショップを指導しているなど、すでに実践を積んでい

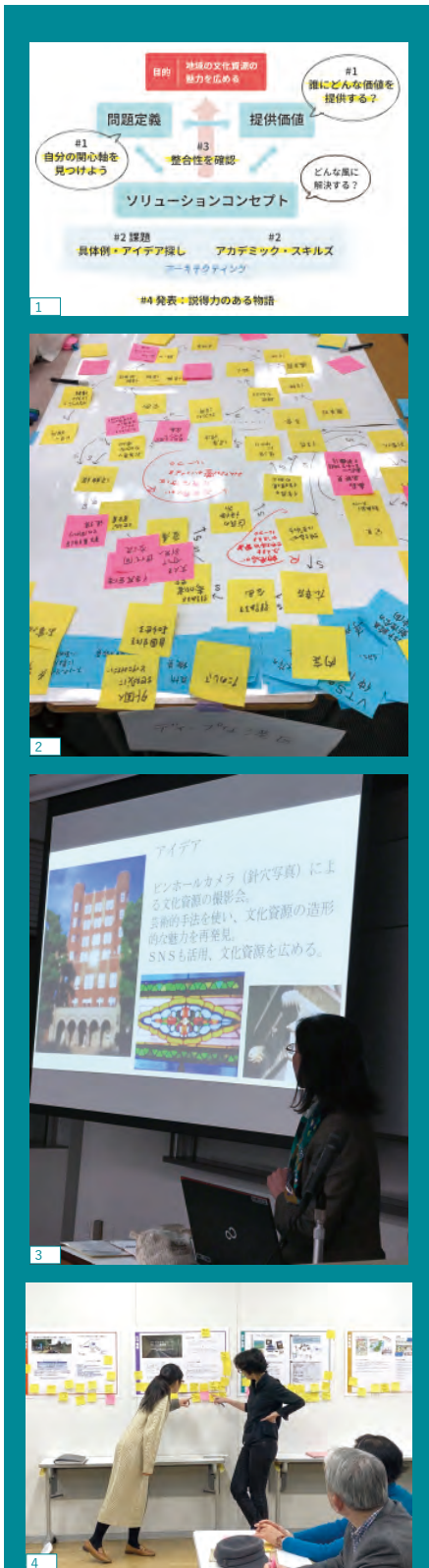
る方と、普段は別の仕事をしており、文化に関わるイベントなどに興味がある方、大学生など、年齢や経験も様々なメンバーが揃った「**図5**」。実践をつみ、経験豊かな参加者は、すでに様々な構想が頭にあっただろう。第1回のシステム×デザイン思考ワークショップによって、「とことん自分の好きなことをして地域の文化資源の魅力を広めよう」と思いを確かにした参加者もいれば、「ピンホールカメラの思い通りにならない意外性を売りにしよう」「芸術作品の画面のみが注目されがちなか中、額縁やフレームを切り口にしよう」といった、もともと持っていた関心の焦点を、このワークショップで明確にした参加者もいた。

第2回にアカデミック・スキルの講義を盛り込んだように、カルナラ・コレッジが大学で行われる講座として終始大切にしていたのがレファレンスを集めることと、類似する企画に参加してみることが。最初は論文を探して読むことへのハードルの高さを訴える参加

維ズ「Cultural Value Chain Analysis」視野の拡大と共有「慶應義塾大学アート・センター編「ARTEFACT02」2019年3月、10〜13頁に詳しい。

2018年度のワークショップについては、市川佳世子「カルチュラル・コミュニケーション」なるラナー「ARTEFACT02」71〜9頁を参照。

- 【**図1**】 カルナラ・コレッジのプログラムとワークショップの概念図
- 【**図2**】 実施したワークの一つ「因果ループ図」
- 【**図3**】 #3 アイデア・ノートを作る（中間報告）
- 【**図4**】 #4 物語を語る（ポスター発表）



者も多かったが、最終回の発表時には、私たちの予想を超える分厚いアイデアノート（企画の構想のために集めたレファレンスや情報をまとめたファイル）も提出された。参加者からは「すでによく知っていると思っていた『馬』に関することも、調べたら知らないことが沢山あって面白かった」、「なかなか普段は本を読まないが、専門書を読んでみた」、「味の素食の文化センターのイベントに参加して、再見された江戸前のお寿司を食べて刺激を受けた」などの声もあり、今回の講座をきっかけにして、企画立案だけにとどまらない学びや体験があったようである。

最終回の発表では、興味深く、実現させたいアイデアが多数集まった^{表1}。ここに、いくつか魅力的なアイデアを紹介したい。

「文化資源を活用したクイズラリー」の企画は、寺院の前に設置された掲示板にある文言（掲示伝道）に注目したことから生まれたアイデアである^{図6}。「何不足 自分で作れぬもので生かされて」など、確かに目を引く印象的な文言が掲示されている寺院の掲示板。調査によって、仏教伝道協会では、近年「輝け！お寺の掲示板大賞」(<http://www.bdk.or.jp/kagyake2018/publication.html>)と5つたいべントが開催されていることがわかった。企画者は、掲示伝道の歴史や由来を問い合わせ、近所の寺社を約50箇所調査するなど、大変魅力的なアイデアノートを完成させた。

「文化資源からハイキング」は、町歩きツアーに健康管理アプリの視点を盛り込んだものであった。ツアーを選択するとそのツアーによって消費されるカロリーが表示される、ダイエットの計画によって

オススメのルートが提示されるといったアイデアは、実際にアプリ開発への展開可能性を伺わせる企画であった。

現代の社会問題に関わるテーマも提出された。「街はどう変わったか？」は、再開発で昔ながらの風景が失われていく港区の今を危惧しての企画であった。「みんなと暮らす街」は、在勤者が、区の施設や文化施設をあまり利用していないのではないかとという視点から生まれたアイデアである。文化施設や寺社を解放し、居場所を求める人とマッチングさせる取り組みで、地域との繋がりが希薄になりがちな現代に、特別なイベントがなくても、立ち入って良い居場所を作るという視点は重要ではないだろうか。

この視点は「寺らしい美術館」の企画とも共通する^{図7}。混雑していて、鑑賞するだけで疲れきってしまう現代日本の展覧会のあり方に対し問題を提起するものである。文化資源の魅力を伝えるためには、観光者向けのサービスとしてイベントを企画することが期待される傾向にあるが、かえって何もしない、自由に立ち入って良いという居心地の提供が何よりも喜ばれることがある。そんな現在の文化資源をめぐるジレンマが今回の講座からも浮き彫りとなった。

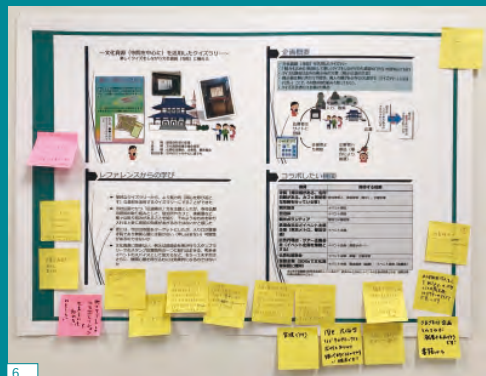
魅力的な企画の数々はまた構想の段階である。もしこのレポートを読んで、コレジ参加者の企画に興味を持った方がいたら、ぜひカルナラ事務局にお問い合わせ頂ければ幸いである。

¹ 慶應義塾大学教養研究センターで行われているセミナーで、「自ら考え、調べ、論ずること」の体得を目指して、問題意識の喚起、具体的な問題発見に始まり、問題解決に至るまでに必要とされるさまざまな学問的・知的作業のためのスキルを身につけることを目指して行われている。参考：市古みどり・上岡真紀子・保坂睦「資料探索入門」レポート、論文を書くために「アカデミック・スキルズ」、慶應義塾大学出版会、2014年。教養研究センターのウェブサイトで、アカデミック・スキルズの講義ビデオも紹介されている：<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php>

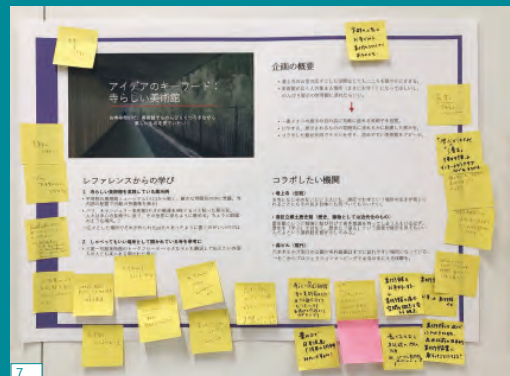
タイトル	企画内容（※筆者が発表内容を元にまとめたもの）
みんなと暮らす街 あなたが落ち着く・自分らしくいられる居場所を見つける	居場所を求める人と場所とのマッチングを図る 手法：居場所となる場所の情報収集、発信、場所づくり
フレームの実力を知ろう 伝統工芸士さんとともに	額縁や表具を行う伝統工芸士の技術を知り、体験し、フレームに注目して鑑賞する 手法：レクチャー、ワークショップ
寺社境内で体験乗馬会を開催。流鎗馬も！	寺社境内で体験乗馬会と流鎗馬を開催し、技能継承と馬の文化を伝える 手法：乗馬・流鎗馬イベント
街はどう変わったか？～消えた、或いは消えゆく風景を探る	三田小山町など再開発で変貌する街の過去を探り、伝える 手法：調査、街歩きツアー
令和二年・できたてスポットから江戸時代の町を覗いてみると	古いものだけでなく、今時のスポットや「食」などに注目し、五感を使った歴史散歩をする 手法：街歩きツアー、体験
文化資源を活用したクイズラリー 楽しくクイズしながら文化資源（寺院）に触れる	寺院にある掲示板（掲示伝道）などを使ったクイズラリー 手法：クイズラリー
文化資源からハイキング	健康管理（ヘルスクア）の観点を盛り込んだ町歩きツアー 手法：コースの設計、アプリ開発
寺らしい美術館	寺社のように、くつろいだ雰囲気の開かれた美術館作り 手法：くつろぐための空間設計と展示構成
映像の元祖・ピンホール写真で文化財を再発見	手作りピンホールカメラをデジタル一眼レフに装着しての撮影会と意外性のあるタイトルをつけ、写真をSNSで拡散する 手法：ワークショップ

「案1」
カルナラ・コレッジ
'19 企画
覧

5

「図5」 #1 物語の軸を作る（システムデザイナー）思考ワークショップ
「図6」 発表より…文化資源を活用したクイズラリー
「図7」 発表より…寺らしい美術館

6



7

国際文化会館 歴史のこだま

文学を勉強してきた私は数年前まで、建築にはさほど興味を持つたことがなかった。建物がどのような時代に、どの様式で建てられたかは特に気にしていなかったが、それでも、巨大な建物や何十年、何百年の歴史を壁の中に抱いている建築は確かに興味深いものと感じていた。しかし、私の視界からなくなった途端にその存在を忘れてしまっていた。

建築に対する見方が変わったのは「ゴシック」に出会った時であった。ゴシックは私にとって非常に魅力的だった。何世紀にもわたって広がり、西ヨーロッパの建築だけでなく文学や芸術にも影響を与えたゴシックの壮大な歴史は轟惑的だ。この出会いは私にとって転機だった。以来、ゴシックは、建築の様式としても、文学のジャンルとしても私の心を強く掴んだ——飛梁、穹窿、尖頭アーチ、採光のためのユニークな設備……^{〔図1〕}。この上なく素晴らしかった^{〔註1〕}。

一方で、残念なことに、ゴシックへ執着のために、ゴシック以外の建築様式はまるで目に入ってこなかった。「国際文化会館と3人の建築家たち」というイベントのお陰で、近代や他の建築様式に対して興味がやっと湧いてきたと言っても言いすぎではないだろう。正直に言うと今までは日本の建築にはあまり関心を持っていなかった

が、これも京都工芸繊維大学の松隈洋氏による非常に興味深い特別講義の影響で変化した。

松隈氏の講義は二部構成になっていた——国際文化会館を設計した三人の建築家たちの紹介とこのユニークなスペースが作られた際に使用された特殊な技術のまとめだ。



1

〔図1〕 ウェストミンスター寺院（撮影：Tristan Surtel）

リリス・アイヴァジヤン

慶應義塾大学文学研究科、英米文学専攻。

専門はウイクトリア朝文学とラファエル前派。

Lilith Ayvazyan

【図2】 国際文化会館



国際文化会館(図2)を共に設計し、建てた三人の建築家は前川國男(1905—1986)、坂倉準三(1901—1969)、吉村順三(1908—1997)である^{【註2】}。この三人の共通点であり、とても興味深く思われるのは、彼らが20世紀の建築を代表する二人の巨人に関わっている事である。その二人はアントニン・レーモンドとル・コルビュジエである。具体的に言うと、前川はル・コルビュジエの弟子であり、レーモンドの事務所で働いた経歴を持つ。そして、坂倉はル・コルビュジエ、吉村はレーモンドと一緒に働いていたことが知られている。

幼い頃から日本という国の文化や歴史に興味を持ち、さまざまな側面からその文化を勉強し、そして長年日本に滞在してきた結果、私は日本、特に東京を、イーストとウエストが絡み合っただけで生み出した新たな世界として見るようになった。私の未熟な意見だが、この融合は何よりも日本の街の設計、風景や建築などにはつきりと表れている。なぜなら、日本のほとんどの街角に、お寺や神社の隣に立派な洋式の建築が建つのが見える事ができるからである。

しかし、この統合には目に見えない事実も隠れているのだ。街中で目にする明治時代に建てられた「ウエスタン」風の建物の中には、「擬洋風建築」と呼ばれているものも多くある。つまり、見た目は「ウエスタン」だとしても、日本の大工の技術によって建てられているものだ^{【註3】}。擬洋風建築は、今でも全国に沢山残されている。東京近郊の作例に慶應義塾大学の三田キャンパスにある演説館、旧東京医学校本館(現総合研究博物館小石川分館)などがある^{【図3】}。

国際文化会館は当時の時代にあつた洗練された様式で設計されているが、日本建築の伝統的な発想を活かしている部分もある。それは建物の内と外の一体感である。

しかしここでは、国際文化会館の建築的な特徴について語るのではなく、その外に広がる、豊かな歴史を持つ庭について考えてみたい(建築については、松隈氏の講義がウェブで公開されているので参照のこと^{【註4】})。松隈氏の講義のあと、松隈氏と国際文化会館のスタッフによつてガイドツアーが行われた。建物は勿論のこと、古くから守られてきた庭にも特別な魅力があつた。スタッフと参加者が一体となつて、とても熱く庭の歴史が語られた^{【図4】}。国際文化会

【図3】 旧東京医学校本館（撮影：Kakidai）

【図4】 庭園を見学する参加者



3



4

館の建設当時のエピソードも話題になった——建築家たちがどのスポットを好んでいたか、どういう会話をしていたかなどについて貴重な話を聞くことができた。しかし、この庭の歴史に、宝物のような発見が待っているという事を、私はこの時点では予想していなかった。これから簡潔にだが、国際文化会館の庭の歴史を語りたい。

国際文化会館の土地は元々京極氏という武家のものだった【図5】。宇多天皇の子孫であったため、京極氏は日本の歴史上大きな権力を

持っていたと言われ、かつて織田信長、豊臣秀吉や徳川家康なども関わっていたという。しかし、幕末という激動の時代に、日本を支配していた他の大名と共に京極氏の権力も衰微した。経済的な問題もあったのだろう、いずれ、京極氏は江戸にある大名屋敷を売却する事になった。その買主は新しく生まれ変わった明治日本で初の外務卿となった井上馨であった【註5】。

井上馨は、この土地に建てた屋敷と庭園で豪華なパーティーを開いていたと言われている。彼のゲストは海外の外交官がほとんどだったが、明治天皇と昭憲皇太后を招いた天覧歌舞伎が開催された記録もある。庭園で行われた日本風のお茶会などが特に海外の人に人気であったそうだ。井上馨はこういったイベントを通じて日本の文化や歴史を海外の外交官に紹介しようとしていたのではないか。つまり、明治時代のはじめからこの土地と屋敷では国際交流を深める活動が行われていて、それは現在の国際文化会館が作られた経緯や目的に不思議にオーバラップしてくるのである。

井上馨の後、屋敷と庭園は様々な有力者の手に渡っていった。中には天皇の親戚や、赤星家と岩崎家など明治という新しい時代の形成に深く関わった人たちもいたという。その後、屋敷と土地は、第二次世界大戦前に岩崎家によって国に納められた。

国際文化会館を設立するというプランは、慈善家のジョン・D・ロックフェラー3世、そして国際派のジャーナリスト松本重治の出会いから生まれた。そして、前述のように、国際文化会館の設計をするために、当時の日本でトップに立っていた三人の建築家たちが招かれた。国際文化会館のための場所として、鳥居坂のこの土地が選ばれたのは、土地のもつ歴史ゆえと言うこともできるかもしれない。国際文化会館の建築にいまも寄り添う庭園には、徳川や明治時代から続く目に見えぬ事実が埋もれている。明治期、井上馨の時代から国際交流の推進のために開かれてきた場所の歴史が、今日の国際文化会館に継承されているのではないだろうか。



【図5】「江戸切絵図 麻布絵図」嘉永4（1851）年（国立国会図書館蔵）

【脚註】

〔1〕ゴシック建築に対する関心は、18世紀以来西洋の知識人の興味を中心にあつた。そのため、ゴシック・リウアイヴァル運動が始まり、主に西洋の建築と文字に影響を与えた。ゴシックの簡潔な歴史については、Groom, Nick. *The Gothic: A Very Short Introduction*. Oxford University Press, 2012を参照。詳細な情報については、Botting, Fred, ed. *The Gothic*. Woodbridge, D.S. Brewer, 2001を参照。アメリカン・ゴシックについてはAmfreille, Marc. "American Gothic: A New Literary History of America." Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 2009, pp. 131-136. を参照。

〔2〕三人の建築家の協同については、松隈洋「協同設計というユートピア 国際文化会館と三人の建築家」、芸術新潮 新潮社、2004年10月号、96-102頁を参照。国際文化会館で行われた講演会「Architekt - 建築を通して世界をもつ」でも、同様のテーマが語られている： https://www.t-house.or.jp/pr/programs/architekt20170906_panel/

〔3〕擬洋風建築については、Jackson, Neil. "Gaiokokuin and Gyofta: Western Architecture in Japan." <https://livrepository.liverpool.ac.uk/3009154/> を参照。また、藤森照信「日本の近代建築 上」一冊末、明治編、筑波書店、1999年11月29日刊。

〔4〕松隈氏の講義は、慶應義塾大学アート・センターのYouTubeチャンネルで公開されている： <https://youtube.com/ryfj0155bE>

〔5〕明治維新や井上馨については、Beasley, William G. *The Meiji Restoration*. Stanford: Stanford University Press, 1972 を参照。日本語の文献としては、堀雅昭「井上馨——開明的なジャーナリズム」改書房、2016年、などがあ。

大学の建築公開事例研究

横断的。プラットフォーム構築の必要性

●建築の公開と大学の建築

近年、日本のモダニズム建築が各地で解体の危機にさらされている。竣工より数十年が経過したコンクリートや鉄骨などの劣化が主な原因であろうが、関東大震災後に建設された齢100年近い震災復興建築が変わらぬ強度を保っているのに対して近代的な建築物が先に寿命を迎えていることはなんとも皮肉である。建築遺産として、傑出した近代建築を保存する必要性は論を俟たないが、明治・大正から昭和初期（戦前期）の建築物に価値を見出し、積極的に保存する動きがある一方で、戦後に建設された建築物はその対象から漏れているのが現状である。しかし、戦後からすでに70余年を数えるいま、戦後の建築物も含め、モダニズム建築全般を保全する意識を醸成することが課題となるだろう。

建築の保存に際して最大の障害となるのは、おそらく「無関心」である。建築は移動できないため、建築を「識る」にはその場所に赴き、外観を眺め、内部に入り歩き回るといふ行動が必須であり、主体的な関与を必要とする。従って価値を説くだけでは認知度は高まらず、忘れられてしまう可能性も高い。こうした事態を防ぐためには人々を建築に招き入れ

ることが必要であり、それゆえ建築においては、公開し活用することが保存に直結するのである。

本稿では以下に、大学における建築公開の事例を概観する。日本各地の大学には優れた近代建築が現存し、その多くが現役で校舎などに利用されている。建築の公開という問題設定において、大学の建築を取り上げる理由としては、多くの大学が優れた近代建築を有していること、建造物を保存しようとする基本的な姿勢があること、元来多様な人が行き交う空間であるため、公開の取り組みに積極的であることなどが挙げられよう。これらに加え、大学は建築の公開事例数も多く、建築物の公開という課題と実践を概観するのに適している。そこから得られる知見は、大学以外の建築物における公開という枠組みにおいても、大いに参考になるだろう。

現在、大学の建築公開においては、大まかにいって、ウェブサイトにおける建築物紹介と建築見学ツアーの二形式が基本となっている。このどちらか、あるいは両方を実施する大学は数多く、海外の大学でも状況はそれほど変わらない。そのため本稿では、それ以外の出色の取り組みをしている大学を取り上げたい。



〔図1〕丘のうえ 白亜の調和 甲南女子大学フォトギャラリー
甲南女子大学キャンパス（撮影：慶應義塾大学アート・センター）



2

新倉慎右

Bunkamura ザ・ミュージアム学芸員／

慶應義塾の建築プロジェクト研究員

（肩書は執筆時のもの。現在慶應義塾大学アート・センター学芸員／所員）

●事例1…甲南女子大学

神戸市にある甲南女子大学は、キャンパスのほとんどが村野藤吾（1891-1984）もしくはその事務所の設計による建築物で構成されており、日当たりの良い丘陵に広がる白亜の建築群は、さながら建築ミュージアムの様相を呈している。甲南女子大学の建築の特徴は、一人の建築家がキャンパス全体のランドデザインを構想し、大学の空間全体に調和を持った有機的な連関と調和を生み出している点にある。甲南女子大学自身もこれらのモダニズム建築の重要性を認識しており、村野没後に建設された建築物も、村野が構想した構内環境に溶け込むように配慮されている。

女子大学というセキユリテイに一層の配慮を要する特性からか、甲南女子大学は写真による建築の公開に力を入れている。大学の公式サイトとは別に特設サイト^{註1}が設けられており、ここでは村野建築の写真を多く目にする事ができる。所有する優れた建築物の写真を公開する大学は数多くあるが、大学のウェブサイトの一部に掲載されていることがほとんどで、甲南女子大学のような特設サイトを持つ大学はほとんどなく、ウェブサイトにおける写真・記事掲載の方向性で建築公開を強化した稀有な例といっていられる。

●事例2…関西学院大学／神戸女学院大学／関西大学

村野藤吾建築を擁する関西大学と、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880-1964）によるスパニッシュ・ミッション様式の建築物によってキャンパスが構成されている関西学院大学及び神戸女学院大学は構内を紹介する個人ブログなどの記事もインターネット上に多くみられ、すでに地元や建築愛好家への訴求は成功しているように見える。神戸女学院大学は女子大学であるためアクセスに制限があるが、関西学院大学は広々としたキャンパス内で大学関係者以外の人々も思い思いに過ごせることが、インターネット上でのプレゼンスにつながっているのではないかと推測される。この点は非常に重要で、都会に位置し、構内も建築物ばかりで手狭なキャンパスでは、大学への入構が制限されていなくても、周辺住民などによる訪問が減少する傾向があることと好対照をなす。

大学自体の取り組みとして注目すべきは、他大学との連携である。関西学院大学と神戸女学院大学は非常に近接して立地しているが、どちらも、ヴォーリズがキャンパスのランドデザインを描いたという点で、前出の甲南女子大学と同様にキャンパス自体が貴重な建築遺産であり、建築ミュージアムであるといえる。そしてこの二大学は、立地条件をいかして共同で建築バスツアーを実施している。この企画は、少し離れた場所にある関西大学（村野藤吾による建築が残る）を含め、三大学のヴォーリズや村野



3-1



4



3-2

図3 関西学院大学キャンパス（撮影…慶應義塾大学アート・センター）
「大学建築を探る「ヴォーリズと村野藤吾」」バスツアーとシンポジウムポスター（かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会、2017年）

による建築群をバスでめぐるのでめぐるもので^{註2}、2017年に第二回目が開催されている。二日間わたって数々の建築を見学する内容の濃いこのツアーの参加者は、ヴォーリズと村野によってほぼ同時代に作り上げられたキャンパスデザインを一度に目にする事ができる。

また、この企画にはバスツアーだけでなく、ヴォーリズや村野の大学建築を主題とするシンポジウムも含まれている。バスツアーで実際に建築を見る機会を提供しながら、より深く大学建築について考察を深めるためのシンポジウムを開催することにより、さまざまな関心をもつ幅広い層の人々に対して大学建築を普及していく試みであるといえるだろう。

大学名	建築ガイドツアー	ウェブページ記載	建築物例	特記事項
青山学院大学		○	間島記念館 ペリーホールほか	・現存していない建築物をウェブサイトで紹介
お茶の水女子大学	○	○	大学本館 大学講堂 付属幼稚園	
関西大学★	○	○	簡文館 円神館 誠之館ほか	・千里山キャンパスの村野建築をめぐるツアー ・他大学(★)と連携した共同バスツアー ・村野建築の解説と写真を掲載したウェブサイト
関西学院大学★	○	○	時計塔 ランパス記念礼拝堂 ほか	・他大学(★)と連携した共同バスツアー ・ヴォーリス建築の展覧会 ・後援会サイトにて大学とヴォーリスの関係を解説
京都大学	○	○	清風荘 文学部陳列館ほか	
九州大学	○	○	旧法学部本館 本部第一庁舎 旧工学部本館ほか	・近代建築に特化した建築ツアー開催 ・解体が決定した建築物の撮影ツアー(箱崎キャンパスの建築物は現存せず)
慶應義塾大学	○	○	演説館 旧図書館 塾監局 旧ノグチ・ルーム 図書館ほか	・近代建築に特化した建築ツアー ・学内の歴史的建築物マップ ・非公開の建築物を限定で一般公開 ・「ノグチ・ルーム」を扱った展覧会を開催 ・近代建築に関する研究会、シンポジウムを開催 ・アーカイヴで写真や図面などの資料を保存、公開
甲南女子大学		○	管理棟 学生会館ほか	・学内の村野藤吾建築を紹介する特設ウェブサイト
神戸学院大学★	○	○	総務館 ソール・チャペルほか	・他大学(★)と連携した共同バスツアー
清泉女子大学	○	○	旧島津公爵邸	・建築物年譜 ・邸内360°映像 ・バーチャル動画ツアー ・学生によるガイドツアー
東京大学	○	○	旧加賀屋敷御守殿門(赤門) 安田講堂ほか	
東京女子大学	○	○	チャペル・講堂 ライシャワー館ほか	・建築家が解説する建築ツアー(有料)
東北大学	○	○	旧東北帝国大学図書館 旧仙台医学専門学校 博物・理化学教室 旧第二高等学校書庫 ほか	・近代建築に特化した建築ツアー(不定期)
南山大学		○	神言神学院 図書館ほか	・レーモンド建築の意匠を残しつつイノベーションする様子を公開する特設ウェブサイト
名古屋大学	○	○	豊田講堂	・豊田講堂とシンポジオンを増築したアトリウムで接続、機能を拡充して学外者の利用を促進
北海道大学	○	○	札幌農学校第2農場 植物園ほか	・特設ウェブサイト ・学内の文化資産マップに説明付きで記載
武蔵野美術大学	○		本館 美術資料図書館ほか	・キャンパスの建築物設計に関係した建築家によるツアー ・建築家を主題とした展覧会 ・講演会 ・学内建築アーカイヴにて研究会、講演会開催
明治学院大学		○	インブリー館 チャペルほか	・非公開の建築物を限定で一般公開(不定期)
立教大学	○	○	寄宿舎(現2・3号館) 本館(モリス館)ほか	・専用の「RIKKYOアプリ」によりGPSを利用してセルフガイドツアーの枠組みを整備
早稲田大学	○		大隈講堂 2号館ほか	

〔表1〕 大学における建築公開事例◎旧帝国大学を中心に、歴史的建築や近代建築を有し、保存・活用につとめる大学を20校調査した。ほとんどの大学でキャンパスをめぐるツアーや公式ウェブサイトにおける建築の紹介を行っており、この2形式がスタンダードであるといえる。特に建築に特化したガイドツアーや特設ウェブサイトなど、特色ある取り組みは特記事項に示した。

●事例3…武蔵野美術大学

ここで取り上げるのは、大学の建築を手がけた建築家に関する展覧会と、それに合わせて実施された、建築家自らが引率する見学ツアーである。

武蔵野美術大学美術館・図書館で2017年に開催された「荻原義信建築アーカイブ展―モダニズムにかけた夢」^{註3}では、キャンパスの設計に携わった荻原義信(1918―2003)のアーカイヴが所蔵する、彼の代表作(大学キャンパスを含む)のデジタルデータを公開するだけでなく、映像や写真などが合わせて展示された。建築の展覧会は近年、博物館や美術館でしばしば開催されているが、大学の建築に関する展示を、大学というまさにその場所で行うことは、建築公開の一つのあり方として有効であろう。実際の建築物を見るだけでなく、図面などの資料を通じて別の視点から建築に触れる経験は、その建築が展示室のすぐ外に存在する環境であればさらに強く参加者の印象に残るはずである。

この展覧会に合わせ、建築見学ツアー「設計者とまわるムサビキャンパス」^{註4}が開催された。武蔵野美術大学において過去にも実施されているこのシリーズは、キャンパスの設計に携わった建築家^{註5}が自らツアーを実施するという形態で、通常の建築見学ツアーとは一線を画する。建築家本人が見学ツアーを実施するということは、モダニズム建築家の多くがすでに世を去っている現状を鑑みるにそれ自体が非常に貴重な機会である。また、建築家に会うという体験には、通常の建築ツアーに参加はしない

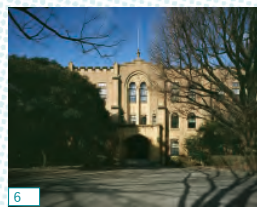
が興味は持つている、という層の背中を押しする効果もあるだろう。展覧会とツアーを組み合わせて実施することは、それぞれの固定参加者に他方への関心を促すことにもなり、広く参加者をつつめることが求められる建築公開の取り組みには非常に有効な手段である。

●事例4…慶應義塾大学

慶應義塾大学アート・センターの「慶應義塾の建築プロジェクト」は「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」を志向し、建築に関する物理的な資料だけではなく、建築物の経た時間を含む記憶そのものをアーカイヴしようとする試みである。本稿の趣旨に鑑みて重要なのは、このプロジェクトが建築物を記録するだけでなく、アウトリーチを活動の柱の一つとし、積極的に発信活動を行っている点である。また、このアウトリーチ活動が継続的に実施されていることにも注目したい。近年は「建築プロムナード」^{註6}と題してシリーズ化し、三田キャンパス内の建築物及び野外彫刻作品の所在地を示すマップやそれぞれの解説シートを配布し、大学内外の参加者を迎える建築公開イベントを毎年実施している。期間中にはガイドツアーに参加するだけでなく、マップや解説を手自由にキャンパス内を探索することもできる。そのような人々のためにモバイルアプリ「ポケット学芸員」に建築物の音声ガイドを登録し、ガイドを開きながら建築物を鑑賞できるようにもしている^{註7}。



〔図5〕慶應義塾大学図書館(設計:横文彦、撮影:新良太)
〔図6〕慶應義塾大学 塾監局(設計:曾禰中條建築事務所、撮影:新良太)



すでに述べたように、都市部の狭隘な大学キャンパスにおいては、積極的に解放しなければ構内に足を踏み入れる学外者は少なくなり、結果建築が人の目に触れる機会が減っていく。そのような場合、より積極的かつ継続的に公開イベントを実施する必要があるが、慶應義塾大学アート・センターの取り組みはその好例といえる。また、このイベントに合わせて講演会やシンポジウムなども開催されており、専門家や向学心の強い層への訴求も考えられているだけでなく、他のキャンパスの建築物もふくめ、慶應義塾の建築を主題とする展覧会も随時開催している。

◎大学建築に関わる情報共有プラットフォームの可能性

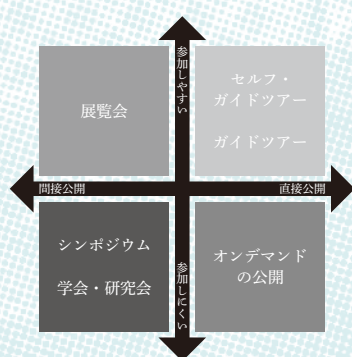
大学建築の公開は、既に述べたように、ウェブサイトにおける紹介と建築ツアーを基本的手段として進んでいる。本稿ではここまで、それに留まらない特色を持つ大学を紹介してきたが、最後にこれからの建築公開の枠組みに関して考察してみたい。

個別の大学における取り組みが進むいま、横への展開がさらなる公開と、建築の保存を促進する一つの鍵となると推測される。たとえば、見学の取り組みとしては、事例2で挙げた複数の大学をめぐるツアーの実施がその入り口になる。関西学院大学と神戸女学院大学ほどの好立地でなくとも、東京都内には優れた建築を有する大学が遠からぬ距離に存在する。バスツアーを組織せずとも徒歩と電車の利用で複数箇所を短時間で回ることができる上、ルートによっては合間に大学以外の建築物の見学を組み込める。単独の大学建築ツアーに加えて、多くのキャンパスをめぐるこのようなツアーを定期的に開催することで、特定の大学の建築のみに親しむ人々に、「大学建築」という異なる枠組みへ目を向けるきっかけを提供することができるはずである。またスマートフォンアプリを自作できるアプリなどを活用することにより、企画としての幅を拡げるだけでなく、建築に関心の薄い層の取り込みをも図ることができる。さらに、ツアー以外でも大学の建築を体験できる機会を設けることも重要である。ツアーは、建築を直接に体験し情報を得るためには最適だが、参加日

時や人数が限られるため、参加できなかった人々を建築との接触から遠ざけずに、その関心を再回収する枠組みも必要である。その点で、事例4で紹介した慶應義塾大学の「建築プロムナード」は優れた取り組みといえる。また事例では取り上げなかったが、立教大学も受験生向けの「RKKYOアプリ」で施設紹介付きのマップを提供している。GPSと連動させることで快適な建築物巡りを可能にするこのアプリは、ツアーに参加できない人や自由に建築を鑑賞したい人々へ働きかける格好の取り組みである。こうした（立教大学の言い回しを借りれば「セルフガイドツアー」）は、限られたリソースの中で、参加者の自主的な学びを引き出し、かつ公開の機会を拡大するものであり、おそらく今後他大学でも取り入れられてゆくだろう^{註9}。

最後に、これらの取り組みを一步ずつ、個々の活動を大学建築の公開と保存という大きい枠組みの中にふたたび捉えてみるために、「大学の建築フォーラム^{註9}」でも議論されたような大学の建築に特化した情報共有サイトを開設することを提案したい。現状では大学建築のイベントは、前述の連携ツアーのような複数の大学が関わる企画を例外として、各大学が個々に告知・広報するのが一般的である。これら個々の情報をまとめ、どの大学でどんな建築イベントが企画されているかという情報を概観できるようにすることで、宣伝効果が高まることはもとより、大学の建築という一つの枠組みを示すこともで

きる^{註10}。将来的には、建築家や建築の種類で検索する機能を持たせ、自らが興味を持つ建築、たとえば特定の建築家の作品や図書館建築などがどの大学にあるのかを一覧できれば、利用者に利便性だけでなく、存在すら知らなかった建築との出会いを提供することにもなる。情報へのアクセシビリティが格段に高まることで、建築への関心がさらに広がるのである。さらに情報を掲出する大学側も、他大学の公開事例を参考にしたり、共同企画の可能性を探ったりすることが期待でき、大学建築の公開の幅は全国レベルでこれまでになく広がっていくはずである。こうしたウェブサイトを各大学の建築を紹介したページなどにリンクするだけでなく、各大学の建築アーカイブとの連携を図ることで学術的な意義をも創出できるはずである。



【註9】 大学における建築公開手法のマトリックス◎建築公開イベントにおけるアクセスの容易さと公開種別を模式図に表した。アクセスが比較的困難なイベントは専門性が高くなる傾向があるが、こうした企画の敷居を低くし、一般参加者を増やしていくことが求められる。

すでに大学の博物館が連携する枠組みとして「京都・大学ミュージアム連携」「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」が存在する^[註1]。実際に後者が上記の関西学院大学などが参加するパスツアー及びシンポジウムの実施に関係していることを考えれば、

近代建築を専門的に扱う横のネットワーク作りは十分に可能であるといえる。また、日本における近代建築の現状を振り返っても、連携は喫緊の課題であり、建築の公共的性格からすると、いずれは公的機関を巻き込んだ枠組みへと育てていくことが必要だ

らう。しかしまずその第一段階として、横の連携に一定の強みをもつ大学が、大学の建築という枠組みを通じてアウトリーチを強化することは、「無関心」という近代建築の喪失へとつながる誘因を可能な限り遠ざける、有効な手段となるのではないだろうか。

【脚注】

- [1] 丘のうえ白亜の調和 甲南女子大学フォトギャラリー (<http://www.konan-wu.ac.jp/gallery/>)
 - [2] 大学建築を探る「ヴォーリスと村野藤吾」 (<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/info/detail.php?i=233>)。また、関西大学博物館では「冬季テーマ展として「関西大学と村野藤吾 設計図・建築写真・絵画」を2015年度から継続的に開催している。
 - [3] 芦原義信建築アーカイブ展「モタニスムにかけた巻」 (<https://nauml.musab.ac.jp/museum/events/12703/>)
 - [4] 設計者とまわるムサヒキャンパス (<https://nauml.musab.ac.jp/museum/events/12201/>)
 - [5] 芦原はすでに逝去しているため、芦原建築設計研究所に在籍していた建築士が担当している。
 - [6] 慶應義塾大学アート・プロムナード (<http://www.art-c-keio.ac.jp/research/research-projects/promenade/>)
 - [7] この音声ガイドはイベント期間外でも利用できる。
 - [8] 立教大学 セルフガイドツアーについて (https://www.rkkyo.ac.jp/admissions/visit/ourself_guided.html)。実際、同種のアプリが2018年11月に慶應義塾大学からもリリースされた。
 - [9] フォーラムにおける議論の概要は、「ARTEFACT 02」に収録の「大学の建築フォーラム」(26-35頁)を参照。
 - [10] 建築に関連した講座、見学会などは全国で非常に活発に展開されており、建築情報に特化したポータルサイトはすべていくつも開設されている。しかし、掲載されるイベントの情報があまりに多く、大学の建築関係の企画が埋もれているのが現実である。
- KENCHIKU (<https://kenchiku.co.jp/>) 株式会社建報社
 ON VISITING (<http://www.onvisiting.com/>)
 japan-architects ネット (<https://www.japan-architects.com/ja/events>) フォルターキナック
 10+1 website (<http://10plus1.jp/>) LIXIL 出版
 LUCHTA (<https://luchta.jp/>) 株式会社建築資料研究社
- [1] 京都・大学ミュージアム連携 (<http://uni-museum-kyoto.com/>)、かんさい大学ミュージアムネットワーク (<https://www.facebook.com/>)
 かんさい大学ミュージアムネットワーク 3406205971189/





「時の流れ」が堆積する三田寺町

レクチャー・見学会「寺院再訪：寺町の形成と変容」レポート

芹澤 なみき
慶應義塾大学アート・センター学芸員補

●見学会概要

2019年11月25日(月) 10:00-16:00 明福寺、玉鳳寺、龍源寺

講師・上野大輔(慶應義塾大学文学部准教授)、中根和浩(明福寺19代住職)、村山正己(玉鳳寺35代住職)、松原信樹(龍源寺18代住職)

慶應義塾大学アート・センターから桜田通りに沿って三田四丁目の方へと歩いていくと、江戸時代から続く「三田寺町」と呼ばれる区域があらわれる^①。「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトでは、これまでも港区の寺院に注目したイベントを行っており、2018年度は、龍源寺での座禅ワークショップや妙定院でのレクチャーのほか、増上寺山内寺院のガイドツアーなどを行った^②。

今回の見学会では、慶應義塾大学文学部の上野大輔氏に三田寺町について解説いただくとともに、明福寺、玉鳳寺、龍源寺を訪れ、それぞれのご住職に寺院の歴史や活動についてお話を伺った^③。以下では、当日の見学会を振り返りつつ、文献資料なども参照しながら^④、都市の一角に堆積した時の流れをみていきたい。

●港区最大の寺町、三田寺町

見学会は、明福寺本堂での上野氏による三田寺町レクチャーから始まった^⑤。日本近世史がご専門の上野氏は、江戸時代の仏教について、特に人々との

つながりに関心があるという。上野氏のレクチャーや資料を元に、まずは三田寺町について概観してみたい。

そもそも寺町とは何だろうか。近世の城下町は城郭を中心として武家地と町人地がその周りを囲んでいた。それらをさらに取り巻くように外郭の要所に複数の寺院が集中的に配置されることがあり、これが寺町と呼ばれている^⑥。江戸時代にはこうした寺町が多数みられたが港区もその例外ではなく、現在でも多くの寺院が残っている。

港区最大規模とされる三田寺町は、現在の三田四丁目の区域を中心に形成されている^⑦。寺町には、大規模な寺院を核としたものと、中小規模の寺院からなり、生活環境に溶け込むようなものという2つのタイプがあるが、三田寺町は後者にあたり、その起源はいまからおよそ400年前に遡るといわれる^⑧。幕府が開かれて以来発展を続けた江戸は、最終的には人口100万人を越す大都市となった^⑨。寛永12年(1635年)の江戸城拡張にあたっては、八丁堀界隈から三田へ諸寺院が移転し、以前からあった寺院に加わるかたちで寺町が形成さ

れていった。これが三田寺町の誕生である。文政年間には作成された江戸の神社に関する調査書『神社書上』^⑩をみると、当時の三田寺町には50もの寺院があったことがわかる。以後、三田寺町は都市や人々の暮らしに密接に関わって発展していくが、明治維新を境に移転する寺院やそのまま三田に残る寺院、合併する寺院などが出てくることとなる。

寺町はさまざまな宗派の寺院から構成されていることが多かったが、三田寺町も例外ではない。当時の史料からも宗派の多様性がうかがえる。今回訪問した明福寺、玉鳳寺、龍源寺もそれぞれ真宗大谷派、曹洞宗、臨済宗妙心寺派とすべて宗派が異なる。

●明福寺、玉鳳寺、龍源寺

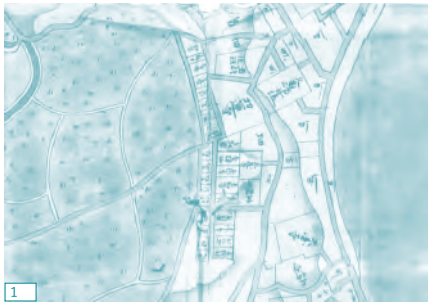
寺院の宗派と歴史

後半の見学会では、3つの寺院に伺い、まずは各寺院のご住職にそれぞれの宗派の特徴や考え方についてお話しいただいた^⑪。書籍で教理などを学んでも、宗派ごとの特徴を把握するのはなかなか難しい。しかし、その宗派が特に大切にしている教

① 亀山裕亮「現代に残る増上寺山内寺院の景観」[ARTIFACT] 21 16-18頁)を参照。なお「ARTIFACT」シリーズには、ほかにも港区の歴史や寺院に関する記事が掲載されている。

② 三田寺町に関する主な参考文献として以下が挙げられる：「三田寺町の江戸建築 東京都心にいきづく江戸時代の町と建物」港区教育委員会、2009年。「港区の歴史的建造物 港区歴史的建造物所在調査報告書」港区教育委員会、2006年。「港区の文化財 第11集 三田と芝の2」港区役所、1975年。プロジェクトウェブサイトで掲載のレクチャー記録映像も参照のこと (<http://arc.keio.ac.jp/artefact/>)。

③ 寺町については『日本史大事典4』平凡社「寺町」の項目を参照した。



- 【図1】江戸時代の三田寺町（「寛永江戸全図」寛永19～20年、大分県臼杵市所蔵、http://dl.lib.city.bunkyo.tokyo.jp/det.html?data_id=819）
- 【図2】見学会風景（龍源寺）
- 【図3】上野氏による講義
- 【図4】明福寺中根前住職による講義
- 【図5】玉鳳寺村山住職による講義
- 【図6】龍源寺松原住職による講義

【7】三田寺町に関する重要史料のひとつ。江戸御府内に存在した寺院について地域別、町名別にまとめられた調査書。現在までに121冊が確認されており、寺院の境内坪数、宗派、寺院などに関する情報が記載されている。国立国会図書館のデジタルコレクションで閲覧可能（<https://dl.ndl.go.jp/handle/ndj/pid/2609130>）

えや、それに基づいた修行内容、お焼香の方法などを直接、具体的に聞くことではじめての違いに実感を持つことができる。たとえば、本堂の間取りひとつをとっても、浄土真宗の明福寺では内陣・外陣と余間で構成されているのに対し、曹洞宗の玉鳳寺では内陣を含む6つの間取りで構成されていた。さらに、明福寺は内陣に対して外陣を広くとっているが、これは浄土真宗の特徴といえるそうだ。

次いでそれぞれの寺院の歴史について伺った。どのお寺もおよそ400年という長い歴史を持ち、その歴史については『寺社書上』【図7】『諸宗作事図帳』【図8】などの史料や寺院につたわる記録から知ることができる【註8】。我々が最初に訪れた明福寺は、元和元年（1615年）に順法師によって江

戸桜田郷に開かれたのち、天明元年（1781）に三田に移され、第十世慧燈法師によって現在の寺院が建立されたそうだ。

次に向かった玉鳳寺は、1599年に京橋に創建されたのち、1635年に現在の場所に移されたとされる。そして最後に訪れた龍源寺は、かつて龍翔院と呼ばれており、創立年代は明らかではないものの、永禄7年（1564年）以前にはすでに存在していたとされる。元禄11年（1698年）に現在の場所に移され、元文4年（1739年）に現在の名前に改称された。

明福寺には、「過去帳」が約300年分残されており、龍源寺には寺の起源が記された古文書が受け継がれている。とりわけ興味深いのは、今訪れた

3つの寺院がいずれも移転を経ている点だ。場合によっては複数回移転を繰り返していることもあるが、これは三田寺町の形成に関わる特徴といえよう。昭和13年に編纂された『芝区誌』【註9】によれば、八丁堀などの江戸城外周部からの移転により三田に移った寺院は半数を超えたそうだ。こうした移転は土地の立地というよりも幕府の意向だったようで、いかに当時の寺院が都市社会の中に組み込まれ、政治や社会と密接に結びついていたのかを象徴する出来事といえるだろう。

【4】港区には、他にも高輪の日本樓通りに形成された寺町や、増上寺や善福寺など、大規模な寺院を核とした寺町がある。

【5】「三田寺町の江戸建築 東京都心にいまづく江戸時代の町と建物」港区教育委員会、2009年、25頁。

【6】江戸時代の三田周辺の歴史については以下を参照。内藤正人「慶大三田キャンパス周辺の幕末風景―過去の史・資料から読みとく」【ARTIFACT 01】6（18頁）…水本邦彦「徳川の国家デザイン」（全集日本の歴史10）「小学館」、2008年。

それぞれの寺院に受け継がれる宝物や建築を取り上げて見た。

明福寺本堂の内陣には、元和9年（1624年）に同寺院に運ばれて以来今日まで継承されている阿弥陀仏が安置されており、その両脇には七高僧及び太子の絵像が鎮座している。加えて両脇の余間の内陣と外陣の障壁には、江戸狩野派のものとされている唐獅子が描かれた襖絵がはめ込まれている⁸⁾。

玉鳳寺には、「お化粧地蔵」とよばれるお地蔵さまが安置されており、人々がおしるいを塗って願をかけたことから全身真っ白になっている⁹⁾。さらに境内の墓地には、昭和60年（1985年）の日航ジャンボ機墜落事故により犠牲性となった宝塚歌劇団のトップスター北原遥子さんを偲んで彫られた「美遥観音」も鎮座しており、古い文化財の継承のみならず、新たな文化財の創出もみられる。

龍源寺の本尊である観音菩薩は、龍翔院だった時代から受け継がれたものであり、江戸33所観音の中の第24番として記録されている¹⁰⁾。

三田寺町の寺院には江戸建築の特徴が窺えるものがある。明福寺及び玉鳳寺の本堂は江戸時代に造営されたと考えられており、防災のことを考慮した土蔵造り風の外観や、欄間や頭貫などに意匠を凝らした室内装飾をみることができ。

こうした寺院の文化財保存では、「使いながら保存する」ことが基本的な考え方となるが、その維持は実に難しく、特に建築については木造のケースが多

いことからこれまで修繕・修復が繰り返されてきた。例えば玉鳳寺の村山住職によれば、本堂の畳の下に敷かれていた「根太」には江戸時代の木材が使われていたが、近年シロアリによる被害が見つかったという。見学会ではシロアリに食い荒らされて中空になった根太も実際に見せていただいた。また害獣の駆除にも少なからぬ費用がかかっているそう。建物などは必要に応じて新しいものに造りかえる場合もあるが、そうした判断はそれぞれの寺院の住職が中心となって決めていく。

三田寺町の現在を、そしてこれから

寺町と地域の社会や人々との繋がりを考えていくことも住職の重要な役割である。都市とともに発展してきた三田寺町はこれまで社会や町の人々と密接に結びついてきた。かつて寺院は仏教教団を統制するための本末制度¹⁰⁾や触頭制度¹¹⁾によって組織化され、社会の中で人々の暮らしに根付いていた。また、江戸時代には50ヶ寺中26ヶ寺が札所や開帳の場となっていたことが確認されており、広く信者を集めていたことが知られる。さらに、根拠となる史料は見つかっていないものの、三田寺町では複数の宗派の寺院が密集していたことで、組合のような宗派を超えた寺同士の協力があった可能性も考えられるという。

しかし、こうしたコミュニティのなかで運営されてきた寺院のあり方は長い年月を経るなかで変容を余儀なくされつつある。近年、信者の檀家離れや寺院の

後継者不足といった「寺離れ」が深刻な問題となっている。社会や地域のコミュニティのあり方が変わっていく中で、ご住職はそれぞれにこれからの寺院のあり方や人々との関わり方を模索している。例えば龍源寺では、座禅会から企業研修まで多岐にわたる活動を行っているほか、商店街のスタンブラーのような、直接仏教には関係しない地域の行事にも幅広く協力しているという。これからの寺院のあり方に関するお話の中で、「開かれた寺院」という言葉を何度も耳にした。広く人々に寺院を開いていくことによっても、人々との接点をできるかぎり多く持ち、コミュニケーションを密にとっていくことが大切だと感じた。

◎おわりに——文化資源の立体的理解のために

実はこの見学会に先んじて、筆者は明福寺の中根前住職との打ち合わせに同席させていただいたことがあった。その際に伺った話の中でとりわけ印象に残っていることがある。最近モノの見方が非常にマイクロ化し、全体を把握することよりも個々の細部が重視される傾向にあり、これでは物事を立体的に理解することは難しい、というのである。まず点をたくさん作り、それらに関連づけていくことよってそれが線となり、はじめて物事が立体的にみえてくるのだそうだ。つまり、さまざまな角度から情報収集するとともに、さまざまな視点からそれらを相互に結びつけていくことが重要なのである。

では、今回のように地域の歴史や文化について知りたいと思ったとき、具体的にどのようなアプロー

⁸⁾ 諸宗作事図帳は、三田寺町に関する重要史料のひとつ。江戸御府内に存在した寺院の平面図を宗派別にまとめた文書。現在までに141冊が確認されており、境内地の種類や坪数、間口や奥行きなどの情報が記載されている。国立国会図書館のデジタルコレクションで閲覧可能。https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2693947。

⁹⁾ 『芝区誌』東京史芝区役所、1938年、45頁。こちらの文献は三田図書館で閲覧することができる。なお、三田図書館の行政資料コーナー（資料の請求記号が「LM」ではじまる）には、港区に関する関連資料が豊富に揃う。

¹⁰⁾ 江戸時代に幕府が寺院を統制するために定めた寺格制度。いち宗派の中心となる本寺とそれに付属する末寺によって組織される。

¹¹⁾ 江戸時代の寺格制度。各宗派ごとに「触頭」に任命された特定の寺院が配下の寺院の統制を行った。

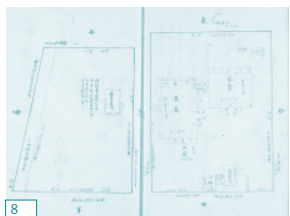
チが考えられるだろうか。いつでもどこでも手に入りたい情報にアクセスすることができるインターネットの利便性は計り知れない^{【註12】}。今まで史料などを閲覧するためには実際に収蔵機関まで足を運ぶという手間があったが、近年では資料のデジタル化が進んでおり、デジタル・アーカイブを介して閲覧できるようになってきた^{【註13】}。しかし、さらに理解を深めるためには、インターネットのみならず複数の手段の情報収集を行うことが必要だろう。例えば、今回のように関係者に直接インタビューした

り文献や史料にあたることなどが有効である。文献史料はネットと違い、自分が求めている情報以外の関連情報も目に入ってくるため、そこから情報が広がっていくことが多い^{【註14】}。まずはこうした「点をつくる」作業が基本となる。

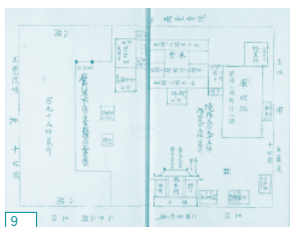
その上で、集めた情報を結びつけていくことが大切である。多様な情報収集によってさまざまな関連が認識可能になると同時に、一見無関係に見える物事の中に密接なつながりを発見できることもある。全体像を捉えるためにはこうした有機的連関に着目

した視点こそが重要だろう。「ARTEFACT」創刊号の中で、本間友氏は「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトの目標として「地域に存在する文化資源の、時と場所を横断するダイナミックな連関を浮かび上がらせ」ることを掲げている。港区には非常に豊かな、そして幅広い文化資源があるが、アナログ／デジタルの双方からの情報収集と、多角的視点による連関の認識や発見によって、こうした文化資源の全体像を立体的に浮かび上がらせることができるのではないだろうか。

【図7】 龍源寺に関する記録（『寺社書上』参、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609130>）



【図8】 明福寺の境内図（『諸宗作事図帳』百三十三浄土真宗、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2608347>）



【図9】 玉鳳寺の境内図（『諸宗作事図帳』百四十七曹洞宗、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2608347>）



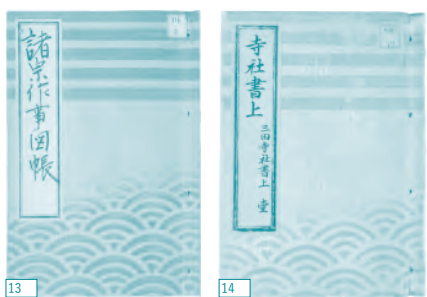
【図10】 江戸狩野派の作といわれる横絵（明福寺本堂）



【図11】 お化粧地藏（玉鳳寺）



【図12】 龍翔院観音堂。この中に水月如意輪観世音菩薩が安置されている。（龍源寺）



【註12】 今回訪れた寺院にもウェブページがある。明福寺 (<http://mifukukiji.jp/>)、龍源寺 (<http://www.ringenji.com/>)、龍源寺のウェブページからは寺報のPDF版をダウンロードすることもできる。

【註13】 その最たる例である国立国会図書館のデジタルアーカイブでは、三田寺町に関する当時の史料「寺社書上」^{【図11】}も閲覧することができる。「国立国会図書館デジタルコレクション」：<https://dl.ndl.go.jp/>。また、「デジタル版港区のあゆみ」は、港区の歴史を学ぶことができるデジタルアーカイブである。「デジタル版港区のあゆみ」：<https://trc-ateac.trc.co.jp/Html/Ust/1310305100/>

【註14】 例えば昨年リニューアルされた港区立郷土歴史館では港区にまつわる歴史的な文書、地図、写真などを実際に目にする事ができる。港区立郷土歴史館：<https://www.mina-to-rekishi.com/>

港とにおいをめぐる6章

東京湾の香を聞く

一つの港とは、人生の争闘に疲れた魂にとって、快い棲処である。空のたっぷりした広がりや、雲の流動する建築や、海の移り変わる彩りや、灯台のきらめきは、決して眼を倦ませることなく楽しませるのにすばらしく適したプリズムだ。複雑な索具をつけた船のすらりとした形態に、波のうねりが諧調ある振動を伝達して、人の魂の中に、律動と美への嗜好を保たせるのに役立つ。

ボードレール「港」『パリの憂鬱』

その名に反して、港区には美しい港がない。港区に海があることを意識する機会さえ、ほとんどない。海は、たとえば山手線や湾岸の高層ビル群、物流倉庫や工場によって、市民生活からはほとんど覆い隠されている。

そんな港区の海が、お台場の五輪トライアスロン会場に漂う「におい」によって大きな話題となったのは皮肉だった。多くの市民が東京湾の存在を久々に思い出したのではないか。実際のところ、お台場が臭くとも都心の生活には何の影響もなく、そのにおいを嗅ぐ機会もまずないのだろうか。

本稿が試みるのは、そのにおいを読み替えることで、港区と海の関係をも読み替えるような思考実験である。海岸線は作り変えられないが、においは空間を通じて人びとのイメージを書き換えうる。「快い棲処」である「港」には、どのようなにおいが漂うのだろうか。

● 出口としての海 ●

映画『パラサイト』を引くまでもなく、「におい」は都市生活空間における公と私の境目を脅かす、不穏なファクターである。においは自ら気づくことさえできないほどに、自分自身の身体と生活習慣をそのまま反映してしまう。また公共空間にあらわれる「異物」の存在も、においによって検知される。均質で清潔な近代的空間にとって、においは「なかつたことにしたい」「ある種のバグのようなものだ。

19世紀のパリはその典型だが、近代都市は「公衆衛生」や「快適さ」などさまざまな理由をつけ、そうしたにおいを排除しようとしてきた。「香水」の文化が大きく花開いたのは、それまで当然のように都市に満ちていた「悪臭」の存在を自覚し、徹底的に排除しようとする過程においてである。においの排除はまず、それが意識されることから始まる。

水道インフラの整った現代の東京では、ふだんその種の悪臭を感じることは少ない。とはいえ、そのひずみが実は東京湾に蓄積されているという事実は、これまであまり意識されてこなかった。東京23区の8割の地域が採用する「合流式」の下水処理では、雨水と下水が同じ水道管に集められる。雨量が増えた場合には洪水を回避す

るため、下水を簡易処理してそのまま河川に排水する仕組みとなっている。そのため、台風のあとには海に生活排水が流れ込んでしまう。

問題は、水道インフラの面でも都市空間の面でも、東京湾が都民の営みからきれいに切り離されていること、海の存在をほとんど都民が意識できないことだ。海の存在感はレインボーブリッジやお台場の「風景」としてのみあり、人びとが活動する「現場」ではない。

船が出入りし、積荷が遠洋よりやってくる入り口としての「港」ではなく、単なる生活排水の出口のような海。件の「におい」は、むしろ平時の東京湾が「におい」を持たなさすぎることを逆説的に明らかにしてしまったように思える。

● 紹介コンテンツ

アラン・コルバン 『新版 においの歴史 — 嗅覚と社会的想像力』、山田登世子・鹿島茂訳、藤原書店、1990年。



● 悪臭と芳香、嗅覚の可塑性 ●

公共空間がにおい（とくに体臭）に敏感なのは、それが「隠したいのに隠せていないもの」を他人に知らしめてしまうという恥の問題に関わるためだ。その背景には、においは身体に「染み付いた」ものであり、異臭への嫌悪感とは「生理的」なものであり、いわばにおいとは絶対的なものであるという信仰があるように思われる。

実際はというと、「におい」は思った以上にフレキシブルなものである。ある実験によって明らかになったのは、新生児が味に関して大人とほとんど同じ好悪の反応を示す半面、においに対しては特段はつきりとした反応を示さないという事実だ。排泄物の臭いを不快に感じるのは、後天的な連合学習（習慣）の賜物なのだという。

また、よく知られているように、香水を調合する際には、一般的に悪臭とされるような成分も混ぜることでにおいに奥行きを出す。悪臭と芳香の境目は、思った以上に曖昧なものだということだ。

こうしたにおいの相対的なあり方は、嗅覚のメカニズムからもある程度説明がつく。三原色に対応する3つの遺伝子によって規定さ

れる視覚と異なり、嗅覚には400以上の遺伝子が関与している。さらに、その遺伝子以外にも、その倍にも及ぶ数の機能していない嗅覚系遺伝子がヒトゲノムのなかに存在しているという。周辺環境に強く紐づく嗅覚は、移動や環境の変化によって嗅ぎ分けるべきものが変わるたびに、そのつど適応・進化していったのである。

鼻腔の嗅上皮に密集する嗅覚受容体が、物質のにおい分子にどのように反応しているのかは、まだわからないことが多い。ただ重要なのは、嗅覚そのものは絶対的であるというよりむしろ可塑的で、においを学び直すことは十分に可能だという事実である。

● 紹介コンテンツ

新村芳人「嗅覚はどう進化してきたか——生き物たちの匂い世界」、岩波科学ライブラリー、2018年。



◎ 交感する器官としての嗅覚 ◎

嗅覚の「あいまいさ」は、香りをめぐる古今東西の表現にも表れる。「いろはにほへと（色は匂えど）」が有名な例だが、元来「かほり」や「にほい」は色彩を表す視覚的な語彙であり、それが転じて匂いを表すようになったという。西洋の詩的表現においては、冒頭でも引用したボードレールの詩のように、嗅覚が他の感覚と交差しあう様がしばしばうたわれている。最も有名な「交感（コレスポンドンス）」と題された詩を見てみよう。

幼童の肉のごと新鮮に、木笛のごと

なごやかに、草原のごと緑なる、薫あり。

——あるは、腐れし、豊なる また ほこりかの、

無限のものゝ姿にひろがりて、

龍涎、麝香、安息香、焼香のごと、

精神と官覚の法悦を歌へる、薫。

——ボードレール「交感」『憂鬱と理想』⁽²⁾

木笛の音色（聴覚）や草原の緑（視覚）の「ごとき」「薫」という表現は、まさにあいまいで不可視な嗅覚的感覚を、より具体性の高い感覚にたとえることで表そうとするものである。また後半では、さらに嗅覚固有の感覚にフォーカスする。香りを媒介する不定形な大気は「無限のものゝ姿にひろがり」、感覚器官に直接快をもたらす。詩題の「コレスポンドンス」は「万物照応」なども訳されるが、ボードレールはまさに、あらゆる感覚が融解し、空間的に混ざり合うような場面をそこで描いている。古来より哲学者たちから、そのあいまいさによって低い位置を与えられてきた嗅覚が、詩の世界においては、そのあいまいさによってむしろ表現の鍵となるのである。

◎ 紹介コンテンツ

ボードレール『悪の華』、鈴木信太郎訳、

岩波文庫、1961年。



桃源郷としての港

ボードレールは嗅覚に「交感する感覚」としての特権性を与えるだけでなく、それをさらに「海」や「夢」、「旅」、そして「港」といったモチーフにつなげていく。散文詩集『パリの憂鬱』の一篇「旅への誘い」で描かれる桃源郷には、「スマトラの『思い出の香り』が満ち、「交感」の詩でうたわれたようなコレスポンダンスの感覚がここでも再び再現されている。注目すべきは詩篇の後半、描かれた桃源郷が（おそらくはオランダをモデルとした）交易港として描写される部分だ。

これらの財宝、これらの家具、この奢侈、この秩序、これらの芳香、これらの奇蹟的な花、それはきみだ。これらの大きな河やこれらの静かな運河、それもまたきみだ。河や運河の押し流してゆく船、富をぎっしり積んだこれらの巨大な船からは帆綱の揚げおろしの単調な唄が立ちのぼってくるが、これらの船は、きみの胸の上に眠りあるいは転々とする私の思念だ。きみは船たちを、やわらかに、〈無限〉にほかならぬ海の方へと導いてゆく、空の深みをきみの美しい魂の透明の中に反映させながら。——そして、波のうねりに疲れ、〈東方〉の産物をせいっぱい積んだ彼らが故郷の港に帰ってくるとき、それもまた、豊かになって〈無限〉

からきみの方へ戻ってくる、私の思念なのだ。

——ボードレール「旅への誘い」『パリの憂鬱』

本稿冒頭に引用した詩篇「港」と同様、ボードレールは理想郷を港に見出ししている。それは単に美しい海の風景というわけではなく、異国の積荷が行き交い、旅立ちの予感が漂う、交通の結節点としての港の風景である。引用部冒頭に見られる、香りも含めたあらゆる事象に対する「きみ」という呼びかけからは、官能的な夢の風景のなかであらゆる感覚を融和させようとする「交感」での表現との類似がみてとれる。その融和した流れのなかに「私の思念」は船として包まれ、〈無限〉たる海へと導かれていく。港には、旅への誘惑としての芳香が、海を行き交う運河や船、潮風とともに漂っているのである。

紹介コンテンツ

シャルル・ボードレール『ボードレール全詩集Ⅱ』、阿部良雄訳、ちくま学芸文庫、1998年。



香りを「聞く」営み

ボードレールの詩に描かれる「におい」から連想するのは、日本の伝統文化である香道の世界だ。独特な香りを秘める香木の小さな欠片を香炉で熱し、そこから漂う烟を鑑賞する香道。和の香りのイメージが強いが、香木はすべて東南アジア（ベトナム、タイ、インドネシア）で採集される。人工的な栽培は未だに難しく、香木が生成されるメカニズムもよくわかっていないため、良質な香木はきわめて稀少な「財」として取引される。異国からもたらされる稀少な香りを楽しむという文化のあり方自体は、〈東方〉の香りに夢を見るヨーロッパの詩人とどこか共通するところがある。

さらに興味深いのは、香道において香りを「聞く」という表現が用いられることだ。この「聞く」という表現の背景にある精神性や感覚のあり方について、香木・香道具専門店「麻布香雅堂」の創業者、山田真裕氏はこう表現している。

香を聞く——問うて聞きたいのは、大自然の神秘である香木を媒体として聞く、大自然の一部である自分自身の声——答えは、目に見えることなく立ち昇る一炷の烟の中に在る。

「精神と官覚の法悦を歌」うボードレールの「交感」と比較すると、

自分自身の内なる声に耳を澄ます香道には、やはり「道」であるがゆえの求道的な内省の感覚があるように思える。共通するのは、香りを媒体として、外界と自身の内部の感覚や精神が一体化する感覚を描いていることだろう。おそらく、その感覚が「目に見えない」烟のなかにそれを感じとる、つまり目をつぶって耳を澄ますという意味での「聞く」という表現につながっていったのではないだろうか。

さらに踏み込めば、ボードレールの「薫」が視覚や聴覚、あるいは精神のはたらきやひろがりを経験的に集約するためのひとつの感覚的焦点であったのに対し、香道における「香り」は、むしろそこから感覚や精神にひろがりを与えるための出発点であるようにも思えてくる。ここでは、香りはまさに空間を「聞く」ための媒体となるのである。

●紹介コンテンツ

山田真裕『香木三昧 大自然の叡智にあそぶ』、淡交社、2019年。



● 湾岸の香を聞く ●

ボードレールによって「旅への誘い」と表現され、香道においては精神によって「聞く」ものとされてきた「香り」。そこには、嗅覚のみならず、五感全体と精神を刺激し、心身全体を空間にひらかせるような力が秘められている。においや香りを感じ取り解釈する嗅覚の機能が、そもそも科学的にもあいまいで可塑性をもつとされている以上、これらの表現は単なる比喻表現に留まるものではない。においと感覚、そして空間のあいだにあり得る関係を、次のような問いで表現してみることもできるだろう。

「港」という旅と交易を象徴する空間には、どのようなにおいが広がっているべきなのだろうか。

あるいは、どのようなにおいが、空間を人びとの行き交う「港」へと変えうるのだろうか。

レインボーブリッジから湾岸の道路へと降り立つときに感じとれるのは、都市の無機質な空気と混じり合い、独特な不穏さを含んだ「水」のにおいだ。もしかしたら、ネガティブな先入観から悪臭を感じとるかもしれない。しかし耳をすませば、香木のごとくそびえ

立つ高層建築の隙間に吹きすさぶビル風のおいが聞きとれるかもしれない。あるいは、海岸沿いの異国料理屋から漂う香ばしいにおいが聞きとれるかもしれない。あるいは、いまの私たちにとって心地よく感じられない何かしらのにおいも聞きとられるかもしれない。それでもなお、わたしたちはそこで何が聞きとれるのかを自ら確かめ、そしてそこでどんなにおいが聞きとられると良いのかを、考えてみるべきではないだろうか。それは都市を「眼差す」視点とはまた別の、都市への想像力であるはずだ。

● 脚註

- (1) シャルル・ボードレール『ボードレール全詩集Ⅱ』、阿部良雄訳、ちくま学芸文庫、117頁
- (2) ボオドレール『悪の華』、鈴木信太郎訳、岩波文庫、37頁
- (3) シャルル・ボードレール『ボードレール全詩集Ⅱ』、阿部良雄訳、ちくま学芸文庫、56頁
- (4) 山田真裕『香木三昧 大自然の叡智にあそぶ』、淡交社、191頁



diffusion and dissipation of the spiritual, visual, and aural. The ‘smell’ of the incense-smelling ceremony is, conversely, a ‘fragrance’ that produces this diffusion of senses and spirit, as a sort of origin-point. Fragrance, then, becomes the medium through which you can ‘attend’ to the space around you.

Related Contents:

Masahiro Yamada, *Meditation on Fragrant Wood: Enjoying the Wisdom of Nature* (Kyoto: Tankosha, 2019).

Attending to the Fragrances of the Bay

‘Fragrance’, as I have suggested, takes on a particular importance in Baudelaire’s ‘Invitation to the Voyage’ and in the incense-smelling ceremony. It contains the power to open up the entire body to the world around it, through stimulating the spirit and the five senses—not only the smell. Our sense of smell, which allows us to analyse different fragrances, functions, in scientific terms, in incredibly nuanced and plastic ways, so the descriptions of smell I have been charting are not only metaphorical. The relationship between smell, the senses, and space can be questioned in the following way:

What kind of smells should float through the ‘port’, that symbol of voyage and trade? Or, in other words, what kind of smells could transform space into a ‘port’ through which people come and go?

When one takes the road from the Rainbow Bridge towards the coast, the smell is a mix of the peculiar and slightly disturbing stench of water mixed with the

inorganic air of the city. There might be a negative preconception that this smell is bad. But if you close your ears, you might find that you can ‘attend’ to the scent of the breeze as it blows through the gaps between buildings. Or that you can ‘attend’ to the various smells drifting out from various restaurants along the coastline. Or that you can ‘attend’ to smells that are considered by current standards slightly unpleasant. But the point is, we should see for ourselves what we can detect — what smells we can attend to — when we alert our senses. This is one way to ‘wake up’ to the city; to amplify our imagination of it.





historically placed it low down in the hierarchy of senses, this same ‘nuance’ has made poets treat it as a key to expression.

Related Contents:

Charles Baudelaire, *Flowers of Evil*, trans. Shintarō Suzuki (Tokyo: Iwanami Shoten, 1961).

The Port as an Earthly Paradise

Charles Baudelaire not only thinks of smell as that ‘sense’ with a particular ‘sympathy’ or ‘correspondence’, he also connects it to certain recurrent motifs in his work: ‘sea’, ‘dream’, ‘voyage’, and ‘port’. In the earthly paradise depicted in his poem ‘Invitation to the Voyage’ (*Paris Spleen*), he recalls ‘a singular perfume’ of ‘Sumatra’. This poem of ‘sympathy’ (of ‘mute and mysterious symphony’) once again draws our attention to the correspondence of the senses. I would like to cite the end of this poem, in which a paradisiacal port is described (allegedly inspired by a Dutch scene):

Such treasures, such furnishings, this abundance, this order, these perfumes, miraculous flowers — all this is you. You as well, the grand rivers and tranquil canals. Afloat on them, loaded with valuables, amid the monotony of the crew’s songs, those enormous ships are my thoughts, on your bosom sleeping or sailing. You conduct them gently towards that sea which is Infinite, reflecting the while celestial depths in your beautiful and pellucid soul. And when, sick of the sea-swell and overloaded with Eastern goods, they return to their native port, my thoughts, grown rich, still turn again from the Infinite towards you.

Charles Baudelaire, ‘Invitation to the Voyage’, *Paris Spleen* (trans. Keith Waldrop)

As in the Baudelaire poem I cited as my epigraph, the port is here imagined as a sort of utopia. This is not only the portrait of a beautiful sea scene, but that of a port in a foreign land—a transport hub, where cargo ships come and go, and voyages are prepared for. In the address to ‘you’ at the opening, there is a call towards a ‘sympathy’ or unity between all the different phenomena, including smell, within this physical dreamscape. In this flowing unity, ‘my thoughts’ are enveloped as ‘ships’, sailing out towards the ‘Infinite’. The fragrances brought to the port by canals and ships coming and going, and by the salty breeze, drift over to us like an invitation to a voyage.

Related Contents:

Charles Baudelaire, *Baudelaire Collected Poems II*, trans. Yoshio Abe (Tokyo: Chikuma gakugei bunko, 1998)

The Work of ‘Attending’ to Smells

The ‘smells’ depicted in Baudelaire’s poetry bring to mind the incense-smelling ceremony of traditional Japanese culture. This ceremony involves appreciating the fragrant smoke that comes from burning small pieces of aromatic wood in an incense burner, so releasing their secret fragrances. All of the trees are gathered from around Southeast Asia (Vietnam, Thailand, Indonesia), and the image strongly produced when they are burned is of a unified fragrance. These trees are difficult to artificially cultivate even now, and we know

very little about the mechanism that produces their aromas. Good quality fragrant wood is seen as a rare ‘treasure’. There is something common between this culture of enjoying rare fragrances imported from abroad, and the dream of ‘Eastern’ fragrances in European poetry.

An important component of the incense-smelling ceremony is what gets called ‘attending’ (or ‘listening’) to fragrances. The founder of the specialist incense shop, Azabu Kogado, Masahiro Yamada has explained the spirituality and sensibility behind this expression, ‘attending’:

Attending to smell: I want to enquire and attend my own voice that is a part of the nature, through the medium of this natural mystery of aromatic wood. Your own voice is a part of this nature. The answer comes not with what can be seen before your eyes, but with the smoke that rises from the incense stick.

Masahiro Yamada, *Meditation on Fragrant Wood* (p.191)

Baudelaire’s unity of ‘chanting the ecstasies of spirit and senses’ bears some common thread with this sense of listening to one’s ‘own voice’ in the incense-smelling ceremony. This contains the introspective idea of searching on an inward ‘road’ to truth. What is shared by these writers is the depiction of fragrance as a medium that can unify the external world with the internal world of sensation and spirit. As this is a kind of experience that cannot ‘be seen’, this ‘attending’ has to take place with eyes and ears closed.

Baudelaire’s ‘fragrance’ was a single sensation that metaphorically gathered the

awareness of Tokyo Bay as a place where such smells have been accumulating. 80% of areas in Tokyo's 23 Wards adopt a system of 'merging' sewage and rainwater in one pipe. At times of high flood risk, sewage is pumped directly into the river. The result of this, is that human waste is often drained into the ocean after typhoons.

The problem is that Tokyo Bay is cut off from the workings of city life, both from the perspective of the sewage system and from that of city space. Most people aren't even aware that the sea surrounds the city. The sea near Odaiba and the Rainbow Bridge is taken to be a distant 'view', rather than a 'spot' where people might actually spend time.

This is not an entry and exit 'port' for ferries and cargo ships to come and go, but a sea where sewage exits the city. Paradoxically, the strong foul odor revealed how unaware people were of the ordinary smell of Tokyo Bay.

Related Contents:

Alain Corbin, *The Foul and the Fragrant: Odor and the French Social Imagination*, trans. Toyoko Yamada and Shigeru Kashima (Tokyo: Fujiwara Shoten, 1990).

Bad Smells and Fragrance: The Plasticity of Smell

A sensitivity to odours in public space, especially body odours, comes from the shame of 'wanting to hide but being unable to hide' smells from others. Behind this is the sense that smells 'cling' to the body and are caused 'physiologically'—in other words, there is a conviction in something absolute about smell.

In truth, 'smell' is far more relative than it might initially

seem. In my experience, while a new-born baby might more or less show the same taste as an adult, they seem to be quite indifferent to smell. In fact, a disgusted response to the smell of human excrement is actually learned behaviour, an acquired habit.

Ingredients with unpleasant odours are often, as is commonly known, used to bring out a depth of scent in perfumes. The distinction between bad smells and pleasant fragrances is far more nuanced than one might initially assume.

This relativity of smells suggests the mechanism for detecting smells is a gradated one. Whereas humans have three colour-detecting genes to allow them to differentiate visually between the three primary colours, they are estimated to have around 400 smell-sensing genes. There are also a number of further genes in the human genome whose function is in some way connected to smell. Humans adapt and evolve in response to changing information received through their sense of smell, which is a strong indicator of changes to their environment and surround.

There is still much we don't know about the precise way in which molecules respond to foreign smells through the receptive skin at the top of the nasal cavity. But what we can determine is that, far from something absolute, our sense of smell is incredibly plastic. It is certainly possible to relearn or train our sense of smell.

Related Contents:

Yoshihito Niimura, *How Our Sense of Smell Has Evolved: The World of Smell of Living Beings* (Tokyo: Iwanami Shoten Science Library, 2018).

The Nose as a Sympathetic Organ

There are idioms relating to fragrances wherever you look that express the 'nuance' of our sense of smell. A well-known one is '*even the blossoming flowers...*' ('*iro wa nihoheto*', literally 'colours are fragrant but they...'); early on, words like 'fragrance' ('*kahori*') and 'smell' ('*nihoi*') were visual terms to describe colour, but these became terms to express smell. The poetry of Charles Baudelaire, who I cited earlier, is particularly thick with references to smell. This is apparent in one of his best-known poems, 'Correspondences':

*There are perfumes fresh as
children's flesh,
Soft as oboes, green as meadows,
And others, corrupted, rich,
triumphant,
Possessing the diffusion of
infinite things,
Like amber, musk, incense and
aromatic resin,
Chanting the ecstasies of spirit
and senses.*

Charles Baudelaire
'Correspondences', *Flowers of Evil*
(trans. Geoffrey Wagner)

Even more than the sound of oboes (aural) and the greenness of meadows (visual), it is the invisible sensation of smell that becomes the most concrete and privileged sense, here. The second half cited gives way to a focus on the particularities of smell. The formless air, a medium '[p]ossessing the diffusion of infinite things', conveys smells directly to the sense organ. The poem's title 'Correspondences' can be translated in a number of ways, but the picture painted is that of senses fusing and mixing in the air. Where the 'nuance' of smell has meant that philosophers have

6 Fragments on Marine Aromas

Attending to the Smells of Tokyo Bay

Rhetorica

Tomoya Matsumoto (text) +
Shota Seshimo (cooperation)

Introduction

The port is a fascinating resort for souls worn out from life's warfare. The breadth of sky, the ever-changing architecture of the clouds, the sea's fluctuating colors, lighthouses flashing, all form a marvellous prism to exercise the eyes without tiring them. The slender shape of ships with their complicated rigging, to which the sea surge adds harmonious oscillations, serves to promote in the soul a taste for rhythm and beauty.

Charles Baudelaire, 'The Port',
Paris Spleen (trans. Keith Waldrop)

Despite its name, Minato Ward (literally 'Port Ward') doesn't house a beautiful port. People are hardly even aware of the sea surrounding Minato Ward when they're in it. The high-rise buildings, distribution warehouses and factories, which run along the coast and around the Yamanote subway line virtually hide the sea from its citizens.

It is ironic that the 'stink' of the sea in Minato Ward has become a source of much concern for the triathlon event set to take place in Odaiba as part of the 2020 Tokyo Olympics. This is surely the first time in a long time that many of the city's citizens have become aware of Tokyo Bay. Usually there is no opportunity to catch a whiff of the stench of Odaiba in central Tokyo, because it doesn't affect the heart of the city.

What I would like to suggest, here, is that by reinterpreting this question of 'smell', we can begin to

rethink the relationship between Minato Ward and the sea. Even if the coastline itself doesn't change actual shape, people's imagination of it can transform with the smells that travel through space. What kinds of smells might travel from 'the port [as] a fascinating resort' (more literally, 'a charming resort', 'un séjour charmant')?

The Sea as Exit

A disturbing factor of 'smells' in the city—apparent even prior to the release of the film *Parasite*—is the way they can threaten the boundary between the public and the private. Smell has an effect on a person's body and life habits even when it is not consciously detected. It is experienced as a 'foreign substance' within public space. Smell is conceived of as a sort of 'bug' which ought to be gotten rid of to uphold the uniformity of modern living space.

The stench of nineteenth-century Paris presented a model for why modern cities should eliminate smells for the sake of 'public health' and 'comfort'. The development of a 'perfume' culture came from noticing and attempting to thoroughly eliminate 'bad smells' which had previously seemed to be a natural part of city life. The elimination of smells begins, first, with their being noticed.

With its construction of a modern waterworks and sewage system, it has become rare to detect bad smells in Tokyo. What warps this picture is an



and strengthening connections with the people.

Conclusion: Understanding Cultural Resources on a Three-Dimensional Level

To tell the truth, I had the pleasure of participating in a preliminary meeting with Kazuhiro Nakane, ex-chief priest of Myōfukuji temple. In this meeting, which took place prior to the tour, many stories were told which left a strong impression on my mind. The perspective of things has become extremely microscopic in recent years. This has made the “three-dimensional” understanding quite challenging, since nowadays the importance of every single detail has come to be much more important. Because of such tendencies the entirety of things is commonly overlooked. To perceive the situation with a three-dimensional perspective

we should first consider the situation in a form of many dots which eventually connect and join together to create a line. To put it simply, it is important to gather information from various sources and bring these diverse perspectives together.

So, if there is a desire to learn of the history and culture of the local communities, what steps should be taken, and what kind of approach should be considered? We live in a wonderful age of enlightenment, where a single tap of your finger can open up to you the endless pool of information — the Internet.^[*12] Not too many years ago researchers had to travel all the way to the archives to be able to study the manuscripts or documents necessary for their work. Thanks to the massive process of digitisation currently happening at many institutions, the need for physical travel has decreased.^[*13] Nevertheless, it is necessary to use different methods

of collecting information in order to succeed in understanding the topic at a much deeper level. The tour to Mita *teramachi*, during which we had the opportunity to directly interview persons connected to the historical sources, is a good example of such an alternative method. Unlike the digital materials, we become prone to noticing information closely connected to our research when closely tackling bibliography. ^[*14] Most importantly, to lay the foundations we should start by “defining the dots.”

On top of that, it is important to gradually link all of the collected information. By applying such an approach we do not only find the relations between different subjects, but also manage to see the connections to the sources and materials which from a first glance might have seemed irrelevant. Such organic associations are of great importance for discerning the whole image. In the first issue of *Artefact*, Keio University Art Center’s research fellow Yu Homma has emphasised on the importance of letting “the dynamic connections of cultural resources to merge across time and space” through the project of “Cultural Narrative of a City.”

Minato City has a very rich and wide range of cultural assets. We could really reach the three-dimensional understanding by searching both analogous and digital information, recognizing and discovering associations from multiple perspectives.



12

Fig.10: Fusuma painting at Myōfukuji temple’s main hall; supposedly created by the Kanō school of painting.

Fig.11: Keshō Jizo at the Gyokuhōji temple

Fig.12: Ryūshōin Kannon Hall where Water and Moon Nyoirin Kanzeon Bosatsu statue’s are (Ryūgenji)

Fig.13: Shoshūsakujizuchō’s book cover, National Diet Library Digital Collection, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2608347>

Fig.14: Jishashojō’s book cover, National Diet Library Digital Collection, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609130>



13



14

[11] Another regulation system employed with the purpose of controlling the Buddhist temples. The Shogunate nominated a “head” temple who on government’s behalf had the power to administrate all the other temples of the same sect.

[12] Two of the temples visited during the field trip have websites. For Myōfukuji, see <http://myoufukuji.jp/>; and for Ryūgenji, see <http://www.ryugenji.com/>. Ryūgenji temple’s website offers a downloadable PDF file filled with precious information.

[13] The National Diet Library’s Digital Archive is a good example. See Fig. 13 for *jishashojō*, historical texts presenting the history of Mita *teramachi*; see Fig. 14 for *shoshūsakujizuchō*. For the National Diet Library Digital Collection, see <https://dl.ndl.go.jp/>. Another source for studying the history of Minato City is *Minato no Ayumi* digital publication: <https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Usr/1310305100/>

[14] Historical documents, maps, and photos related to Minato City can be accessed at the Minato City Local History Museum: <https://www.minato-rekishi.com/>

created with the flow of time.

The Ryūgenji temple also practices the worship of Kannon Bosatsu. A statue of Kannon that has been preserved in the temple is recorded as the 24th in the 33 Kannon statues of Edo [Fig.12].

Some of the temples in Mita *teramachi* display the characteristics of Edo period architecture. The main halls of Myōfukuji and Gyokuhōji temples are considered to have been constructed during the Edo period: their external façade reflects the typical Japanese storehouse architecture, a style that was created as means of disaster prevention. Meanwhile, the interior of these spaces is covered with elaborate and intricate designs of *ranma* (transom) and *kashiranuki* (Japanese epistyle).

These temples operate with the fundamental concept of preserving the cultural assets by continuing their utilization. This, however, is not an easy feat to accomplish, especially when it comes to architecture: wooden materials were predominantly used in Edo period constructions, thus the temples have often gone through periods of restorations and repairs. Masaki Murayama, the chief priest of Gyokuhōji temple, mentioned that the timber joists — *neda* — positioned underneath the *tatami* mats of the main hall had been damaged by termites in recent years. Priest Murayama was kind enough to show the participants of the tour the now-hollow *neda* which had been eaten by the termites. He also mentioned that the extermination of the pests is a considerably expensive endeavor. Sometimes there is apparently the need to reconstruct whole buildings, however such a decision usually can be made only through

a discussion held between the chief priest and community authorities.

The Present and the Future of Mita *Teramachi*

Taking into consideration the connections of the *teramachi* and the local societies is also one of the important responsibilities of a chief priest. Mita *teramachi* developed and expanded together with the local society and its people. As a result a strong bond was established between the people and the temple town. The *honmatsuseido*[*10] and the *furegashiraseido*[*11] were the systems through which the management of the temples was conducted in the past. Both of these systems were designed with the purpose of controlling religious organizations which had great influences and deep roots in the lives of the people. It is also known that during the Edo period many believers would gather in the twenty-six out of fifty temples. They were famous for selling amulets and exhibiting Buddhist relics. While we lack any historical sources which could provide definitive proof and evidence, there is a possibility that the temples of Mita *teramachi* had strong ties and often collaborated despite the differences of the sects they belonged to.

It should not come as a surprise that the administration and management of the temples, as well as their connections with the local communities underwent changes in the span of several centuries. The gradually decreasing number of supporters as well as the lack of actual successors has become a grave problem in recent years. With time passing the changes in the



society and local communities become inevitable. It is in such circumstances that the priests are contemplating on the future of the temples, their connections and interactions with the people. Ryūgenji temple, for example, is participating in a wide array of activities: alongside Zazen workshops and corporate training sessions, the temple also takes part in events organised by the local community, such as Stamp Rallies, despite their lack of relations to Buddhism. While we were discussing the future of the temples, the phrase “open temple” was uttered several times. The phrase made me think that “opening up the temple” and creating more means of contact is an important step for reinforcing

[8] Another important document is the register of ground plans of temples situated inside the Edo city’s boundaries, which are catalogued by sect division. 141 volumes of this register have been preserved which contain valuable information on the characteristics of the temples. These documents can be accessed online on the National Diet Library’s Digital Archive: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2608347>

[9] *Shibakushi*, Tokyo: Tokyo City Shiba Ward Office, 1938, p. 45 (available at Mita Public Library). In addition, documents related to Minato City can be accessed on Mita Public Library’s Administrative Materials corner (search index “LM”).

[10] A regulation system created by Tokugawa Shogunate in order to control the religious institutions. According to the system each school was supposed to have a central temple (the trunk) to which minor temples (branches) were expected to refer and obey.



5



6

Fig.5: Talk by Gyokuhōji temple's chief priest Murayama

Fig.6: Talk by Ryūgenji temple's chief priest Matsubara

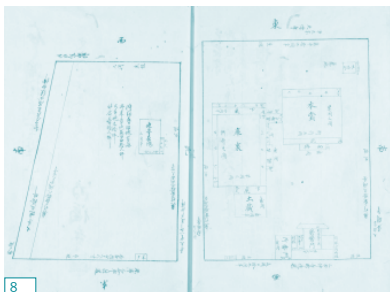
Fig.7: Ryūgenji temple's historical records, Jishashōjō, National Diet Library Digital Collection, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609130>

Fig.8: Myōfukuji temple's ground map shoshūsakujizuchō, 133 Shinshū Sect, National Diet Library Digital Collection, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2608347>

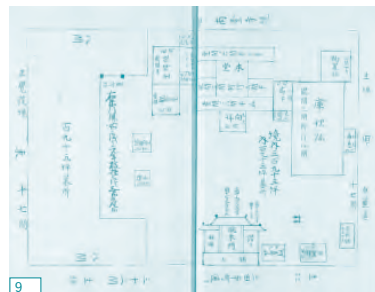
Fig.9: Gyokuhōji temple's ground map, shoshūsakujizuchō, 147 Sōtō Zen Sect, National Diet Library Digital Collection: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2608347>



7



8



9

[6] For historical information on Mita's neighbourhood, see Masato Naito, “The Keio University Area during the Late Edo and Early Meiji Eras.” *Artefact*, no. 1, Keio University Art Center, 2018, pp. 84-79.; and Mizumoto, Kunihiko. “Tokugawa no Kokka deza’in.” *Zenshū Nihon no Rekishi*, no. 10, Shogakukan, 2008.

[7] *Jishashōjō* is one of the most important and valuable historical documents containing information on Mita *teramachi*. It is a survey which was conducted with the purpose to classify all the temples of Edo, their locations and names. 121 volumes of the written report have been passed down to our day; they contain detailed information regarding the religious institutions of the city such as their territorial extension, the sect they belonged to, and even the statues they worshipped. These documents can be accessed at the National Diet Library Digital Archive: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609130>

hundred-years-old manuscript known as *kakochō*, while Ryūgenji temple has inherited ancient chronicles that contain accounts of its foundation. Above all, the fact that all three temples were relocated to their current location in the early Edo period presents great interest. Multiple relocations are also observed, and this pattern presents itself as a feature that was at the center of Mita *teramachi*'s formation. We learn from *Shibakushi*, a tome compiled in the thirteenth year of Showa period Japan (1938), that more than half of the temples in Mita have been moved there from the outskirts of Edo Castle, i.e. neighbourhoods such as Hatchōbori.^[*9] It may be curious to observe, but these mass relocations were brought about not by such reasons as the location of the land, but rather by the design of Tokugawa shogunate. The importance of the temples, their integration with the local societies, and their tight relations with urban politics and populace are represented at the very core of such a resolution made by the government.

Inheriting cultural assets: continuing utilization while preserving the past

Despite the repeated relocations, these temples have managed to inherit and preserve precious cultural assets throughout the ages. Below I will

discuss some of the architectural tropes and the treasured items which have been a part of these temples for several centuries.

The statue of Amida Buddha which is located in the inner sanctuary of Myōfukuji temple's Main Hall has been a relic preserved there since 1624. The statue, which is in a sitting position, is flanked on both sides by portraits of the seven founders of the Shinshū Sect. Moreover, a painting of a Chinese lion is depicted on the sliding doors (*fusuma*) separating the *yoma* from the outer sanctuary. The painting is considered to have been created by the celebrated Kanō school of painting, which was the predominant style during the Edo period [Fig.10].

The Jizo Bosatsu statue, more commonly known as the “Keshō Jizo” (cosmetics Jizo), is enshrined in the Gyokuhōji temple. This unique name of the Jizo originated based on the white colour with which the statue had been painted by those who came to pray [Fig.11]. A Kannon Bosatsu statue named “Biyō Kannon” can be found on the ground of the temple's cemetery. It is a memorial to Yōko Kitahara, a top star of the Takarazuka Revue, who passed away in 1985 as a result of a plane crash. It can be concluded that not only the historical cultural assets are being preserved by the temples, but new ones are being

In 1635, as a consequence of the castle city's expansion, the temples were relocated from the Hatchōbori neighborhood to Mita. As the relocation process neared its completion, new temples were incorporated into the pre-existing compound, thus completing the formation of the temple town of Mita. A Bunsei period survey known as *jishashojō* was conducted to gain information on Edo's temples. It became clear that Mita *teramachi* of the time was comprised of fifty temples.

[*7] From here on, Mita *teramachi* continued expanding and creating a strong bond with the city and the local people. After the Meiji Restoration the temples of Mita also underwent changes: some of the temples were left untouched, others were relocated, and the rest were merged together.

A *teramachi* of the Edo period would normally consist of temples which practiced various sects and traditions; this also held true for Mita. The contemporary historical records also specify the diversity of the sects. The temples which we visited during this event, Myōfukuji, Gyokuhōji and Ryūgenji, all belong to different ideological schools, i.e. the Shinshū Ōtani sect, Soto Zen sect and the Rinzai Myōshinji Zen sect.

Myōfukuji, Gyokuhōji and Ryūgenji Sects and Histories of the Temples

In the second part of the field trip we asked the chief priest of each temple to tell us of their sect's ideologies, its characteristics and teachings [Fig.4-6]. Understanding the unique features and doctrines of each and every sect can be difficult even when thoroughly studied and researched by referring to textbooks. However,

the distinctions of these religious practices can be understood in scrupulous detail if explained by those who practice and cherish the traditions, such as the specifics of burning incense. For instance, Myōfukuji temple's Main Hall is comprised of inner sanctuary, outer sanctuary and *yoma* (small spaces lateral to the altar), all fitting together. Meanwhile Gyokuhōji temple is composed of six separate spaces including the inner sanctuary. The outer sanctuary of Myōfukuji temple occupies a larger area compared to the inner one, a peculiarity of Shinshū Sect.

After discussing the architectural characteristics of the structures we conversed about the history of the temples. Each of these temples has a long history of about four centuries. Information on the hundreds-years-old past of the temples can be found in the historical sources and records such as the *jishashojō* [Fig.7] and the *shoshūsakujizuchō* [Fig.8,9].

[*8] Myōfukuji, the first temple we visited, was founded in 1615 in Edo's Sakurada neighborhood by monk Ryōjun; it was later relocated to Mita in 1781. The present-day building is said to have been constructed by monk Etō the 8th. Our next stop was Gyokuhōji, a temple founded in Kyōbashi back in 1599. The temple was relocated to its current location in 1635. The third and final temple that we visited was Ryūgenji. The historical sources do not mention the initial year of the temple's construction, but references to the temple are made as early as 1564. It is also known that the temple was originally named Ryūshōin. The relocation of the temple took place in 1698, while its name was altered to the current one in 1739.

Myōfukuji temple owns a three-

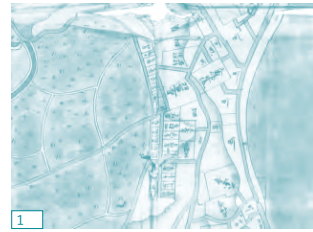


Fig.1: Edo Period Mita *teramachi*, Kan'ei era map of Edo (1642-1643), possession of Usuki City, Oita Prefecture: http://dl.lib.city.bunkyo.tokyo.jp/det.html?data_id=819

Fig.2: Guided tour at the Ryūgenji temple

Fig.3: Lecture of professor Ueno

Fig.4: Talk by Myōfukuji temple's chief priest Nakane

[2] For literary references on Mita *teramachi*, see *Mita Teramachi no Edokenchiku, Tōkyōtoshin ni Ikidzuku Edo Jidai no Machi no Tatemono*, Tokyo: Minato City's Board of Education, 2009; *Minatoku no Rekishiteki Kenzōbutsu, Minatoku Rekishiteki Kenzōbutsu Shozai Chōsahōkokusho*, Tokyo: Minato City's Board of Education, 2006; *Minatoku no Bunkazai Dai 11 Shū Mita to Shibasono 2*, Tokyo: Minato City Office, 1975.

For the video recording of the lecture, see the Keio University Art Center website: <http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact>

[3] For information on temple towns, see *Nihonshi Daijiten 4*, Tokyo: Heibonsha, 1994.

[4] The temple town of Mita is not the only one in Minato City; other locations are Nihon Enoki Street in Takanawa, and important temples such as Zōjōji and Zenfukuji.

[5] *Minato City's Board of Education*, 2009, p. 25.

“The Flow of Time” Accumulated Around the Temple Town of Mita

Namiki Serizawa

Assistant Curator at
Keio University Art Center

If you walk towards Mita Yon-Chōme following Sakurada Avenue from the Keio University Art Center, you will reach “the temple town of Mita” — Mita *teramachi* — which has been a part of this neighborhood since the Edo period [Fig.1]. Many other events connected to the project “Cultural Narrative of a City” have already taken place at Mita *teramachi*. The Keio University Art Center organized a Zazen workshop at Ryūgenji temple, a lecture at Myōjoin temple and a guided tour at Zōjōji temple in 2018.[*1]

At the beginning of the event Keio University’s Professor Daisuke Ueno delivered a lecture on the history of the temple town of Mita. The lecture was accompanied by visits to the three temples of Myōfukuji, Gyokuhōji and Ryūgenji. In each of these locations we discussed the temples’ histories and the activities with their chief priests [Fig.2]. In this essay, while reflecting on our field trip and referencing relevant literature, I attempt to uncover the layers of history that the flow of time has piled up upon each other in this corner of the city.[*2]

The Biggest “Temple Town” in Minato City, Mita *Teramachi*

The field trip commenced with Professor Ueno’s lecture at the Main Hall of Myōfukuji temple [Fig.3]. Professor Ueno, who specializes in early modern history, told us of his special interest in the Buddhism of the

Edo period, and in particular the relationships established between the temples and the people. I would like to take a general look at the temple town of Mita based on Professor Ueno’s lecture and materials.

First and foremost, what is a temple town? In the early modern era castle cities — *jōkamachi* — were composed of the samurai family residencies and houses of the townspeople; these would spread around the *daimyo* castles which were at the center of the urban areas. A concentration of various temples and religious institutions, known as “temple towns,” would be strategically positioned on the outer walls encircling the city.[*3] Many such temple towns can be observed in the cities of the Edo period; Minato City was no exception. Nowadays, many of these temples continue to operate.[*4]

Mita *teramachi*, the largest one in Minato City, is located in Mita Yon-Chōme. The temple towns of the Edo period can be separated into two types: large temples occupying the central areas, and middle- to small-sized temples on the outer perimeter which would blend in with the residential districts. The temple town of Mita, which is said to be dating 400 years back, is categorized as the latter type.[*5] The city of Edo went through a period of constant and steady growth since the establishment of the Tokugawa shogunate and eventually turned into a “metropolis” with a population of well over one million.[*6]

The Temple Town of Mita: Field Trip and Lecture
“Visiting Temples in Local Area: Trans/formation of Temple Town in Minato City”

Monday, 25 November, 2019 10:00-16:00

Myōfukuji temple Daisuke Ueno (Associate Professor at the Keio University’s Faculty of Letters), Kazuhiro Nakane (19th chief priest of Myōfukuji)

Gyokuhōji temple Masaki Murayama (35th chief priest of Gyokuhōji)

Ryūgenji temple Shinju Matsubara (18th chief priest of Ryūgenji)

[1] For further information on the history and temples of Minato City, see Yusuke Kameyama, “Gendai ni Nokoru Zōjōji Yamauchi Jiin no Keikan” in *Artefact* n. 02, Tokyo: Keio Art Center, 2019, pp.16-18.

necessary to organise a tour bus, many places can be reached quite quickly on foot or by using the train, and depending on the route architecture other than university buildings can be incorporated. In this way, in addition to architectural tours by individual universities, special tours with the cooperation of several universities can be held regularly — and by doing this, people who are only familiar with a specific institution get an incentive to see things within the alternative framework of “University Architecture”. Furthermore, through utilising apps with “Stamp Rally” functions and suchlike, the range of the project is not only increased, but the participation of those groups with only a slight interest in architecture can also be encouraged and manipulated.

However, it is also important to provide opportunities for experiencing university architecture other than through tours. Guided tours are well suited to direct contact, as well as instilling knowledge, but tour times, dates, and the number of participants can be limited. It's therefore necessary to have a framework in place so the interest shown by people who can't join a tour is not lost, and they are not distanced from making contact with the architecture around us. On this point, Keio University's “Architecture Open Day” in Case 4 represents an excellent strategy. Also, although not picked out in the case studies above, there is the example of Rikkyo University which has a map of its facilities in a “RIKKYO App” [8] for students intending to take entrance exams. It's possible to enjoy a pleasant walk around their campus buildings using this app, which is GPS linked,

and is aimed at encouraging visitors who are either unable to participate in a tour, or just want to appreciate the architecture at their own pace. This kind of “Self-guided tour” (to borrow Rikkyo's own terminology) encourages participants' independent learning and expands the opportunities for making architecture publicly available — even when resources are limited — and I expect will be incorporated by other universities in the future.

Finally, in order to move these efforts a step further, and try and grasp once again the activities of individual institutions towards opening up and conserving university architecture all in one large framework, I would like to propose the development of a website specialising in sharing such material, like that discussed at the “Forum for Architecture of Universities” in 2018 [9].

It's currently the norm for universities to announce and publicise their architectural events individually, with the exception of the projects I mentioned earlier involving collaborative tours. But by collating all this information in one place and making it possible to summarise what kind of events are planned and at which institution, the effect of such publicity can be amplified, and we can achieve a fixed framework for the “Architecture of Universites” [10]. Interest can be further heightened if in future a function is added so that someone can search for architects or building types they have a special interest in. Getting a list showing which particular architect's buildings can be found at which university, or where all the library buildings are located and so on, is a huge step towards information accessibility, and not only makes things more

convenient for the user but gives them an opportunity to encounter examples of architecture they had not previously been aware of. In addition, universities supplying information can also refer to other examples of universities making their architecture publicly available, so the potential for joint projects exists, and the range of such efforts widens even further — up to a national level. As well as providing links to pages introducing each university's most significant buildings, this kind of website should also be useful in an academic sense, by furthering collaboration in an architectural archive (see diagram).

A framework for the collaboration of university museums already exists — in the form of the University Museum Association of Kyoto [11] and the University Museum Network of Kansai [12]. Given that the latter was actually involved in the previously mentioned bus tour and symposium that Kwansai Gakuin University and others participated in, a lateral network specialising in modern architecture certainly seems possible, and looking at the current state of modern architecture in Japan, this collaboration is an urgent issue. Considering the public nature of such architecture it will soon be necessary to cultivate a framework involving public institutions. As a first step however, universities open to lateral collaboration can halt as much as possible the slide towards “indifference” that results in modern buildings being lost, and I believe enhancing outreach programmes within the framework of the “University Architecture” is an effective measure in achieving this.

[10] Lectures related to architecture and field trips are actively being expanded across the country, and a number of specialist web portals have been set up. But there is too much information on events being posted, and the reality is projects related to university architecture are buried under the data.

KENCHIKU <https://kenchiku.co.jp/> (architectural news company)

ON VISITING <http://www.onvisiting.com/>
Japan-architects (events) <https://www.japan-architects.com/ja/events> (world architecture)

10+1 website <http://10plus1.jp/> (published by LIXIL)
LUCHTA <https://luchta.jp/> (company providing architectural research materials)

[11] University Museum Association of Kyoto <http://univ-museum-kyoto.com/>

[12] University Museum Network of Kansai <https://www.facebook.com/かんさい大学ミュージアムネットワーク-340602059711689/>

also capture memories of each building in a moment of time, with the intention of creating an “architectural archive by the user’s mind”. The project is significant in respect to the main theme of this article because it isn’t simply about archiving architectural material, but has central to its aim a proactive outreach programme extending into the community, which also remains ongoing. Over the last few years a map showing the location of buildings and outdoor sculptures within the Mita Campus has been distributed, along with explanatory notes, for an annual event called: “Architecture Open Day” [6], opening up Keio’s architecture for participants from inside and outside the university. During the event it’s possible not only to join a guided tour, but freely explore the campus grounds with a map and notes in hand. There is also a mobile app called

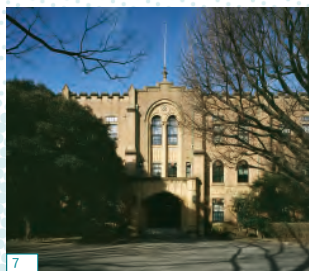
“Pocket Curator”, for people to view the university architecture while listening to a recorded audio guide [7].

As I stated earlier, unless positive efforts are made, fewer and fewer people will set foot in the cramped campuses of city universities, and opportunities for outsiders to appreciate the architecture found there will be lost. There is a need for putting into place proactive, sustainable events to make architecture more open to the public, and the activity of Keio is a good example of this. Furthermore, in conjunction with “Architecture Open Day”, lectures and symposiums have been held appealing to experts and those with a strong interest in the subject — as well as from time to time exhibitions on Keio’s architecture at Mita or other campuses.

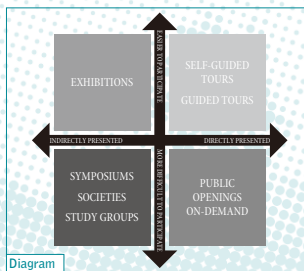
The potential for an information sharing platform

As I mentioned before, the basic steps taken by universities in opening up their architecture include online introductions and architectural tours. So far in this article I have picked out particular universities which have gone beyond these usual methods — now I’d like to consider an overall framework.

While universities continue to make their own individual efforts, one key to further promoting architectural openness and conservation is surely lateral expansion. For example, initiating tours that take in more than one university, such as Case 2. There are plenty of universities in Tokyo with outstanding architecture that are not too far apart, even if not as conveniently located as Kwansai Gakuin University and Kobe College — it’s not even



7



Diagram



6

Fig.1: Chalk white harmony of a hilltop campus — Konan Women’s University photo gallery

Fig.2: Konan Women’s University (photograph by Keio University Art Center)

Fig.3,4: Kwansai Gakuin University (Photo by Keio University Art Center)

Fig.5: “Investigations on Architecture of Universities: William Merrell Vories and Togo Murano”, bus tour and symposium, hosted by the University Museum Network of Kansai, 2017.

Fig.6: Keio University Library, designed by Fumihiko Maki, photograph by Ryota Atarashi.

Fig.7: Keio University Jukukan-kyoku, designed by Sone Chujo architectural office, photograph by Ryota Atarashi.

Diagram: A schematic showing the different variety of events for making architecture more open to the public, and their ease of participation. Where participation is comparatively demanding, a high level of expertise tends to be required. For these projects it’s necessary to lower the entry threshold and increase the number of ordinary participants.

[6] Keio University Architecture Open Day: <http://www.art-c.keio.ac.jp/research/research-projects/promenade/>

[7] This audio guide is available to use even outside the event period.

[8] https://www.rikkyo.ac.jp/admissions/visit/tours/self_guided.html

[9] For an outline of this discussion see the “Forum for Architecture of Universities”, *Artefact 02*, Keio University Art Center, 2019, pp. 92-84.

University (located slightly further afield). Participants move around by bus, viewing architecture by Tōgo Murano and William Merrell Vories at the three campuses. Many buildings are visited over the course of two days as part of this contents-rich tour, and the campus designs — built at around the same time — of these two architects can be appreciated in one go.

This project not only involves a tour but also a symposium on the theme of Tōgo Murano and William Merrell Vories' work. By holding this symposium, offering a deeper examination of university architecture, as well as providing an opportunity to actually visit these architecture via a bus tour, it seems a real attempt has been made to expand knowledge in this area among a wide-range of people with an interest in the subject.



Case 3: Musashino Art University

I have picked out this university as it has combined an exhibition on the architect who designed its buildings, with tours actually led by a professional architect.

In 2017 an exhibition entitled: *The Yoshinobu Ashihara Architectural Archives: Dreaming Modernism* [3] was held at Musashino Art University museum and library. Yoshinobu Ashihara (1918-2003) was involved in the design of the university campus, and a collection of digital materials relating to his most prominent works (including buildings at Musashino) were exhibited at the show, as well as a display of images and photos. Architectural exhibitions at museums and art galleries have become quite commonplace

recently, but this exhibition, detailing university architecture in the actual university itself, was a particularly effective way of opening its architecture up to the general public. By not simply looking at a building, but getting a different perspective through blueprints and other materials in an exhibition space close to where that building actually exists, must leave visitors with a much deeper impression.

In conjunction with this exhibition a tour entitled: “Around Musabi campus with one of its designers” [4], was also held. This formed part of a series previously implemented at Musashino Art University where tours were carried out by an architect actually involved in the campus design [5], marking them out from ordinary architectural tours. In light of

the fact that many modernist architects are no longer with us, this in itself offers an invaluable opportunity. The experience of meeting an architect also gives interested parties — who wouldn't normally join a regular tour — a little extra incentive to participate. Combining exhibitions and tours helps encourage each participant in one event to gain an interest in the other, and is an extremely effective step in efforts to open up architecture to a wider number of people.

Case 4: Keio University

Keio University Art Center's “Architecture of Keio project”, is an attempt to record not only physical documents related to a work of architecture, but

[3] The Yoshinobu Ashihara Architectural Archives - Dreaming Modernism: <https://mauml.musabi.ac.jp/museum/events/12703/>

[4] Around Musabi campus with one of its designers: <https://mauml.musabi.ac.jp/museum/events/12201/>

[5] Yoshinobu Ashihara sadly died in 2003, so this tour is led by an architect member of 'Ashihara Architect & Associates'.

University name	Guided tour	Webpage	Architectural highlights	Special notes
Aoyama Gakuin University		○	Majima Memorial Hall Berry Hall, and others	• Buildings not currently standing are introduced on the university website
Ochanomizu University	○	○	University Main Hall University Lecture Hall Kindergarten	
Kansai University *	○	○	Kanbunkan Enshinkan Seishikan and others	• Collaborative bus tour with the universities marked with * • Architectural tours of Murano's buildings
Kwansei Gakuin University *	○	○	Clock tower Lambuth Memorial Chapel, and others	• Collaborative bus tour with the universities marked with * • Exhibition on the architecture of William Merrell Vories • Supporter's website explaining the relationship between the university and Vories
Kyoto University	○	○	Seifuso Villa Faculty of Letters Exhibition Hall, and others	
Kyushu University	○	○	Former Faculty of Law and Letter's Main Building Main Office Building, and others Former Faculty of Engineering's Main Building and others	• Special architectural tours of modernist buildings • Tour of buildings marked for demolition (The Buildings in Hakozaki Campus have been lost)
Keio University	○	○	Public Speaking Hall The Old Library Jukukan-kyoku Ex Noguchi Room Media Center and others	• Special architectural tours of modernist buildings • Map of historical buildings within the university grounds • Limited access to buildings not open to the public • Exhibitions dealing with the "Noguchi Room" • Workshops and symposiums related to modernist architecture • An archive preserving and displaying documentary materials such as photos and diagrams
Konan Women's University		○	Administrator Building Student Halls, and others	• Specialist website introducing Tōgo Murano buildings at the university
Kobe College *	○	○	Administration Building Searle Chapel, and others	• Collaborative bus tour with the universities marked with *
Seisen University	○	○	Former Mansion of the Duke of Shimazu	• Chronological history of the building • 360° panoramic view of the Mansion interior • Virtual tour • Guided tour by students
The University of Tokyo	○	○	Akamon Gate (Goshuden-mon of the former Maeda Clan's Residence) Yasuda Auditorium, and others	
Tokyo Women's Christian University	○	○	Chapel/Auditorium Reischauer House, and others	• Guided tour provided by an architect (fee required)
Tohoku University	○	○	Former Tohoku Imperial University Library Former Sendai Medical College Museum Buildings Physics and Chemistry Classrooms, and others	• Special architectural tours of modernist buildings
Nanzan University		○	Divine Word Seminary Library, and others	• Specialist website publicizing Antonin Raymond's innovative architectural designs and their preservation
Nagoya University	○	○	Toyoda Auditorium	• Promotion of community use of the atrium connecting the Toyoda Auditorium and Symposion Hall, and an expansion of its functions
Hokkaido University	○	○	Sapporo Agricultural College Farm No. 2 Botanical Gardens, and others	• Specialist website • A map of cultural assets at the university, complete with explanations
Musashino Art University	○		Main Building Museum & Library, and others	• Architectural tours by invited architects who were involved in the campus design • Exhibitions • Lectures • Workshops and lectures held at the campus architectural archive
Meiji Gakuin University		○	Imbrie Pavilion Chapel, and others	• Limited access to buildings not open to the public
Rikkyo University	○	○	Main Building (Morris Building) Dormitory (the current Bldg. No. 2 & Bldg. No. 3)	• A self-guided tour framed in an exclusive GPS linked "RIKKYO App"
Waseda University	○		Okuma Auditorium Building No. 2 (Aizu Museum), and others	

Table.1: Twenty universities have been included in the study — institutions that have made efforts in conserving and utilising their historic and modern architecture — centring on the former "Imperial Universities". Most of these universities have campus tours and introductory guides to their architecture on an official homepage, approaches which can be considered the standard. Special notes are given on those institutions that have made particular efforts, such as a specialist tour or website.

same for overseas institutions. So for this article, I'd like to pick out only those universities where special efforts have been made utilizing methods other than the two mentioned above.

Case 1: Konan Women's University

The campus of Konan Women's University in Kobe mostly consists of buildings designed by Tōgo Murano (1891-1984), or from designs by his office. This chalk white group of architecture, stretching out over a bright sunlit hill, appear to take on the aspect of an architectural museum. A special characteristic of Konan Women's University is that the entire campus adheres to the concept of a single person — there is a balanced, organic relationship between the buildings, and a harmony to the university space as a whole. The institute itself recognises the importance of these modernist architecture, and any buildings constructed after Murano's death have been designed to merge seamlessly into the environment imagined by this prominent architect.

Perhaps in consideration of the extra security necessary for a women's university, Konan Women's University has made special efforts to open up its architecture through photography. A large number of photos of Murano's buildings can be viewed on a site specifically set up for the purpose [1]. Many universities possessing examples of outstanding architecture freely publish pictures of their buildings, but these are mostly posted on one section of their homepage — very few create a separate online presence like Konan Women's University has done

— this represents quite a rare case. By taking this route, placing photographs and articles online, they have further enhanced the public availability of their architecture.

Case 2: Kwansei Gakuin University/ Kobe College/Kansai University

There are many online blogs and articles showcasing the architecture of Kansai University — which has a number of buildings by Tōgo Murano — and Kwansei Gakuin University and Kobe College — which have Spanish mission-style campuses designed by William Merrell Vories (1880-1964). It seems these institutions are already successful in getting the attention of locals and architecture enthusiasts alike. Although access to Kobe College is restricted as it is a women's university, at Kwansei Gakuin visitors unconnected to the institution are allowed to roam quite freely around the university's spacious grounds, which goes some way in explaining the large online presence. This is significant, as it's in marked contrast to the trend for decreasing visitor numbers to the cramped, built-

up campuses of city located universities, even when there are no restrictions in place.

What should be highlighted here is the collaborative efforts made by these institutions. Kwansei Gakuin University and Kobe College are located near to each other, and both have campuses illustrating Vories' grand design. Just like the previously mentioned Konan Women's University, they could also be described as architectural museums in their own right, and represent a precious design heritage. Making the most of this close proximity the two institutions have implemented joint architectural bus tours [2]. The second of these was launched in 2017, which also takes in Kansai



[1] Chalk white harmony of a hilltop campus - Konan Women's University photo gallery: <http://www.konan-wu.ac.jp/gallery/>

[2] Seeking out the architecture of universities — Vories and Tōgo Murano: <http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/info/detail.php?i=233>

Making Architecture Public and the Example of Universities

Shinsuke Niikura

Curator at the Bunkamura Museum of Art,
Research fellow of the 'Architecture of Keio'
project (as of 2019)

In recent years modernist architecture all over Japan has come under the threat of demolition. The main cause of this is the deterioration of materials — concrete, steel frames and suchlike — in buildings completed only half a century ago. It's rather ironic that some modern constructions have reached the end of their life ahead of architecture built during regeneration efforts following the Great Kantō earthquake of 1923. Many of these buildings continue to endure even though they are nearly 100 years old.

No-one is arguing against the need to maintain prominent examples of modernist architecture as part of our architectural heritage — but in comparison to efforts to preserve and value buildings constructed during the Meiji and Taishō periods, and up until the early (prewar) Shōwa period, most of the buildings constructed after the Second World War are being neglected. Although more than 70 years have now past since the war, it seems encouraging awareness of the need to conserve modernist architecture generally, including post-war buildings, is now an issue.

Indifference is perhaps the greatest obstacle when it comes to the preservation of architecture. Buildings cannot move, so to “fully comprehend” architecture it is essential to visit its location, view it from the outside and explore its interior. Proactive participation is necessary. Simply extolling the virtues of a building will not bring it more recognition

— it will rather be forgotten. In order to avoid this situation it's necessary to invite people in. The conservation of architecture is therefore directly linked to making buildings publicly available and useful to everyone.

In this article I will outline cases where the architecture of universities has been opened up to the public in this way. Excellent examples of modern architecture exist in universities all over Japan, and many of these are actively being used as school buildings and suchlike — so there are several reasons for focusing on universities in the context of this debate: many institutions possess superb modernist architecture; there exists in universities a basic attitude towards supporting conservation; and since they are fundamentally spaces where diverse groups of people come and go there are already positive efforts towards making campuses more open. In addition, universities offer several examples for study — this makes them ideal for an examination of the issues and practicality of making architecture publicly available. The knowledge gained from this should also be very useful in reference to a framework for similar activity directed at buildings other than those on university grounds.

Generally speaking universities follow two basic patterns when presenting their architecture: an introductory guide on a website; or field trips and tours. Most universities implement one or both of these methods (see table) and the situation is mostly the



introducing the ins and outs of Japanese culture to the foreign guests. Japanese tea ceremony in the Japanese garden of the estate is said to have been a popular event of the time. In other words, the property served as a space for international communication and exchange of Western and Eastern cultures. Not too different from the idea which gave birth to the International House of Japan, is it?

Ever since, the property had been owned by many influential people, including members of the Imperial dynasty, as well as other prominent families who actively

participated in the shaping of the new Japan at the beginning of the Meiji Period, such as the Akaboshi and the Iwasaki. Eventually, the estate together with its garden was donated to the government by the Iwasaki family with the purpose of serving as a tax payment.

The idea of building the International House of Japan belonged to the renowned philanthropist John D. Rockefeller III and internationalist Shigeharu Matsumoto. As we have already discussed above, three of the most distinguished contemporary architects were hired to make this

project come to life. There is no denying the fact that the former Iwasaki estate was chosen to be the new International House of Japan precisely because of its location. Meanwhile, a historical glimpse shows that there is much more to this story than meets the eye — ever since the times of Kaoru Inoue the property which has stood witness to centuries of Japanese tempestuous history has served as an international space. It is only fitting for this tradition to have been inherited, preserved and continued by the International House of Japan.



3



4



5

Fig.1: Westminster Abbey (Photo by Tristan Surtel)

Fig.2: International House of Japan

Fig.3: The former Tokyo Medical School [The Koishikawa Annex of UMUT] (Photo by Kakidai)

Fig.4: Participants wandering through the Japanese Garden of the I-House.

Fig.5: Map of Azabu published by Owariya Seisichi, 1851. (National Diet Library, Japan)

[3] For further information on the pseudo-Western-style, see Jackson, Neil. "Gaikokujin and Giyōfū: Western Architecture in Japan." <https://livrepository.liverpool.ac.uk/3009154/>; and Fujimori, Terunobu. *Modern Japanese Architecture: Bakumatsu and Meiji* [日本の近代建築 上 幕末・明治篇]. Iwanami Shoten, 1993.

[4] To access Professor Matsukuma's lecture, see Keio University Art Center's official Youtube account: https://youtu.be/rbyPOj_cSbE.

[5] For more information on Meiji Restoration and Kaoru Inoue, see Beasley, William G. *The Meiji Restoration*. Stanford: Stanford University Press, 1972; and Hori, Masaki. *Inoue Kaoru: Enlightenment and Nationalism* [井上馨 開明的ナショナリズム]. Genshobo, 2013.

is known for having collaborated with Wright, while Le Corbusier is often considered to have been his rival.

Having lived in Japan for four years and studied its culture from many aspects for as long as I can remember myself, I have always thought that Japan — think Tokyo — is one of the greatest examples of Eastern and Western cultures melting into each other and creating a brand-new one. In my humble opinion, the result of the two cultures merging in such a manner can be best observed in Japanese city design and modern architecture. In contemporary Japan it is not uncommon to see Japanese Buddhist temples and Shinto shrines right next to modern-day buildings inspired by the architecture “inherited” from the West.

But there is more to this unique synthesis than just meets the eye: while walking down the streets of Japanese cities we can observe many buildings, which seem to be designed after Western architectural fashions of the time, but in reality have been built by relying on traditional Japanese carpentry techniques. Long story short, this is how pseudo-Western-style architecture was born in Japan.^[*3] There are dozens of buildings built in this fashion all over the country and some noteworthy examples are the Enzetsu-kan at Keio University’s Mita Campus, the former Kaichi School building in Matsumoto, Nagano Prefecture and the former Tokyo Medical School^[Fig.3].

The International House of Japan, while built with appropriate techniques honed for its style and era, has preserved some of the ideas which can be observed in traditional Japanese architecture, for example the unity of the

building and its outer perimeters. The three architects working on the project aimed to blend the inside and out of the International House of Japan, a concept inherited from the Japanese masters of ye olden days.

But let us not concentrate on the architectural tropes and designs of the International House of Japan, since this has been explained quite thoroughly in Professor Matsukuma’s lecture, which by the way can be accessed online.^[*4] Instead, I would like to offer you to walk down the path of the historical past of the garden that spreads around the I-House.

During the second part of our event, the participants, the organisers and the staff of the International House of Japan went out to the beautiful garden^[Fig.4]. The exciting conversation between all those present revealed some of the events unrolling at the time of the construction of the International House, as well as some details about the architects, such as their favourite spots in the garden and the like. However, I did not expect that a deeper dive into the history of the garden and the original estate which stood there would reveal some fascinating historical truths. While concisely, I would like to trace the “ghosts” that encircle the current-day International House of Japan.

The land on which the International House of Japan was built originally belonged to the Kyōgoku *daimyō* clan^[Fig.5]. Being the direct descendants of the Emperor Uda (868-897), the clan held significant power throughout the history of Japan. The leaders of this clan were closely associated with Nobunaga Oda, Hideyoshi Toyotomi and Ieyasu Tokugawa. Nevertheless, during *bakumatsu* the clan started



losing its authority, just like many other *daimyō* families did at those turbulent times. These changes also bore an economical nature and as a result Kyōgoku clan had to sell its family residence in Edo. The buyer of the property, situated right in the heart of Edo — soon to be Tokyo — was none-other than the first Minister of Foreign Affairs of Meiji Japan, Kaoru Inoue.^[*5]

The first Minister of Foreign Affairs of the new Empire of Japan is known for having held banquets at the residence to which he would invite many foreign diplomats residing in Japan and even the Emperor and Empress Meiji. We can conclude that the purpose of these banquets was

[2] For more detailed information on the collaboration of the three architects and the construction of The International House of Japan, see Matsukuma, Hiroshi. “The Utopia of Collaborative Design: International House of Japan and the Three Architects” [“協同設計というユートピア 国際文化会館と三人の建築家”]. *Geijutsu Shincho*. 2004, Vol. 10, pp. 96–102; and the official website of the I-House which contains information on a previously organised “Architalk” event: https://www.i-house.or.jp/programs/architalk20170906_panel/.

International House of Japan

Historical Allusions

My interest in architecture sparked only a few years ago. Up to that point I had never stopped in my tracks and wondered what architectural style this or that building belonged to. Of course, massive and old buildings with decades if not centuries of silent history hidden behind their walls would always seem fascinating. Yet they would simply slip my mind the moment they were out of my sight. However, things changed after my very first introduction to Gothic. The Gothic was extremely fascinating because of its incredible history that spread over millennia and its immense influences which affected not only architecture but also literature and art over all of the Western Europe. This was a turning point for me and I have been deeply captivated by Gothic architecture ever since [Fig.1]. Flying buttresses, vaulted ceilings, pointed arches, and unique solutions of the perception of light... magnificent to put it simply. [1]

My “obsession” with the Gothic, however, made me blind to the virtues of any other style of architecture. It would not be an overstatement to claim that it was thanks to this event, *Three Architects and International House of Japan*, that I started paying more attention to styles like modern, for example [Fig.2]. To be honest, Japanese architecture was never really in the centre of my attention, but this also changed after the very informative and interesting lecture by Professor Hiroshi Matsukuma of Kyoto Institute of Technology.

Professor Matsukama’s lecture consisted of two sections: introduction of the three architects who designed and built the International House of Japan, and a short presentation of the architectural tropes and ideas which were used during the construction of the unique International House. After the lecture was over the attendants were given a tour of the I-House and the Japanese garden surrounding it.

The three architects who planned and executed the construction of the International House of Japan are Kunio Maekawa (1905-1986), Junzo Sakakura (1901-1969) and Junzo Yoshimura (1908-1997). [2] What is interesting about these three architects is that all of them at some point in their lives learnt and practiced architecture under the wings of one of the two extremely prominent architects of the beginning of the 20th century — Le Corbusier and Antonin Raymond. Maekawa had the privilege to be associated with both of them: he was Le Corbusier’s apprentice, and later collaborated with Raymond. Meanwhile, Sakakura and Yoshimura worked under Le Corbusier and Raymond respectively. Incidentally, the names of these two giants of modern architecture is often mentioned side by side with Frank Lloyd Wright’s, another prominent architect who was famous for his ties with Japan as well as the buildings he designed in Tokyo, i.e. The Imperial Hotel. Raymond

Lilith Ayzvazyan

English and American Literature Department,
Keio University Graduate School of Letters,
Specializing in Victorian Poetry and Pre-Raphaelite Art.

[1] Gothic architecture has been a subject of interest for Western world since the eighteenth century. As could be predicted this interest led to the so known Gothic Revival that was predominantly expressed in European architecture and literature. For the concise history of the Gothic, see Groom, Nick. *The Gothic: A Very Short Introduction*. Oxford University Press, 2012. For further information, see Botting, Fred, ed. *The Gothic*. Woodbridge: D.S. Brewer, 2001. For information on the American Gothic, see Amfreville, Marc. “American Gothic.” *A New Literary History of America*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 2009, pp. 131-136.

the evolution and development of Minato city: how are these alterations affecting and changing the landscapes passed down to us? On the other hand, “The City Where Everyone Lives Together” was based on the lack of usage of ward facilities by local workers. This plan aimed at founding cultural institutions such as temples or shrines with the objective of creating a connection with people seeking for the “place they would belong to.” Being able to visit cultural spots without the need of participating in events was the main point of the project. This is important especially in our contemporary society, as the connection between the people and the local cultural spots is growing weaker.

The viewpoint of the last project is quite similar to another one called “Temple-like Museums” [Fig.7]. The exhibitions in modern Japan are always crowded, and one gets extremely tired by simply looking and appreciating the valuables that are showcased. Thus, the project raised a question regarding the current state of the exhibitions. These days many events are being planned and produced for conveying the importance and



appeal of the cultural spots to the tourists, but what if people were left to roam and wander freely? Surely the comfort of walking around without being controlled would be more enjoyable.

The seminar-workshop “CulNarra College” has emphasised and highlighted the dilemma of the current situation existing around the local cultural spots. Some other fascinating and exciting projects are currently in the stage of planning. In case you also become interested in participating in the events organised by the residents of Minato city after reading this report, do not hesitate to contact the CulNarra office!

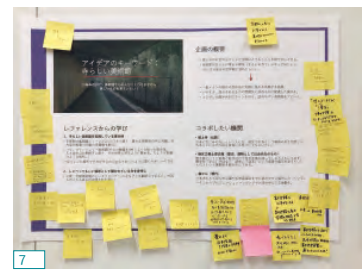
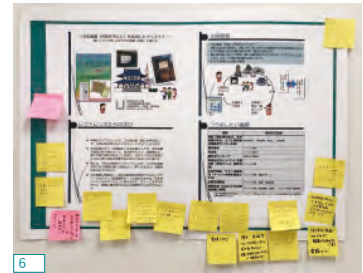
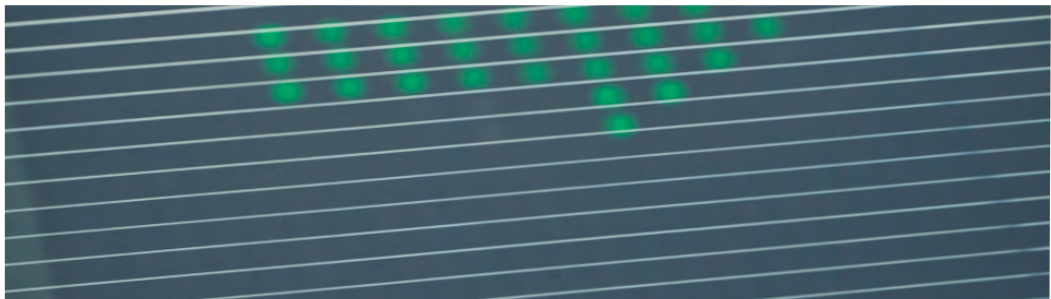


Fig.5: “System and design” workshop

Fig.6: Presentation: “Quiz rally based on cultural spots”

Fig.7: Presentation: “Temple-like museums”



experiences.

Let us take a look at some of the projects introduced during the final presentations, all of which were based on extremely curious and enthralling ideas[Table.1].

“Quiz Rally Based on Cultural Spots” project was born from paying attention to a religious bulletin board notice - *keiji dendō* - installed in front of a temple[Fig.6]. For example: “What are you lacking? We are living our lives thanks to things we cannot make ourselves.”^[*4] The wording of the notice is certainly very impressive. After some research the presenter found out that in recent years the Society for the Promotion of Buddhism had been organising an event known as “Shine! Temple’s Bulletin Board” (<http://www.bdk.or.jp/kagayake2018/publication.htm>). He interviewed the society’s members, asking questions of their ideologies and history, as well as surveyed almost fifty temples located in the neighbourhood! An extremely captivating and alluring project indeed.

Another project, “Hiking and Cultural Resources,” planned to incorporate the perspective of a healthy management application into walking tours. According to the project one would find out how many calories could be burned by choosing a certain walking tour. Moreover, tours would be recommended based on each person’s diet preferences. This idea could easily be turned into a successful downloadable application!

While the topics were mostly of cultural nature, we also discussed projects which touched upon the issues of our modern society. The project “How has the City Changed?” was based on the worries begotten from

Table.1	
Title	Project Information
The City Where Everyone Lives Together. Finding the Place Where You Can Relax and Feel at Home	Matching the person looking for “the place they belong to” with locations. Method: Collecting information on the “places,” transmission, creating locations.
Learning of the Power of Frames Together with Traditional Craftsmen	Paying attention to the frames and ornaments by learning the traditional techniques used by the craftsmen. Method: Lectures, workshops.
Horse Riding Events Held at the Grounds of Temples and Shrines. Yabusame Included!	Organising horse riding events on the grounds of temples and shrines with the purpose of conveying the old traditions and the horse culture passed down through generations. Method: Horse riding, Yabusame events.
How has the City Changed? Exploring Vanished or Currently Disappearing Landscapes	Exploring the past of local areas, such as Mita Koyamacho, which have gone through a process of transfiguration and redevelopment. Method: Conducting surveys, walking tours.
The City of Edo from the Point of View of Spots Created in the 2nd Year of Reiwa Period	Utilizing our five senses while walking down the historical routes and paying attention not only to the old, but also the new buildings and “food.” Method: Walking tours, experience.
Quiz Rally Based on Cultural Spots. Learning of Cultural Assets (Temples) while Enjoying Interesting Quizzes	Using the religious bulletin board notices found at the temples to organise quizzes. Method: Quiz Rallies
Hiking and Cultural Resources	Organising walking tours through the city with the purpose of improving health. Method: Designing courses, developing an app
Temple-like Museums	Creating open museums with relaxed atmosphere similar to that of temples and shrines. Method: Planning and designing of spaces with relaxed atmosphere, incorporating exhibitions
Rediscovering Historical and Cultural Spots by Utilizing the Pinhole Camera	Attaching a handmade pinhole camera to the digital device, holding photoshoot sessions and uploading the results online. Method: Workshops

Fig.1: Conceptual diagram of CulNarra College’s programme and workshop

Fig.2: Cause and effect loop diagram

Fig.3: The presentations of the third session

Fig.4: Poster presentations of the fourth session

Table.1: “CulNarra College” project list

Ichiko, Midori, et al. 資料探索入門—レポート・論文を書くために(アカデミック・スキルズ)[Introduction to Material Research: For Writing Reports and Papers (Academic Skills)]. Keio University Press, 2014.

A recording of the seminar on the academic skills can be accessed on the website of the Keio Research Center for Liberal Arts: <http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php>

[4] Original text is as follows: “何不足 自分で作れぬもので生かされて。”

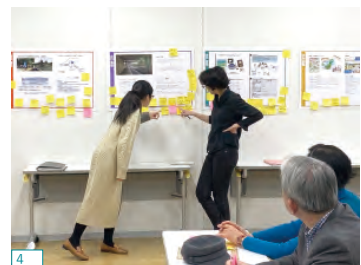
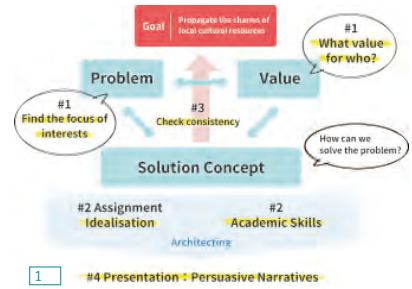
of them used the skills discussed during the second lecture for carrying out their research and preparing for the interviews to be conducted with cultural institutions with the purpose of reinforcing their ideas.

#4 Telling the story: the participants were asked to make PowerPoint presentations summarised into four slides and representing the acquired results by using the presentations of the third meeting as a basis. These were to be printed as posters [Fig.4]. After the presentations were over, the participants wrote down their impressions on yellow post-it notes and the insights regarding their own projects on pink post-it notes. They proceeded to stick the notes on the posters of the presenters, and were given some time to discuss and exchange opinions.

Every single participant's background and interests towards cultural resources was quite evident from the ideas born during their involvement period with "CulNarra College" workshop. It goes without saying that all of the participants had unique backgrounds and characteristics, amongst them a volunteer guide knowledgeable of Minato City's history, a photographer teaching museum workshops, as well as students and members with a day job but great interest towards cultural assets and events. The age and experiences of all participants ranged widely, but they all came together for the "college" [Fig.5]. Those participants who already had similar practical experience surely had some unique ideas in their mind from the very beginning. While there were participants who thought along the lines of "I will propagate the appeal of local cultural spots

by pursuing what I love" during the first workshop, there surely were others who thought "let's use pinhole camera's element of surprise to achieve our goals," or "since the picture itself is usually at the centre of attention, why not use the frames as cut-outs." It could be stated without any hesitation that as a result of this workshop many of the participants managed to get a clearer perspective on their original ideas.

Keeping in mind the discussion of the academic skills during our second workshop session, "CulNarra College" constantly valued the importance of collecting references and participating in different projects. The process was based on some methodologies used for university classes. While at the very beginning many of the participants experienced the difficulties of searching, finding and reading academic papers, to our shock and pleasant surprise, an extremely thick folder of collected reference data was submitted at the end of the last workshop session. We received many comments from the participants of the workshop, such as "I thought that I already knew a lot about 'horses' but after performing a thorough research it turned out there was a lot more to learn," or "I don't usually read books, but I tried to give a shot to some technical ones," and "I was very inspired after taking part in an event held by Ajinomoto Foundation For Dietary Culture, where I tried sushi reproduced by following the traditions of Edomae." We can conclude that as a result of our seminar-workshop the participants did not only learn of some planning techniques but also deepened their knowledge and became involved in many new



[2] For further information on the workshop held in 2018, see Ichikawa, Kayoko. "Let's Become a Cultural Communicator!" *Artefact*, no. 2, Keio University Art Center, 2019, pp. 106-105.

[3] Mastering the mindset of "Think yourself, investigate yourself, deliberate yourself" was at the core of the seminar held by Keio Research Center for Liberal Arts. The importance of finding the specific problem and their solutions by using various academic and intellectual techniques was the goal of the seminar. See >

“CulNarra College”

Residents of Minato City Rediscovering
the Local Cultural Resources

Fumi Matsuya

Senior assistant professor at
Keio Museum Commons

“Cultural Narrative of a City,” often abbreviated to CulNarra, is a project developing cultural communicator workshops. The objective of the project is developing human resources and training them to verbally express the experiences of visiting cultural institutions. The workshop started operating in the fiscal year of 2018 with the students of Keio University as its main subjects. The system and design thinking method was adopted as the fundamental concept of the project.^[*1] By applying this holistic approach we managed to acquire the following information: it became clear that additional merits can be achieved when working with foreign students, especially those who can effectively convey their experiences to the people surrounding them after returning to their home countries. The results of this workshop have consequently been released on social media, and published in the “Appendix” of *Artefact* No. 2.^[*2]

In the fiscal year of 2019, after coming up with these results and establishing a certain background in the field, we started the “CulNarra College” seminar aimed at the residents of Minato City. Keeping in mind that the participants of “CulNarra College” would have a wide array of knowledge and various characteristics we aimed to “propagate the information on local culture resources of our interest,” without concentrating on the process of writing down the results. Below you can find the

programme used for conducting the “CulNarra College” project: **#1 Create the perspective for the story:** we tried to seek out the focus of interest for the purpose of “propagating the charms of local cultural resources.” Understanding what kind of additional merits could be achieved and solved when “doing *something* by oneself” was our goal while the system and design thinking served as means of identifying it [Fig.1]. Searching for specific examples of activities analogous to the ideas of the participants and coming up with more detailed and concrete concepts was the assignment for the second class [Fig.2].

#2 Constructing the story: we discussed the techniques which help demonstrate the survey results by referencing the academic skills often practiced at universities.^[*3] The guest lecturer for the second session of “CulNarra College” was Midori Ichiko, at the time affiliated with Keio University Media Center, who gave some valuable tips on the methodology of searching for information. We also discussed the safety measures which ought to be followed. This very practical lecture was a big success.

#3 Creating an idea journal: during the third session the participants presented their ideas for “propagating the information on local cultural resources” alongside with the analogous proposals for activities [Fig.3]. The participants of “CulNarra College” were asked to collect and prepare relevant bibliography and data for their upcoming presentations. Some

[1] The idea of applying the system and design thinking has been borrowed from assistant professor Masako Toriya of Keio University Graduate School of SDM. What is a system and design thinking? It is an innovative idea which combines and incorporates both design and system thinking methodologies by keeping in mind the relationships of the system constituents and repeatedly returning to the observations, ideas and experiments done within the project. For further information, see Maeno,

Takashi. システム×デザイン思考で世界を変える [Changing the World with System and Design Thinking]. Nikkei Business Publications, Inc., 2014; and Keio University Graduate School of System Design and Management Editorial. *What is System Design and Management*. Keio University Press, 2016. For information on the skills and techniques applied during the workshop, see Ako, Takayuki. “Culture Value Chain Analysis: Expansion of Perspective and its Sharing.” *Artefact*, no. 2, Keio University Art Center, 2019, pp. 104-100.





14



15

Fig.10: Hiroshige, “Ryōgoku Aoyagi” from *Edo koumei-kaitei-dzukushi*

Fig.11: Hokusai, “Hara” from *The Fifty-three Stations of the Tōkaidō*

Fig.12: Hokusai, “The Great Wave off Kanagawa,” from *Thirty-six Views of Mount Fuji*

Fig.13: Kuniyasu Utagawa, *Prosperity of the Fish Market at Nihon-bashi*

Fig.14: Keisai Kuwagata, *Craftsmen at Their Work* (Copied by Wada Otorō, National Diet Library Japan)

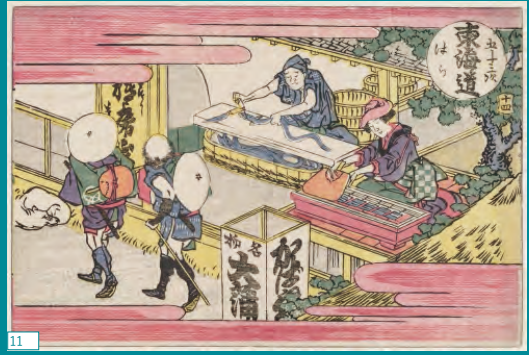
Fig.15: Hiroshige, “April” from *Famous Views of Annual Events in the Eastern Capital*

any refrigerating facilities. Clearly, it was extremely difficult to transport fresh fish caught inshore from the fisherfolk to the table of the people in the big city. I am always amazed by the enormous efforts of the people in the Edo period.

“Edokko (Tokyoite)” is known for having a taste for new and fresh items. Starting from the broader category of luck charms for long life, such novelties happen to have an unusually high price. One well-known example is *katsuo* (bonito). Bonito, when delivered to the fish markets was not sold only to restaurants but also to peddlers. We can find such scenes in existing illustrations depicting an Edo Period street merchant, *botefuri*, carrying around goods hanging from the poles over his shoulders and selling out the bonito he had stocked in advance [Fig.15]. It was crucial to sell bonito fast since it was a type of food that would get spoiled quickly. Ukiyo-e prints make us imagine seafood in the life of people in the Edo period, far more than 150 years ago [8].

From the standpoint of art and humanities I tried to give a comprehensive look at the seafood as we can see it in the printed and hand-painted illustrations after the 18th century. I hope my talk will encourage you to think and consider the meanings and roles of a picture through the illustrations of seafood in the Edo Period.

[8] For the life in the Edo period, see Makoto Takeuchi, *Edo bunka no mikata*, Kadokawa, 2010.



workmanship, derived from the Nagasaki School whose style is based on *Kanga* paintings.

Let's take a look at Hiroshige[Fig.8]. He knew how to depict a carp swimming in the water, giving it the natural impression we have when looking at it from above. The lines of the drawing and the algae express the movement of the flow; the carp in realistic style harmonizes into the scene in an extremely decent and calm expression. The depiction is very far from the feeling of diving into the water with the fish, which can be observed in Hokusai. This highlights the difference between the two styles of the painters. Hiroshige had mastered his craftsmanship in that same late 18th century Kyoto where Ōkyo helped create the realistic style of painting. In other words, it is not a bold or brutal depiction but rather an extension of the expressiveness that aimed at naturalism. If I was to speak out without a fear of being mistaken, Hokusai's style is considered as exciting yet strange, while Hiroshige's as natural and calm.

Carp illustrations were depicted frequently as a lucky charm in ancient times. In addition to these traditional themes, the great Ukiyo-e masters of the *bakumatsu* period also referred to marine life. Let's look at Hiroshige's woodblock prints depicting birds and flowers, in particular the collection titled *uodzukushi*[Fig.9]. Perhaps you can notice something unusual in the size and shape of the fish while looking at the great variety of the illustrations. Maybe they look as if lined up in front of a fishmonger's store. Indeed, in my opinion, it seems as if these fish are waiting for their turn to be cooked. People who purchased these woodblock prints indirectly enjoyed the

freshly procured seafood delicacies found in high-end restaurants.

Considering these prints, during this period it was important for Hiroshige to portray fish to look particularly delicious. In reality, Hiroshige is known as a master of depicting images of famous places; he also carried out a distinctive exception within the Edo scenery prints, known as *koumei-kaitei-dzukushi* (literally various famous venues) [Fig.10]. These are illustrations that show the appearance of famous restaurants and the ingredients that are served there[*7]. The illustrations of restaurants seem to be inextricably linked to his fish and shellfish illustrations.

Having preceded Hiroshige, Hokusai presented a number of print series about the Tōkaidō Road[Fig.11]. This is much more than a mere collection of landscapes, and serves as a collection of manners and customs along the main route. We can observe many human figures and behaviours in these prints. He also depicted typical produce from the various lodgings along the main road, and among them, we find examples of fish presented as typical products of the various areas. We can then find further proof and evidence for the thesis that in these illustrations fish and shellfish are represented as food. To put it simply, though realistic illustrations were an important feature at the turn of the Meiji Period, the capability of drawing these illustrations in a way they would seem "mouth-watering" and "delicious" was a crucial aspect. If realistic illustrations with accuracy of colours and shapes were deemed as "not delicious" by the audiences, they would not sell and, as a result, this would lead to a failure on the part of the artist.

This is where we can find the fate of Ukiyo-e art as a commercial product.

3. Life and Fish in the Edo Period

How was such fish sold in the Edo period? Hokusai's famous *Kanagawa oki nami ura* (lit. The Great Wave off Kanagawa) from his *Fugaku sanjūrokkei* (lit. Thirty-three Views of Mount Fuji) portrays quite explicitly the seafood caught from the coastal as well as deep waters from Sagami Bay and Bōsō Peninsula[Fig.12]. This kind of small rowboat (*oshiokuribune*) is an express boat which is able to swiftly carry the fish, which spoil rapidly, all the way to Edo. The boats in the print should carry the seafood coming from Sagami Bay. By looking at this illustration we are once again reminded that the Ukiyo-e is deeply connected with the real lifestyle of the Edo Period.

Afterward, the merchants would buy the seafood carried by these boats all the way to the fish market. For example, in a painter from the *bakumatsu* period, Kuniyasu Utagawa has depicted the prosperity of Nihonbashi Fish Market in triptych[Fig.13]. Being more a documentary-like example, we can see how the same idea was expressed by Keisai, a former Ukiyo-e artist who turned into a private painter at the service of the Tsuyama Matsudaira Family[Fig.14].

This is not a print, but a painting. Sadanobu Matsudaira, a member of the Shogun's Council of Elders, had commissioned it to record manners and customs of his time through paintings. All the fictional aspects of painting were suppressed as the purpose was to portray an authentic account of what was real. At that time there was no satisfactory storage nor

[7] In Minato area, Hiroshige depicted Shatetsurō in Shiba Shinmei shrine. The Ajinomoto Foundation For Dietary Culture holds *tōto-koumei-kaitei-dzukushi*, a collaborative print series by Toyokuni (Yakusha-e) and Hokusai (buildings and dishes). <https://artsandculture.google.com/partner/AjinomotoFoundationForDietaryCulture>

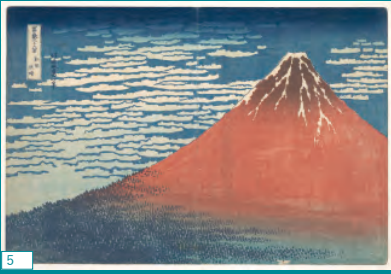


Fig. 5: Hokusai Katsushika, "Fine Wind, Clear Morning", from *Thirty-six Views of Mount Fuji*

Fig. 6: Hiroshige Utagawa, "Shinagawa" from *The Fifty-three Stations of the Tōkaidō*

Fig. 7: Hokusai, *Koi Carp and Turtles* (Saitama Prefectural Museum of History and Folklore)

Fig. 8: Hiroshige, *Koi Carp*

Fig. 9: Hiroshige, "Striped Sea Bream, Rock-trout, and Nandina" and "Abalone, Needlefish, and Peach Blossoms" from *Uodzukushi*

collection[Fig.2].

The popular image of the Edo Period coincides with that of the so-called *Sakoku* — an era of political isolation from the outside nations. However, contrarily to this widely shared vision, the impression we have of the mid-Edo Period (beginning of the 18th century) was instead that of an era of trade and commercial expansion with the kingdom of Netherlands, Qing China and with Joseon Korea. Indeed, through the Kyōhō Reforms, Tokugawa Yoshimune, the eighth *shogun* in his line, lifted the ban on foreign books and eased the import of various Western publications except for Christian religious books^[4].

In the field of art history, it is significant that Japanese painters at the time had more opportunities to see frontispieces and illustrations in foreign books, and moreover, technical books on Western paintings. From a historical perspective, as well, it was a time of drastic change.

Another vital factor in the first half of the 18th century was the arrival of Qing painters in Nagasaki. They were transmitting a new Chinese tradition of flowers and birds paintings. These painters, including Shen Quan and Yi Hai, in the transmission of a new artistic sense, exercised significant influence on Jakuchū and Ōkyō's works[Fig.3]. In brief, the incoming flow of a rational Western painting style and the new intellectual style of Qing Dynasty painting generated a new type of painting that had never been seen in Japan before. This is when realistic painting was born in Japan.

Ōkyō Maruyama and Jakuchū observed flowers and birds; they copied them and made a great

number of sketches directly from nature. Painting is the expression of a person's mental act. Therefore, when creating an artwork in the Edo period, it was overwhelmingly common to start by observing other artists' examples. Every painting emanated from the one that preceded it.

The great significance of the shift in attitude from copying other artists toward the observation of the real as the basic prerequisite is what we call the great revolution of the late 18th century Japanese painting.

2. Genres in Ukiyo-e and Images of Fish and Shellfish

Returning to the marine life illustrations, it should be noted that at the end of the Edo period the change of the subject matter of Ukiyo-e prints is quite an interesting phenomenon. Ukiyo-e originally functioned as a genre of prints that depicted beautiful women, and then moved to Kabuki actors. When fish illustrations started to appear in Ukiyo-e prints in great numbers, it was already the end of the Edo Period^[5]. The preferences of the people who purchased and appreciated Ukiyo-e diversified. It was not until around this time that anything different from the *bijin* (beautiful women) portraits and prints of famous people became popular. New categories of themes, like samurai images by Kuniyoshi Utagawa[Fig.4] and landscape (or as they used to call them, images of famous places) by Hokusai Katsushika or Hiroshige Utagawa were born in the Ukiyo-e world[Fig.5-6].

It was a little later in the first flush of the landscape genre that the two print masters, Hokusai

and Hiroshige, launched the fashion of flowers and birds prints. In the context of Edo Period, *kachōga*, the word standing for “flower and birds,” actually refers to birds, wild animals, insects, fish, flowers and vegetation in general. As you could see, both Hokusai and Hiroshige drew fish and shellfish as flower-bird images.

Let us now make a comparison of Hokusai and Hiroshige's works. The two were known for their rivalry. Nevertheless, compared to Hiroshige, not so many of Hokusai's works have been preserved. It seems correlated to the fact that Hiroshige's flowers and birds prints sold better than Hokusai's. In the end, the evaluation of the Ukiyo-e was based on the preferences of the common people of the time, but this does not mean that Hokusai's prints were less satisfactory. Ultimately, only a few fish illustrations done by Hiroshige have reached us, while many by Hokusai have been preserved^[6].

A conspicuous number of Hokusai's prints are illustrations of carp, a lucky-charm animal at the time[Fig.7]. The carp was well known to the people of Edo as an ingredient in the river-fish dish named “*koikoku*” but carp were also considered to be fish gifted with strong vitality. Therefore, the design of waterfall climbing carp or streamer carp appears a lot during the Boy's Day celebration on May 5th, since people entrusted carp with their wishes of the boys' healthy growth. Hokusai's prints of carp roaming in the water are often depicted with interesting expressions, and the poses and gestures of the carp with their mouths open are very unique. Hokusai's example of this kind shows a very distinctive

[4] National Diet Library Japan held an online exhibit “Japan-Netherlands Exchange in the Edo Period” (<https://www.ndl.go.jp/nichiran/e/>).

[5] For the history of Ukiyo-e, see Chu Kobayashi et al., *Ukiyo-e no Rekishi*, Bijutsu Shuppan Sha, 1998. Masato Naito, *Ukiyo to Ukiyo-e*, University of Tokyo Press, 2017.

[6] Masato Naito, *Kurabete wakaruru Hokusai vs Hiroshige*, Keibunsha, 2019. compares works by Hokusai and Hiroshige with lots of illustrations.



1



Fig.1 Jakuchū Itō, *Dōshokusai-e* (Sannomaru Shozokan)

Fig.2 Kenkadō Kimura, *Collection of Fantastic Shells* (Osaka Museum of Natural History)

Fig.3 Shen Quan, *Pomegranates and Birds* (1749, Private Collection)

Fig.4 Kuniyoshi Utagawa, "Rōrhakuchō Chōjun", from *One Hundred and Eight Heroes from Tales of the Water Margin* (Private Collection)

Images of Fish and Shellfish from the Edo Period

Seafood as an Ingredient for the Table

Masato Naito

Professor at Keio University Faculty of Letters, Director of Keio University Art Center

Today we are going to talk about the cultural narrative of a city, and the keyword for this topic is “the Edomae sea” (Tokyo Bay Fishing Ground). When considering the common ground between the Keio University Art Centre, which specialises in Arts and Humanities, and the Tokyo University of Marine Science and Technology, specialising in sciences, the first idea that came to my mind was “fish.” After having gone through a lot of consultation, I came to the resolution to present on the theme of images of marine animals in the Edo period. I will focus on pictures of fish and shellfish, as appreciated by the people of the Edo era, imaging the coast of Edo-minato including Shinagawa. My talk considers the Edomae sea by observing paintings and prints of the Edo period, from the viewpoints of Marine Life Illustrations as Art/Food.

1. Realism Painting in the Edo Period

Over the last few years the popularity of the Edo Period painter Jakuchū Itō (1716-1800) has grown considerably. Because of his innovative and bizarre manner of expression, Jakuchū belongs to the so-called *School of Eccentrics*. Jakuchū masterfully depicted flowers and birds, for which he was nicknamed the “master of chickens.”^[1]

Dōshokusai-e (Pictures of the Colourful Realm of Living Beings) by Jakuchū forms a collection of

flowers and birds illustrations, drawn with rich colours and bold shapes^[Fig.1]. Some researchers say that the intent of this work lies in Jakuchū’s fervent belief in Buddhism, and the painting pictorializes the world of Amitabha’s Pure Land.

Two of thirty paintings in the collection feature fish and shellfish. You can see various small and large fish swimming towards the left. The choice of the direction is quite interesting, as it suggests a movement towards the Western Paradise of the Pure Land. Moreover, all the fish that appear in his works are realistic. Each one of them is faithful to real fish in colour and shape^[*2].

Jakuchū was born in the commercial food district of Nishiki in Kyoto. I think we should keep this at the centre of our attention: the fish and octopus that emerge in these images are recollections Jakuchū carried since his childhood, his formative experience.

However, looking at the paintings we can also see some unusual subjects, uncommon to the front shops of Japanese fisherfolk of the time. Jakuchū was acquainted with the wealthy merchant and art connoisseur from Osaka, Kenkadō Kimura. Kenkadō was a collector of strange and curious objects and had accumulated an abundant collection of animal specimens^[*3]. For instance, in *Dōshokusai-e* scrolls, Jakuchū drew shells that are not autochthonous of Japan, and therefore we can assert that he had access to Kenkadō’s

[1] Some of Jakuchū’s artworks are available for viewing on Google Arts and Culture. Access <https://artsandculture.google.com/> and search Jakuchū.

[2] For Jakuchū’s artworks, see Yasuhiro Sato, *Jakuchū den*, Kawade Shobo Shinsha, 2019. Hiroyuki Kano, *Jakuchū: Hirogarituzukeru uchū*, Kadokawa, 2010.

[3] Kenkadō’s shells collection is stored in Osaka Museum of Natural History. TUMSAT Museum of Marine Science holds a collection of shell specimens around Japan. LIXIL gallery (Tokyo and Osaka) held a unique exhibition focusing on shells connoisseurs in 2017 titled: “Kaijin-Shell Men: Japanese Conchologists whose Shell Collections Launched an Epoch”

On the other hand, fisherfolk in Honshiba and Kanasugi opened the Zakoba fish market in the local Shiba village. Around 1604 (Keichō 9), when the Tōkaidō road was established as the main road from Edo to Kyoto, fisherfolk in Shiba village started selling small fish (*zako*) on the road, and eventually the area was expanded to Zakoba. In 1872 (Meiji 5), a weir was built offshore of Zakoba and the railway between Shimbashi and Yokohama, which was Japan's first railway, was laid. The surf zone of Shiba village remained canal-like for a while, but in 1970 (Shōwa 45), the whole area was reclaimed, and the city-run Honshiba Park was constructed on the site[Fig.5]. The famous rakugo (Japanese storytelling) “Shibahama” was set in and around the surf zone of Shiba village.

In 1677 (Enpō 5), Edo's first local magazine, the *Edo Suzume*, was published. Moronobu Hishikawa painted pictures of the Nihonbashi Fish Market for the magazine[Fig.6]. In “Nihonbashi Uoichi” (Fish Market) in *Edo Meisho Zue* (The Guide to Famous Edo Sites; Tenpō 5-7, 1834-1836, Settan Hasegawa), the market is depicted as very lively. Many other artists also painted the Nihonbashi Fish Market[Fig.7].

Both Nihonbashi and Tsukiji Fish Markets were good locations for ichthyologists to collect valuable specimens. For example, at the 13th Special Exhibition of the Tokyo University of Marine Science and Technology Library in 2017, “Fish of the Edomae Sea in Encyclopedias”, the scientific painter Kumatarō Itō was introduced. He is well known as the painter who painted fish for encyclopedias from Meiji to Shōwa[Fig.8]. We can find the

phrase, “Tokyo fish market” many times in his original paintings.

I have outlined the fish of Edomae sea and the relationship between fish, the people engaged in fishing, and us today, overviewing the history from the Jōmon period up to the present day. I hope I have given you a good opportunity to start thinking about the Edomae sea and its future.



Shirauo-yaku consisted of migrant fisherfolk from the Kansai area or native fisherfolk who originally lived in the Kanto area. The *shirauo* fishing became very popular, but the traffic of ships became a disturbance as well as the bonfires being used for fishing, so in 1627 (Kan'ei 4) — or some say in 1707 (Houei 4) — a self-restriction decree on fishing was issued. Also, signs of a poor catch of *shirauo* had been observed around 1758 (Hōreki 8) as a result of the overfishing.

Most of the migrant fisherfolk were from Tsukuda and Ōwada villages (today's Nishiyodogawa-ku in Osaka City) of Settsu-no-kuni. Magoemon Mori in Tsukuda village, who was Ieyasu's favourite and worked as a secret agent during the battle of Sekigahara and the Siege of Osaka, also delivered fish while Ieyasu was staying at Fushimi Castle around 1582—when the Honnōji Incident occurred. Therefore, several people of Tsukuda village went down to Edo at the time of Nyūfu — more than 30 people in 1612 (Keichō 17). In Edo, they also presented seafood to the Shogunate and guarded the Dōsan-bori canal. They developed the land in the Teppōzu tidelands given by the Shogunate and named it after their home village Tsukuda-jima [Fig.3].

Fukagawa's fishing town was across the Sumida River and on the opposite side of Tsukuda-jima. This area is covered today by Kiyosumi 1-chōme, Saga 1-chōme, and Eitai 1-chōme in Kōtō-ku. In 1629 (Kan'ei 6), people of Tsukuda and Ōwada villages in Settsu-no-kuni, along with people from the Tosa, Kii, and Oumi provinces, requested development of the east bank of the Sumida River and the slightly elevated lowlands downstream of

the Onagi River. The Shogunate approved this development under the condition that Japanese whiting, basket clams, and hard clams be presented three times a month along with obligations of boat-related labour. This was the process for the formation of Fukagawa fishing town.

Fishery production increased dramatically in these traditional fishing villages because of the migrant fisherfolk, and a large volume of seafood was provided to Edo. However, from the second half of the 1600s into the 1700s, there were many conflicts between fisherfolks' towns and uras (inlet areas), or between uras and isotsuki-mura (shore reef villages). Overfishing and the decline of fishing resources were also problems at that time. Therefore, in 1816 (Bunka 13), representatives from the 44 uras in three provinces, Musashi, Sagami, and Kazusa, gathered in the "Kanagawa-ura Conference" and signed a memorandum called "*Gitei Issatsu no Koto*". They specified the fishing gear and methods (*sanjuu hashshiki*: 38 jobs) and set the regulatory laws and coordinated the meeting. The fishing in Tokyo Bay advanced as a result of this meeting. That was the basis of the fishing laws from the Meiji period to the present (recently, in December 2018, the revised Fisheries Act was enacted).

3. Distribution and Gyokaizu (Paintings of Fish and Shellfish)

The distribution system to deliver fresh fish and shellfish to consumers also significantly advanced after Edo Nyūfu. The development of large-scale channels such as the rerouting of the Tone River and the

improvement in transportation methods by boats from the Izu Peninsula to the Bōsō Peninsula have contributed greatly to the advancement. Swift boats, called "oshiokuribune", are shown transporting fresh fish in Hokusai's painting "The Great Wave off Kanagawa" (*Kanagawa oki nami ura*) from the series *Thirty-six Views of Mount Fuji (Fugaku sanjūrokkai)* [Fig.4]. According to one record, around 1722 (Kyōhō 7), there were seven *oshiokuribune* in Koshigoe village in Kamakura, fourteen in Misaki town in Miura, and six in Katsuyama village in Hei.

Now, let's focus on the markets in which the products were connected to consumers. The Nihonbashi Fish Market represented the market in Edo and originated in the neighbourhood of the Dōsan-bori area. The market was established almost at the same time as Edo Nyūfu, and local fisherfolk in Honshiba and Kanasugi and migrant fisherfolk represented by Kyuzaemon Mori were major market players. In 1607 (Keichō 12), it is said that Kyuzaemon Mori relocated to Nihonbashi Hon-odawara-chō from Dōsan-bori. In Nihonbashi, the market gradually expanded from Hon-odawara-chō to Hon-funa-chō, Hon-funa-chō-yokodana, and Anjin-chō, and formed the Uogashi (fish market). Uogashi was located around what is today the north bank of the Nihonbashi River, from Nihonbashi Muromachi 1-chōme to Nihonbashi Honchō 1-chōme. The market sellers provided seafood to people in Edo and Tokyo for over 300 years until 1935 (Shōwa 10), when Uogashi moved to Tsukiji due to the Great Kanto Earthquake of 1923 (Taishō 12).

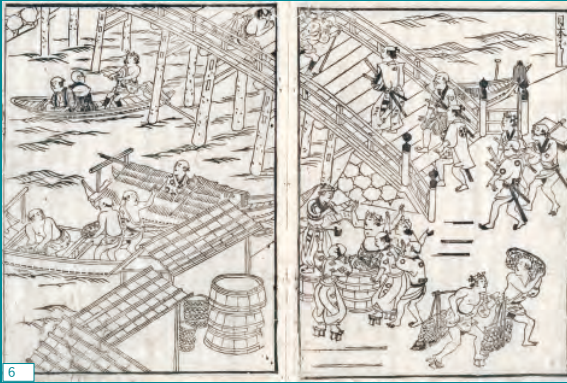


Fig.6: Moronobu Hishikawa, "Nihonbashi" from *Edo Suzume*

Fig.7: Eisen Keisai, "Snowy Morning" from *The Sixty-nine Stations of the Kisokaidō Road*

Fig.8: Kumatarō Itō, "Goldribbon soapfish" from *The Illustrated Notebook of Fishes* (Tokyo University of Marine Science and Technology Library)

supply. Therefore, extreme fishery promotions and distribution methods were adopted. There are few archaeological materials on fish from the Edo period. However, various historical documents are available.

One fish found in these documents is called *shirauo* (Japanese ice fish). People from Tsukuda and Ōwada villages of the Settsu-no-kuni (Osaka at present) were called to Edo to catch *shirauo*. Also, there was a group of fisherfolk who were given the privilege of exclusively catching *shirauo* at the Sumida River from autumn to spring. However, because of resource depletion, *shirauo* fishing in Edomae stopped by 1964.

Since 1590, fisherfolk from Shiba and Kanasugi villages of the Musashi-no-kuni (Minato-ku, Tokyo at present) have engaged in authorised fishing, and they appear to have given tribute of stone flounders, hard clams, and seaweed. Sometime during the Keichō period (1596-1615), righteye flounders, smelt-whittings, and halfbeaks were caught by a small seine-net in Edomae. There is also a record that in 1604, the Nihonbashi Fish Market prepared sea bream, sea bass, and striped mullet for birth celebrations of the 3rd Shogun Iemitsu. There was an interesting regulation called “Hashirimono Kinshi-rei” in 1664 which restricted the season in which certain ingredients could be put on the table. For example, angler (*ankou*) could be eaten only in November and skipjack (*katsuo*) could be eaten only in April. It seems that people at that time were able to buy almost the same fish that we eat now, but they likely valued the first fish of the season more than we do. This is reflected in the famous poem

(*haiku*), “*meniwa aoba, yama hototogisu, hatsugatsuo*” (green leaves in the eyes, a little cuckoo in the mountain, the season’s first skipjack), written by Sōdō Yamaguchi (1642-1716), a friend of Bashō Matsuo.

For almost 100 years since Edo Nyūfu, fishing, food culture, and of course, the distribution system have developed rapidly. Angler and skipjack could be caught near the entrance to Tokyo Bay on the Miura Peninsula or Bōsō Peninsula, and from Sotobō to Jōban. In Edo, cod and salmon caught in northern areas and yellowback seabream and tilefish caught in deeper water areas were also consumed.

The “Tokyo Bay Fishing Ground Survey Report” (*Tokyo-wan Gyōjō Chōsa Hōkoku*) was published between 1898 and 1901 (Meiji 31-34). The report is a clear scientific survey of the fish in Edomae, and 95 species of fish were covered. Moreover, the “History of Fisheries in the Tokyo Metropolitan Inner Bay” (*Tokyo-to Naiwan Gyōgyō Kōbōshi*), written in 1971, relates when major species of fish that were previously caught in inner Tokyo Bay disappeared. Specifically, skipjack disappeared in the early Showa period, mackerels in 1935, and flounders in 1947.

2. People Who Supported Edomae Fishery

A particularly interesting time is the early Edo period, so let’s focus on that for a moment.

At the beginning of the Edo period, fisherfolk who were privileged by the Edo Shogunate to work in fisheries were divided into two groups — fisherfolk in the local fishing villages, and

migrant fisherfolk from around Osaka Bay.

The local fishing villages were represented by Honshiba-ura, Shiba-kanasugi-ura, Shinagawa-ura, Ōi-ura, Haneda-ura, Namamugi-ura, and Shinjuku-ura, Kanagawa-ura’s fishing town. These were collectively called Osai-hachiga-ura, and the people were called Shirauo-yaku. On the other hand, migrant fisherfolk were those who reclaimed Tsukuda-jima Island and those who established the Fukagawa fishing town.

Each fishing village in Osai-hachiga-ura was established at a different time. Fishing towns gradually sprung up from the time of Nyūfu in 1590 to the 1600s. The formation of Osai-hachiga-ura was officially recognised in 1735 (Kyōhō 20), over 100 years after the beginning of the Edo Shogunate. During this period, the population of Edo had already reached one million, and fishing to feed the people of Edo had progressed and was very active.

On the other hand, people who were given a special duty called Shirauo-yaku were living in Koami-chō. That town was located in today’s 1-chōme, Kakigara-chō, Chuō-ku, in Tokyo, between the Tokyo Metropolitan Expressway Edogawa JCT and Hakozaeki JCT. At that time, Koami-chō was situated at the exit of the most important canals, Dōsan-bori and Hirakawa, to the Edomae sea. As the name suggests, Shirauo-yaku had the duty to present *shirauo* caught in the set-net every morning in the *shirauo* season, between November and March. During this period, only Shirauo-yaku were allowed to catch *shirauo* on the Sumida River from Asakusa to Shibaura [Fig.2]. However, it is unknown whether

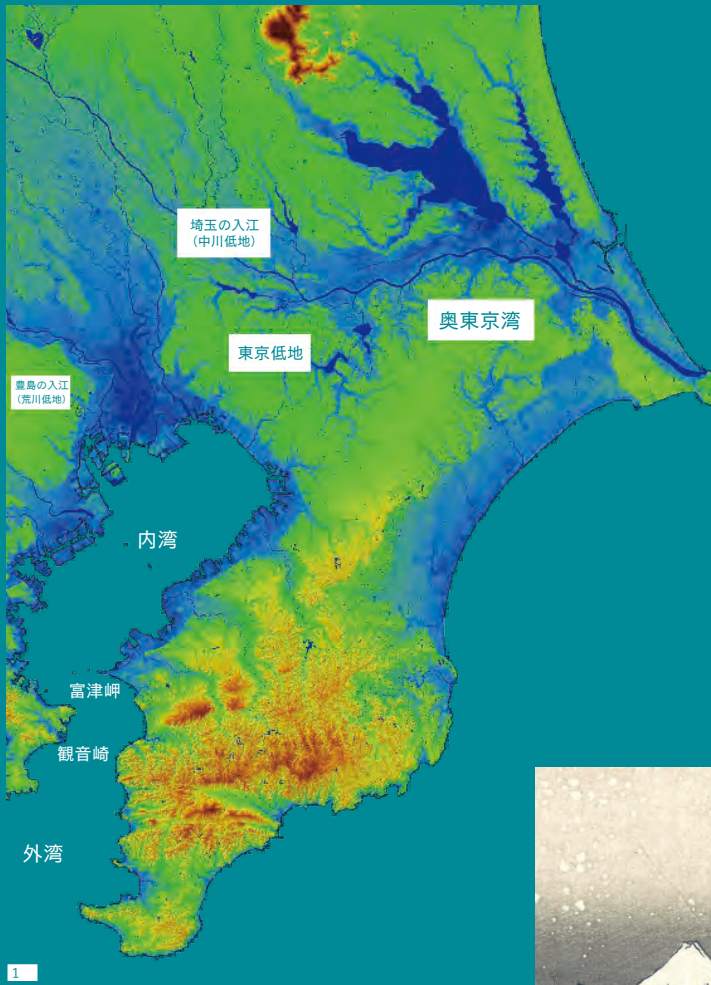


Fig.1: Edomae sea consists of Oku Tokyo-wan and inner bay (Geospatial Information Authority of Japan, Digital Elevation Model, Chiba D1-No.954)

Fig.2: Settan Hasegawa, "Tsukuda shima sirauo ami" from *Edo Meisho Zue*

Fig.3: Hiroshige Utagawa "Eitaibashi Tukuda shima" from *Meisho Edo Hyakkei*

Fig.4: Hokusai Katsushika, Part of "The Great Wave off Kanagawa", from *The Thirty-six Views of Mount Fuji*

Fig.5: Minato City Honshiba Park

An Outline of the Fish and Fishing in Edomae

Hiroshi Kohno

Professor at Tokyo University of Marine Science and Technology

I have been pursuing research on the fishes of the Edomae sea (Tokyo Bay Fishing Ground) for the past 25 years. For the last 15 years, together with Professor Kawabe, I have studied the history of the Edomae sea and have attempted to reach an agreement with faculty members, students, and local people on what kind of sea we want Tokyo Bay to be in the future.[*1]

Today, I would like to introduce the fish in Edomae — not just the types of fish and their ecology, but I would like to share some facts surrounding fish and our relationship with them, such as through fisheries and distribution, from the Jōmon period to the present day. I will try to keep my talk organised as much as possible.

1. Fish in Edomae

When we compare the names of fish species caught in Edomae in the Jōmon period to those caught in the present day, both groups of fishes are nearly identical.

Approximately 11,000 years ago, Tokyo Bay was all land. At the beginning of the Jōmon period, a Holocene transgression (Jōmon sea advance, geologically called the Yurakuchō Transgression) occurred. This area became a sea, which spread from the Kawagoe area in Saitama Prefecture to the Koga area in Ibaraki Prefecture. We call the area Oku Tokyowan, where many shell mounds were formed in the coastal areas; one-quarter of all shell mounds in Japan exist along the Edomae

sea[Fig.1].

Fishing in the inner bay area mainly provided black sea bream, sea bass, and shellfish such as blood clams, manila clams, and hard clams. However, these fisheries nearly disappeared about 3,000 years ago, from the end of the Jōmon period to the Yayoi period.

Most research on fish remains found in shell mounds is based on bone shape, and it is quite difficult to determine fish species from bones. But, because of such research, we have identified at least 50 species of fish from the shell mounds around the Edomae sea. Currently, 750 species of fish are found in Tokyo Bay, according to my survey. From the area northwest of the Tama River and the Cape Futtsu line (I call this area “Naiwan-kita”, or northern inner bay), about 170 species of fish are observed. From the area called “Naiwan” (inner bay), which is farther north than Cape Kannonzaki and Cape Futtsu, about 450 species of fish are observed. In “Gaiwan” (outer bay), nearly 500 species of fish are observed.[*2]

Historical records show that until the time of Edo Nyūfu (at the time when Ieyasu Tokugawa entered Edo in 1590, Tenshō 18), the Edomae sea might have been calmer than it is now. At the beginning of the Tokugawa reign, approximately 10,000 people rushed to settle in the small village of Edo, where only about 100 people lived. Consequently, not only living space, but also water and food, were in short

[1] ‘The Archive of Tokyo Bay’ edited and published by the Edomae ESD Program of TUMSAT and the Library of TUMSAT shares many images and resources relating to the subject of this article. https://lib.s.kaiyodai.ac.jp/library/archive/bay_of_edo_htmls/index.htm

[2] *Fishes of Tokyo Bay*, supervised by Hiroshi Kohno, edited by Mitsuki Kano and Toshihiro Yokoo, Heibonsha, 2011. [河野博(監修)加納光樹・横尾俊博(編集)『東京湾の魚類』平凡社、2011年。]

Minato School as an example.

Edomae Minato School

From April to November 2011, Edomae Minato School (hereinafter Minato School) was organised by the Edomae ESD, Shibaura-konan Regional Office Collaboration Promotion Section, Minato-ku, and the Edomae Minato School Executive Committee, involving local residents of Minato City. Residents had a desire to do something to develop human resources besides attending lectures, and Edomae ESD was discussing how our proposals on Tokyo Bay management made in previous ESD activities could be linked to policies. We also felt the need for leaders to expand activities in the region. Eleven members of the Shibaura-konan resident community and 3 staff from the Shibaura regional office visited TUMSAT to discuss what we could do together and selected the research topic “studying the sea and fish”.

The school had two parts. In “Part I: Learning Design”, we first considered what to learn (theme) and how to learn (programme), and in “Part II: Learning Action”, the programme created in Part I was implemented[Fig.2].

Part I consisted of a lecture to share an overview of the resources and environment of Tokyo Bay, group work for every participant to consider the themes and programme. They formulated programmes based on topics such as water quality, creatures, fisheries and development, and voted to choose the specific programme to be implemented[Fig.3]. Part II was named “Let’s discover the Edomae fishery”. We set fisheries as a major theme, not only because it

was discussed in the programme proposals, but also because we thought that we could include topics like the formation and use of canals and the transformation of the coastline, by learning about fisheries in the past and present[Table].

3. Difficulties in creating a programme together

In this way, Minato School worked together with local people in the programme development. The process was fun, but there were two problems. First of all, there were not as many applications as we had expected for the programme

Although the Shibaura Regional Office circulated the recruiting information in Minato City, the number of applicants who initially applied was, sadly, less than 10. The number increased later, but I thought that we should have taken some preparation steps to share a brief overview and the significance of finding local issues and creating learning programmes. Secondly, it was difficult to apply the proposed programme (unchanged) to “Part II: Learning Action”. For example, the adventurous proposal of “Let’s drink water from the canal” could not be implemented due to health risks even though the number of votes was high. It was also necessary to redraw the overall picture of the programme, arranging the schedule of lecturers and the circumstances of the university. I also think that, in general, there was not enough time for participants to become fully involved.

Edomae ESD’s participatory action research is in the process of collaborating with local people. Now, we are planning to promote

activities based on the Marine Science Museum of TUMSAT, returning to the origin. We are planning a “fish café” where we will invite fisherfolk to talk about the changes in the fishery around Shinagawa[7]. If you are interested, please join us.

Table: Part II programme

1. “Understanding Tokyo Bay as a whole” (October 8)

- Self-introduction
- Ukiyo-e puzzle game (finding photos recently taken at the place depicted in the Ukiyo-e prints)
- Lecture by Prof. Kohno “Understanding Tokyo Bay as a whole”
- Workshop on Tokyo Bay “I like / need to work / want to know more about this point” of Tokyo Bay

2. Learn about the old Nori culture fishery: Tokyo Harbour Cruise (October 22)

- Observe the current Tokyo Bay while thinking about the Nori culture fishery that once flourished there.
- Write on a chart what one notices and finds interesting, and observe the scenery of the port.

3. Learn about the current Anago (conger eel) fishery (November 12)

- Learning about one of the current Edomae fisheries, Anago (conger eel) fishery from the viewpoint of researchers and the experience of fisherfolks, and sharing among participants the basics to consider how to use Tokyo Bay in future.
- Screening of a movie about Anago fisheries, lectures by a researcher and a fisherman, group workshop, and Anago cooking

4. Let’s talk about the Edomae fishery (November 19)

- Participants’ talks about the Edomae fishery
- Reflections on previous activities.
- Group workshop to discuss proposals about the future of the Edomae fishery and Tokyo Bay. Participants vote to select proposals by Edomae Minato School.
- Certificates ceremony

[7] [Editorial team] For practices in science communication field, refer: Midori Kawabe, Hiroshi Kohno, Takashi Ishimaru and Osamu Baba, 2013. “A University-Hosted Program in Pursuit of Coastal Sustainability: The Case of Tokyo Bay.” *Sustainability* 5, no. 9: 3819-3838. <https://www.mdpi.com/2071-1050/5/9/3819>

from factories in the coastal industrial zone. In the 1970s, 14 bills on pollution prevention were passed at the National Assembly, and the oil crisis forced the Japanese industrial structure to change. These changes in the socio-economic situation have improved the coastal pollution problems in Japan, including in Tokyo Bay, although the environment of Tokyo Bay is still not acceptable. Due to the nutrient-rich wastewater, plankton breeds abnormally and pollution by organic substances is chronic, especially in the inner part of Tokyo Bay.

[“Sustainable development” since the 1990s and transformation of coastal zone policies](#)

Since the 1990s, Japanese coastal policy has changed dramatically. It was triggered by the “Agenda 21” action plan to achieve sustainable development, adopted at the United Nations Conference on Environmental Development held in Rio de Janeiro in 1992. The Basic Environment Law (1993) and the Environmental Impact Assessment Law (1997) were then enacted. The River Law was also revised in 1997 to support environmental conservation and reflect the opinions of local residents. In 1999, “protection of coastal environment” and “appropriate use of the public coast” were added to the purpose of the Coast Act. The Basic Act on Ocean Policy, which was enacted in 2007, specifies “comprehensive management of coastal areas”. These laws and policies promote coastal area management integrated with the land area^[4].

Conserving the water environment has become one

of the mainstream measures for Tokyo Bay. Organisations such as the Tokyo Bay Revitalization Promotion Council (2003) and Tokyo Bay Regeneration Public-Private Partnership Forum (2013) were established and local governments, related ministries, organisations and companies are working together to revitalise Tokyo Bay. However, the waterfront of Tokyo Bay is far from the centre of the city, and seafood from Edomae is no longer available. It may be difficult to find “a diverse group of people who are willing to regenerate the environment in Tokyo Bay” in a situation where citizens around the watershed have few opportunities to see Tokyo Bay.

2. Edomae no Umi: Creating a Learning Circle / The Edomae ESD Programme of TUMSAT

[Enjoy, Think and Learn about Tokyo Bay](#)

Here, I introduce the activity, “Edomae no Umi: Creating a Learning Circle”, known as “Edomae ESD”, of Tokyo University of Marine Science and Technology^[5]. Edomae ESD was established in the autumn of 2006 with the intention of learning and thinking together to create a scheme for the sustainable use of Tokyo Bay. Our group was selected as the United Nations Decade of Education for Sustainable Development project by the Ministry of the Environment. We involved faculty members from diverse academic fields, including ichthyology, biological, chemical, and physical oceanography, fisheries economics, coastal management, and education. Supported by the curator of the Museum of Maritime Science and Ota City Folk Museum,

Edomae ESD has been conducting various ESD activities together with students, local residents, museums, fisherfolk, citizens’ groups and local government.

ESD is an abbreviation for Education for Sustainable Development. Every region has its own culture and history and the form of sustainable development is different. However, environmental segregation, social equity, and economic efficiency are considered to be common axes for sustainability regardless of region. ESD is expected to be a co-learning/co-education programme for local people, unlike school education led by teachers. The best method for ESD to realise co-learning in local areas is participatory action research. In this method, local people participate to identify, analyse, and consider the solution to local problems. They also implement the solution, and then evaluate and reflect on it, revising the plan if necessary. This is a participatory survey method that follows the project cycle. The important thing is for local issues to be raised by the local community, not by experts or government agencies.

Since 2006, Edomae ESD has carried out several activities such as science cafés and public lectures, and created activity programmes for the Ota City Folk Museum and educational programmes for marine environmental study. Since the founding of Edomae ESD Shinagawa School in 2010, which focuses on reclamation, water quality and the fisheries of Tokyo Bay, we have strived to practice action research to realise the original ESD purpose^[6]. I would now like to explain the practice of Edomae ESD, taking Edomae

[4] Midori Kawabe, Hiroshi Kohno, et al. ‘Education for Sustainable Development for Tokyo Bay: Developing a Practice Framework of University-Based Coastal ESD’. *Marine Policy* 33, no. 4 (July 2009): 720–25.

[5] [Editorial team] For the activities of Edomae ESD, refer Midori Kawabe and Hiroshi Kohno. *Edomae environmental studies: 12 chapters for enjoying, considering, and learning the sea*. Tokyo University Press, 2012., and newsletters and activity reports on their website.

[6] [Editorial team] Reports of Edomae ESD Shinagawa School are available online.

“Edomae no Umi (Tokyo Bay Fishing Ground): Creating a Learning Circle”

Action research at Tokyo University of Marine Science and Technology for Sustainable Tokyo Bay

Midori Kawabe

Professor at Tokyo University of Marine Science and Technology

The theme of today’s symposium is fish from Tokyo Bay. I will begin by talking about the past and present state of Tokyo Bay and introduce the action of the Tokyo University of Marine Science and Technology, named “Edomae no Umi (Tokyo Bay Fishing Ground): Creating a Learning Circle”, which involves both students and local people.

1. The past and present of Tokyo Bay

The blessing of nature of Tokyo Bay

Tokyo Bay is an enclosed inner bay approximately 50 km long and surrounded by the Tokyo Metropolitan Area, which includes Tokyo, Kanagawa, and Chiba. The waterbody is 1380 km² and the population within the watershed comprises 23% of the total population of Japan^[*1]. It is no exaggeration to say that Tokyo Bay is one of the most heavily-used seas in the world, which supports the lives and economy of the Tokyo Metropolitan Area, accepts drainage, and maintains the functions of the capital.

About 100 years ago, there were tidal flats and shallow waters almost everywhere along the coast of the bay. The “Tokyo Bay Fishing Ground Map” (Meiji 41 [1908]) is a resource that shows how rich the inner part of Tokyo Bay was. According to the map, there were seaweed beds of “Niramo” (Japanese eelgrass) and “Ajimo” (sea wrack) throughout the bay, and there were areas where shellfish such as “Asari” and “Hamaguri” could

be harvested. There were also various fishing areas reported on this map, such as the “Uchiyami (throwing net) area”, “Koshimaki area”, “Ebiketaami area”, and “Datsu-nagashiami area”^[Fig.1]. In Tokyo Bay during that time, it can be observed that the fisheries for various seafood were quite active^[*2].

Land reclamation and water pollution

However, the tidelands and shallow waters have mostly been lost now due to modernisation, especially the large-scale coastal development from the postwar period to the present. The reclamation process proceeded at a rapid pace after 1960 in a period of high economic growth. Complexes and factories were created on the coast, forming a large industrial area. The reclamation is continuing to expand the functions of Tokyo to include urban facilities such as waste disposal sites, sewerage facilities and transportation facilities. As for the Tokyo Metropolitan waters, because of the Tokyo Port Revised Port Plan (1961-70), more than 4,000 fisherfolk belonging to 17 fishery cooperatives were forced to relinquish their fishing rights to improve the port^[*3].

During the period of high economic growth, because the environmental law system was not in place, direct water pollution (primary pollution) was a major problem. This was due to chemical substances and organic substances discharged

[1] Tokyo Bay Environmental Information Center. Accessed 22 February 2020.

[2] Sensui Sosuke. “Tokyo Bay Fishing Ground Map: Report of Fishing Ground, 52nd edition”. 1908.

[3] [Editorial team] Mr Ohno explains about Tokyo bay in ‘Japanese Bay Culture Archives’ by Waterfront Vitalization and Environment Research Foundation.

Rediscovering Tokyo Bay: Maritime Culture of Edomae

Edited and Written by
ARTEFACT editorial team



Tokyo Bay—look like now? To find this out, we visited Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT) in Shinagawa to give lectures on the sea and culture of Edomae sea (Tokyo Bay) (p.95). TUMSAT has organised the Edomae ESD Council since 2006, carrying out activities to study the history and current environment of Tokyo Bay and to consider its sustainable use. They are engaged in a variety of initiatives, such as a cruise ship tour to see Tokyo Bay, town walks with fisherfolk and a workshop to discuss issues concerning Tokyo Bay. However, they feel that the existence of Tokyo Bay is fading from people's minds.

How can we find a sign of the sea in Minato City that connects to memories of the past?

There was a suggestion in the activities of 'CulNarra College', a human resource development workshop that began this year (p.76). The course was developed from last year's 'Cultural Communicator Workshop' and provides instruction in how to tell a narrative of urban culture in your own words through educational practices at university. The program included group work on system design thinking and academic skills. The final task of the course was to create and present an idea note to convey to others the attractions of local cultural resources. One participant presented a project to learn about the towns of Minato City through experience as opposed to in a classroom lecture. The project emphasised the use of all five senses, including taste and hearing, and not just sight. Up to now, there has been a tendency for many of the Cultural Narrative of a City programmes to take a visual

approach from the perspective of texts or visual images. This reflects the fact that Keio University Art Center is a university-affiliated research institute and is also a museum archive. However, how do senses such as sound and smell, outside sight—outside the gaze—perceive a sign hidden in the city?

An essay by Rhetorica, '6 Fragments on Marine Aromas: Attending to the Smells of Tokyo Bay' (p.56), drops a big hint about the potential of this 'outside the gaze'. The text talks about the imagination of scent/smell for space while referring to poems by Baudelaire as well as Kōdō (the Japanese art of appreciating incense). From the text, it is possible to understand how scent/smell can easily bridge temporal and geographical gaps.

The sea view from Minato City is only vivid in memory and is no longer visible to our eyes today. However, if you go outside your gaze and follow the scent, you will find in the smell of the tide that you feel at an unexpected moment or in the smell of humid air, a sign of the sea hidden in the city.

We ended up being 'outside the gaze' while following a sign of the sea. The scents and sounds bring out a sign of the sea as well as an invisible sign of the city. While research on scents has yet to be conducted, various projects on sounds are being carried out using sound AR, etc. While referring to these practices, we hope to revisit, with this new perspective, various places such as temples and buildings that the project has visited so far. We look forward to encounter new narratives that will appear outside the gaze.





Follow a Sign of the City Outside the Gaze

Yu Homma

Research Fellow at Keio University Art Center,
Senior Assistant Prof. at Keio Museum Commons

The activities of the ‘Cultural Narrative of a City’ project marked their 4th anniversary this year. By planning events and human resource development programmes in cooperation with local cultural institutions, it is possible to learn about the activities of various cultural institutions and their connections with the local community. The activities of cultural institutions reflect the surrounding landscape, such as nature, the history of the land and people’s activities, sometimes in a clear form or as a more subtle sign.

This year, many of the project’s events took place on hills, including at the International House of Japan (I-House) in Toriizaka, Mita Teramachi and Keio University’s Mita Campus. A lecture and tour entitled ‘Three Architects and International House of Japan’ was held at the I-House (p.72). In the lecture, three architects—Kunio Maekawa, Junzo Sakakura and Junzo Yoshimura—who worked on the architecture of the I-House, explained the background of how they came to design it while indirectly overlapping each other’s careers through master-disciple relationships with overseas architects. During the tour, participants had the opportunity to actually see the architectural features mentioned in the lecture and were also informed about the remains of Koyata Iwasaki’s residence, prior to the construction of the I-House. The remains include a concrete foundation and tunnels. Those who took part in an event called ‘Trans/Formation of Temple Town in Minato City’ went up Yureizaka, a slope going up to Teramachi centring around 4-chome, Mita (p.62). A researcher and temple

chief priests gave a lecture on why Teramachi (literally ‘temple town’ in Japanese) was formed in this area and the roles that the town has played from the Edo period to today. Just as last year, ‘Architecture Open Day’ was held at Keio University’s Mita Campus. Some of the buildings were open to the public, including the old library, which has undergone a two-year programme of seismic strengthening. The article by Shinsuke Niikura (p.68) elaborates various practices concerning architecture in universities, including ‘Architecture Open Day’. As a new addition this year, we began an experts’ talk session, ‘ArchitecTalk!’.

On hills there are interesting memories, that is, memories of the sea. In meetings with cultural institutions based on hills, they often talk about the sea that was once visible. For example, from the Edo to the Meiji period, there used to be a clear view of the sea along the coastline, from the south side of Mita Teramachi. Inariyama, home to the Enzetsu-kan (Public Speaking Hall) of Keio University, was known as somewhere that overlooked the sea in Shinagawa. The NHK Museum of Broadcasting, which sits on Mount Atago, contains a number of Ukiyo-e paintings that depict a sea view from the mountain. Although many memories of the sea spoken on hills are linked to a view, that view has long been lost. The coastline, which stood just off the Tokaido road, has since been moved away due to coastal development, with high-rise buildings now obstructing the sea view. In today’s Minato City, a sign of the sea can only be felt very near the coastline.

What does the actual sea—

The Activities of the Cultural Narrative of a City Project in 2019 / About ARTEFACT

In 2019, the Cultural Narrative of a City project carried out a series of public events with the support of FY2019 Minato Cooperation Project for Cultural Program and the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan. This project magazine ARTEFACT compiles reports and edited transcriptions of the events but not in the form of conventional activity report. It takes a cultural magazine-style approach, hoping that the readers of ARTEFACT can enjoy and learn the cultural narratives produced in our project.

Cultural Narrative of a City: Rediscovering Local Cultural Resource
Supported by: FY2019 Minato Cooperation Project for Cultural Program

Cultural Narrative of a City in Minato: Activation of Local Cultural Resources through University Museum Initiative
Supported by: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

A Collaborative Workshop with Roppongi Art Night 2019 “Talking about the Roppongi Art Night — My Night Cruising”
5 April to 26 June 2019, Keio University Mita Campus and Roppongi Hills et al.
Participants: 14 students
Facilitators: Masako Toriya, Kayoko Ichikawa, Yu Homma and Akiko Takahira (Keio University)

Documentary Film Screening “Minato-e: Notebooks on Cities and Culture”
26 May 2019, 13:30-16:00, Keio University Mita Campus North Hall
Participants: 44 people
Speakers: Risa Abe, Fumito Fujikawa and Keiko Okawa
Discussant: Hitoshi Kubo (Keio University Art Center)

Workshop to Rediscover Local Cultural Resources “CulNarra College”
23 August, 31 October, 29 November 2019, and 24 January 2020, 18:30-20:30, Keio University Mita Campus and Shibaura Residents Collaboration Space
Participants: 20 people
Lecturer: Kayoko Ichikawa, Yu Homma, Fumi Matsuya and Midori Ichiko (Keio University)
Tutor: Akiko Takahira (Keio University)

International Conference “UMAC Tokyo Seminar: University Museums as a Cultural Commons: Cross-disciplinary Research and Education in Museums”
9-10 September 2019, Keio University Mita Campus North and East Buildings
Participants: 72 (Conference), 31 (Guided tour)
Keynote speakers: Yohko Watanabe (Keio University Art Center/Keio Museum Commons), Andrew Simpson (UMAC/Department of Ancient History, Macquarie University, AUS), Judy Willcocks (Central Saint Martins, London University of the Arts, UK), Kathryn Eccles (Oxford Internet Institute, University of Oxford, UK)

Tour Overview

Course A: Visiting University Museums
Historic Buildings of Meiji Gakuin University and Meiji Gakuin Historical Museum / Waseda University Aizu Museum / Meiji University Museum
Course B: Visiting Science Museums of Universities Josai University, Oishi Fossils Gallery of Mizuta Memorial Museum / Intermediatheque (The University Museum of The University of Tokyo) / Museum of Marine Science, Tokyo University of Marine Science and Technology
Course C: Visiting Cultural Institutions in Minato Area Sengakuji temple / Ajinomoto Foundation For Dietary Culture / NHK Museum of Broadcasting

Special Lecture and Guided Tour “Three Architects and International House of Japan”
3 October 2019, 14:00-17:00, International House of Japan
Participants: 34
Lecturer: Hiroshi Matsukuma (Professor at Kyoto Institute of Technology)

ArchitecTalk! “Whose Tokyo? The City as a Collective Project”
3 October 2019, 18:30-19:30, Keio University Mita Campus Ex Noguchi Room
Participants: 18
Lecturer: Jorge Almazan (Associate Professor at Keio University Faculty of Science and Technology)

Keio University Mita Campus Architecture Open Day
3, 5 October 2019, 10:00-17:00, Keio University Mita Campus
Participants: Ex Noguchi Room (278 people) / Mita Enzetsu-kan (480 people)
Architectural Guided Tour
Participants: 93 in total
Lecturer: Midori Moriyama (Keio University Art Center)

Lecture and Guided Tour “Visiting Temples in Local Area: Trans/Formation of Temple Town in Minato City”
25 November 2019, 10:00-16:00, Myōfukuji temple, Gyokuhōji temple and Ryūgenji temple
Participants: 34 people
Lecturer: Daisuke Ueno (Associate Professor at Keio University Faculty of Letters), Kazuhiro Nakane (19th Chief priest of Myōfukuji temple), Masaki Murayama (Chief priest of Gyokuhōji temple), Shinju Matsubara (Chief priest of Ryūgenji temple)

Art and Science Lecture “Rediscovering Tokyo Bay: Maritime Culture of Edo-mae”
8 December 2019, 14:00-16:00, Tokyo University of Marine Science and Technology [TUMSAT], Shinagawa Campus, Hakuyo Hall
Participants: 73
Lecturers: Midori Kawabe (Professor at TUMSAT), Hiroshi Kohno (Professor at TUMSAT), Masato Naito (Professor at Keio University Faculty of Letters)

諸國名所百景

[アルテファクト]

ARTEFACT

03

Features:
Sea / Sign of
the City

